徳島市埋蔵文化財発掘調査概要11

2001. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要11

2001. 3

徳島市教育委員会

例　　言

1　本書は、平成 9、11、12 年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査等の内、３遺跡４件についての概要報告書である。

2　報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。

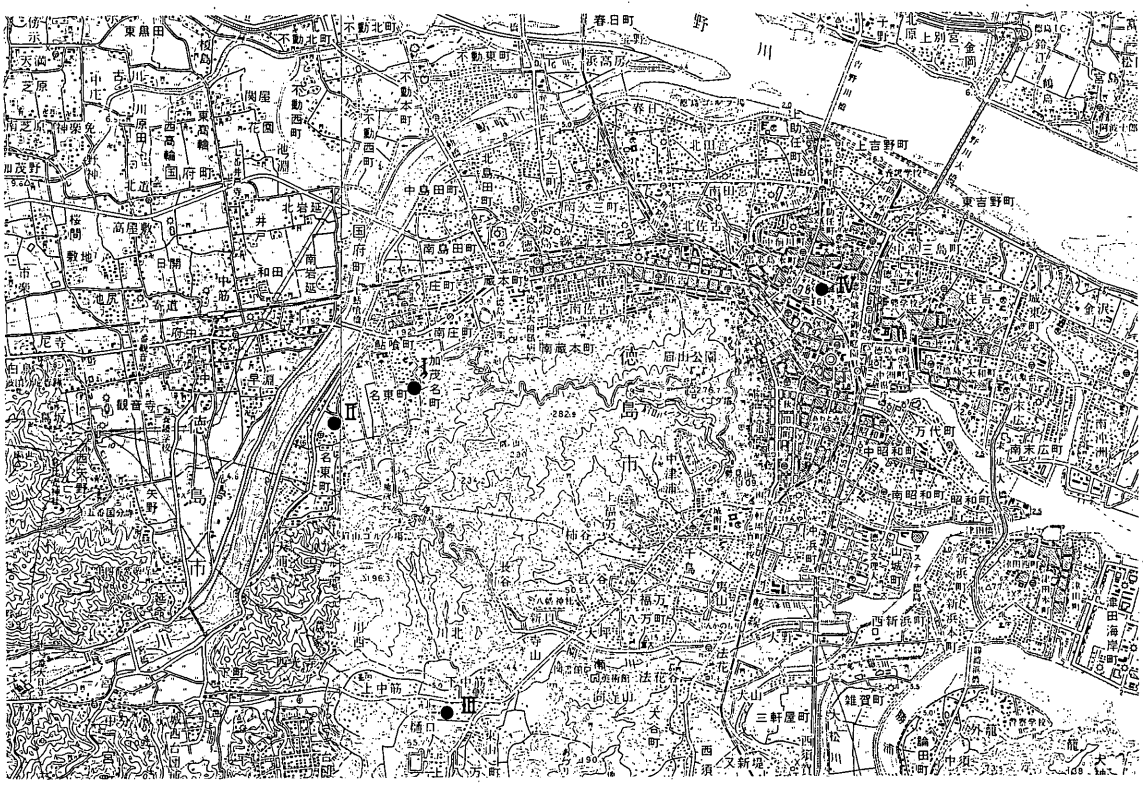
3　発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。

4　出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕　高木　淳　市川欣也　倉佐晃次　中野勝美　山口文子
青木健司　吉田祐子　露口啓子　澤田一人　折野絵美

5　本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵、保管する。

6　本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。
なお、編集は勝浦康守が行った。



調査地位置図（国土地理院発行 1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）
Ⅰ　名東遺跡　　Ⅱ　名東遺跡　　Ⅲ　樋口遺跡　　Ⅳ　徳島城跡

目　　次

序　文

例　言

目　次

本文目次

Ⅰ　名東遺跡（水路改良工事）……（三宅良明）……（1）

Ⅱ　名東遺跡（住宅建設工事）……（三宅良明）……（7）

Ⅲ　樋口遺跡（学校建設工事）……（勝浦康守）……（11）

Ⅳ　徳島城跡（確認調査）……（下田順一）……（27）

挿図図版

写真図版

挿　図　図　版

Ⅰ　名東遺跡（水路改良工事）
第１図　調査地位置図
第２図　遺構配置図
第３図　方形周溝墓 SL24 および出土遺物
第４図　溝 SD04 出土遺物
第５図　SP08(13)、SP09(14 ～ 22)、SP14(23 ～ 31)、SP16(32、33)、SP17(34、35)、SP20(36) 出土遺物

Ⅱ　名東遺跡（住宅建設工事）
第１図　調査地位置図
第２図　遺構配置図および出土遺物
第３図　方形周溝墓配置相関関係図

Ⅲ　樋口遺跡（学校建設工事）
第１図　調査地位置図
第２図　遺構配置図
第３図　盛土遺構および堆積土層図
第４図　盛土遺構出土遺物
第５図　盛土遺構出土遺物
第６図　土壙 SK34
第７図　土壙 SK34 出土遺物
第８図　土壙 SK34 出土遺物
第９図　不明遺構 SX01
第10図　不明遺構 SX01 出土遺物
第11図　土壙 SK10 (136 ～ 151)、SK26 (152 ～ 156)、Pit528（157)、Pit267（158、159)、包含層（160）出土遺物
第12図　溝 SD01 ～ 03 堆積土層図
第13図　溝 SD01 ～ 03 出土遺物
第14図　溝 SD03 出土遺物

Ⅳ　徳島城跡（確認調査）
第１図　調査区位置図
第２図　第１調査区遺構配置図および東壁土層図
第３図　第２調査区遺構配置図および東壁土層図
第４図　第３調査区遺構配置図および西壁土層図
第５図　第４調査区遺構配置図（第１遺構面）
第６図　第４調査区遺構配置図（第２遺構面）
第７図　第４調査区土層図
第８図　第１、２、４調査区出土遺物
第９図　第４調査区出土遺物
第10図　第４調査区出土遺物
第11図　第４調査区出土遺物
第12図　第４調査区出土遺物
第13図　第４調査区出土遺物

写　真　図　版

Ⅰ　名東遺跡（水路改良工事）
図版１上：方形周溝墓 SL24 周溝
　　下：方形周溝墓 SL24 周溝内甕１出土状況
図版２上:方形周溝墓 SL24 周溝（左）および溝 SD03
　　下：竪穴住居跡 SA01
図版３上：竪穴住居跡 SA02
　　下：竪穴住居跡 SA02
図版４上：溝 SD04 遺物出土状況
　　下：溝 SD04 遺物出土状況
図版５上：溝 SD04 底部状況
　　下：溝 SD04 完掘状況
図版６上：柱穴列検出状況
　　下：Pit（柱穴）群検出状況
図版７上：SP 09 遺物出土状況
　　中：SP14 遺物出土状況
　　下：SP14 遺物出土状況
図版８上：SP14 遺物出土状況
　　中：SP14 遺物出土状況
　　下：SP17 遺物出土状況
図版９上：方形周溝墓 SL24 周溝出土遺物
　　下：溝 SD04 出土遺物
図版10　溝 SD04 出土遺物
図版11　SP08(13)、SP09(16、21、22)、SP14(23、24、27、28) 出土遺物
図版12　SP09(18、19)、SP14(25、26)、SP16(33)、SP17(34、35) 出土遺物

Ⅱ　名東遺跡（住宅建設工事）
図版１　調査地全景
図版２上：方形周溝墓 SL25
　　下：方形周溝墓 SL25 主体部
図版３上：方形周溝墓 SL26 周溝内遺物出土状況
　　下：方形周溝墓 SL26 周溝内出土遺物

Ⅲ　樋口遺跡（学校建設工事）
図版１　検出遺構
図版２上：盛土遺構下底面
　　下：盛土遺構下底面
図版３上：盛土遺構下底面炭化物検出状況
　　中：盛土遺構遺物出土状況
　　下：盛土遺構遺物出土状況
図版４上：盛土遺構斜面崩壊土遺物出土状況
　　中：盛土遺構斜面崩壊土遺物出土状況
　　下：盛土遺構斜面崩壊土遺物出土状況

図版５上：土壙 SK34 遺物出土状況
下：土壙 SK34 遺物出土状況
図版６上：土壙 SK34 遺物出土状況
下：土壙 SK34 遺物出土状況
図版７上：不明遺構 SX01 遺物出土状況
下：不明遺構 SX01 遺物出土状況
図版８上：不明遺構 SX01 堆積状況
下：不明遺構 SX01
図版９上：溝 SD03 遺物出土状況
下：溝 SD03 遺物出土状況
図版10 上：溝 SD01 ～ 03
中：土壙 SK26 遺物出土状況
下：土壙 SK26 遺物出土状況
図版11　盛土遺構出土遺物
図版12　盛土遺構出土遺物
図版13　盛土遺構(32、33、37、39、40、42)、土壙 SK34(44、46 ～ 50、52、55)出土遺物
図版14　土壙 SK34 出土遺物
図版15　土壙 SK34 出土遺物
図版16　不明遺構 SX01 出土遺物
図版17　不明遺構 SX01 出土遺物
図版18　土壙 SK10(136 ～ 140、142 ～ 145、147 ～ 150)、Pit267(158、159)、包含層(160) 出土遺物
図版19　溝 SD01(162)、SD02(161、163 ～ 170)、SD03(172、173、177 ～ 180)出土遺物
図版20　溝SD03出土遺物
図版21　溝SD03出土遺物

Ⅳ　徳島城跡（確認調査）

図版１　徳島城西御丸峻陵様御造営之図
図版２　第１調査区石垣および石組暗渠検出状況
図版３上：第１調査区石垣検出状況
下：第１調査区石組暗渠検出状況
図版４上：第２調査区第１遺構面石組遺構検出状況
下：第２調査区第１遺構面礎石栗石検出状況
図版５上：第２調査区第２遺構面溝検出状況
下：第２調査区第２遺構面馬場跡および Pit 群
図版６　第２調査区第２遺構面建物跡検出状況
図版７上：第３調査区石垣検出状況
下：第３調査区裏込栗石検出状況
図版８上：第４調査区第１遺構面検出状況
下：第４調査区第１遺構面石組および敷石遺構検出状況
図版９上：第４調査区第２遺構面
下：第４調査区第２遺構面土壙 SK01 遺物出土状況
図版10 上：第４調査区第２遺構面土壙 SK04 断面
下：第４調査区第２遺構面土壙および Pit 群
図版11　第１調査区石組暗渠（1 ～ 4)、第２調査区礎石柱建物跡（5 ～ 11）出土遺物
図版12　第２調査区石組溝（12)、第４調査区石敷（13 ～ 15)、土壙 SK01（16 ～ 20）出土遺物
図版13　第４調査区土壙 SK02 出土遺物
図版14　第４調査区土壙 SK03(31 ～ 36、44)、SK04（37 ～ 43）出土遺物
図版15　第４調査区土壙 SK04 出土遺物
図版16　第４調査区土壙 SK06 出土遺物
図版17　第４調査区土壙 SK09 (68 ～ 73)、SK10 (74 ～ 81）出土遺物
図版18　第４調査区土壙 SK04(82 ～ 87)、SK06(88)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくしましまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
巻次	11
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	三宅良明・勝浦康守・下田順一
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770－8571 徳島市幸町2丁目5番地　TEL 088－621－5418
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みょうどう 名東	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 みょうどうちょう 名東町	36201	－	34度 3分 50秒	134度 30分 29秒	19971006～ 19971112	130	水路改良工事に伴う事前調査
みょうどう 名東	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 みょうどうちょう 名東町	36201	－	34度 3分 41秒	134度 29分 59秒	19990913～ 19990923	100	住宅建設工事に伴う事前調査
ついぐち 樋口	とくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 かみはちまんちょう 上八万町	36201	－	34度 1分 59秒	134度 30分 39秒	19971201～ 19980531	800	学校建設工事に伴う事前調査
とくしまじょうせき 徳島城跡	どくしまけんとくしまし 徳島県徳島市 とくしまちょう 徳島町	36201	－	34度 4分 22秒	134度 33分 16秒	20000701～ 20000927	125	保存整備に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名東	集落跡	弥生 古代	竪穴住居跡 方形周溝墓 Pit	弥生土器 土師器 黒色土器	
名東	集落跡	弥生	方形周溝墓	弥生土器	
樋口	集落跡	弥生 古墳 古代 中・近世	盛土遺構 土壙 溝 Pit 土壙	弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 陶磁器	
徳島城跡	城跡	近世	建物跡 土壙 石垣 石組暗渠	陶磁器 瓦 古銭	

Ⅰ　名東遺跡（水路改良工事）

1　調査に至る経緯と経過（第１図）

名東遺跡は鮎喰川の旧河川によって形成された、標高 T.P. ＋ 7m 前後の沖積微高地上に立地する縄文時代晩期から中・近世に至る複合遺跡として周知されているが、現在、集落の様相については大きく弥生集落と中世集落の二つの側面があることが指摘されている[1]。

今回ここに調査概要を報告する発掘調査は、徳島市土木部建設課による 1997 年（平成 9）の名東町１丁目 NO.3 排水路改良工事に伴い実施したものである。調査地は名東遺跡のほぼ北東端部に位置し、すぐ東側には名東遺跡と並んで鮎喰川流域の弥生集落を代表する南庄遺跡が隣接している。仮に、一集落を微高地単位で把握した場合、当該地域の遺跡の連続的な広がり方によってはむしろ南庄遺跡に包括される可能性のある地域である。

いずれにせよ、当該地が鮎喰川東岸に展開する遺跡群のほぼ中心部に位置し、これまで周辺部で実施されてきた調査成果も踏まえると遺構の存在は確実と考えられたので、主管課との協議において工事に先立ち全面発掘調査を実施することで合意に達した。調査は 130㎡を対象に約１カ月間実施し、弥生時代、古墳時代、平安時代、近世以降の各遺構を検出した。

2　調査概要（第２図）

調査地は既存の農業用水路となっており、周辺部の現地表面の標高は、T.P. ＋ 6.5m 前後を測る。基本層序は、上層から水田耕作土、旧水田耕作土Ⅰ・Ⅱ、黄褐色シルト層（遺構検出面）であり、遺構検出面は標高 T.P. ＋６ｍである。調査地の大半は水路によって削平および攪乱を受けており、遺物包含層はほとんど存在しなかった。主な検出遺構は、以下のとおりである。

第１図　調査地位置図（1：2500）

（ｉ） 弥生時代

弥生時代の遺構としては方形周溝墓１基、木棺墓？１基、竪穴住居跡１棟、溝１条、 Pit 数基を検出した。

① 方形周溝墓 SL24（第２、３図、図版１、２、９）

調査区北端で一端が収束する溝の一部を検出した。検出部での最大幅 1 m、深さ 60cm を測る。相対する溝や主体部は検出されていないが、溝の規模や形態などから方形周溝墓の周溝と考えられる。遺構上面が削平されていることにもよるが、埋土は暗褐色土単一層で、その上部からは甕(1)が出土している。甕１は底部が絞られやや細身の形態を呈する。口縁部は「く」の字状に外反させ先端部をつまみ上げる。体部外面は下半部が縦位 ヘラミガキ、上半部がハケ、内面は下半部に ヘラケズリが施される。底部穿孔等は見られないが、方形周溝墓の供献土器と考えられる。

② 木棺墓 SM01（第２図）

調査区のほぼ中央部で幅 90cm、深さ 25cm の溝状の遺構を検出した。片端が現代の溝によって削平されており、もう片端は調査区外のため全長は不明であるが、水平な底部の側壁沿いに平行して木棺の板材の痕跡らしき黒褐色の２条の線状の染みが検出されたので、木棺墓の可能性を考える。ただし、単独墓であるか方形周溝墓の主体部であるかは不明である。遺物は出土していない。

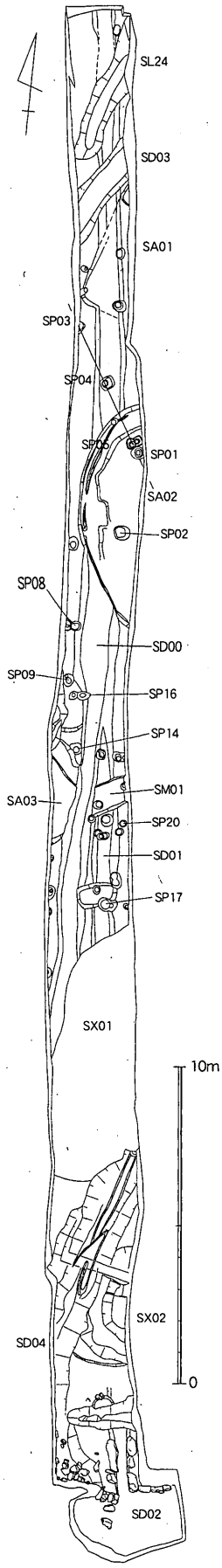
③ 竪穴住居跡 SA02（第２図、図版３）

全体の約３分の１を検出した。復原径推定７ｍの円形住居跡で、調査区壁面では最高で 30cm の壁高が残っていることが確認できた。側壁沿いには壁溝の痕跡が残る。主柱穴を成すと見られる。 Pit は SP01 と SP02 の２基が確認できたが、SP02 は結晶片岩の根石を伴っていた。遺物は SP02 内から甕の破片、床面から甕、鉢の破片が少量出土している。弥生中期末頃の年代が考えられる。

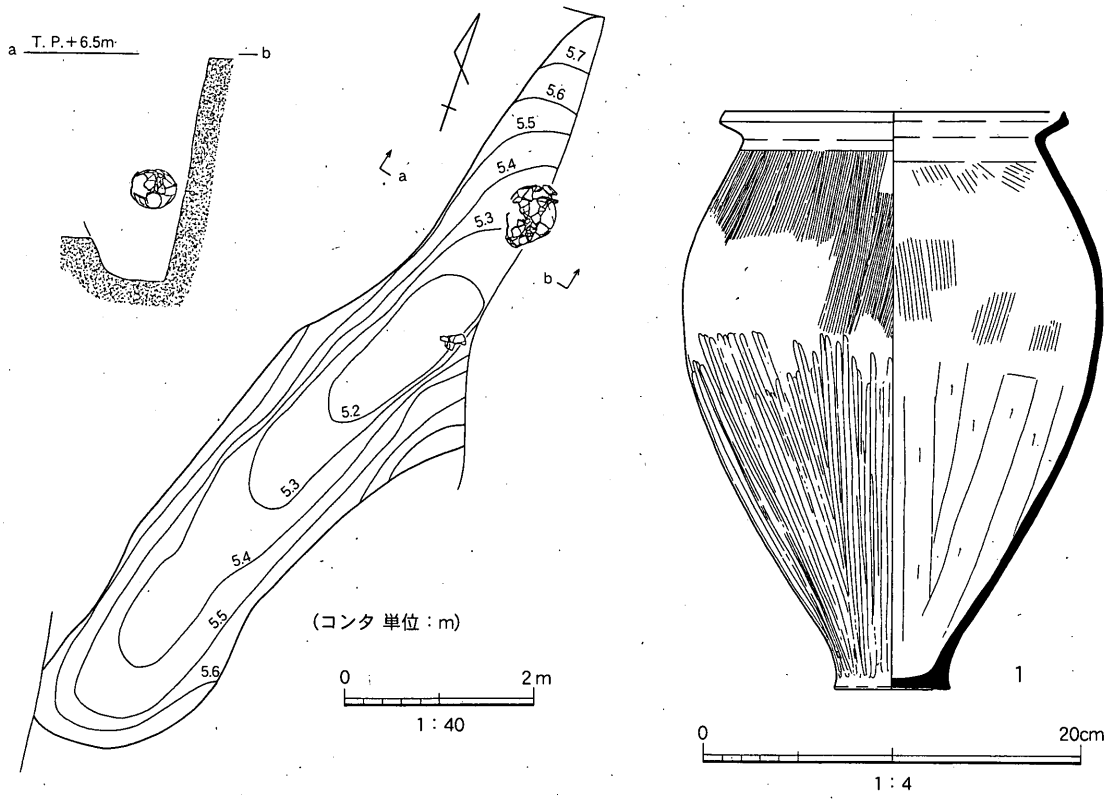
④ 溝 SD04（第２、４図、図版４、５、９、10）

調査区南側で南南西～北北東方向の溝を検出した。幅２ｍ、深さ１ｍを測り、断面形はＶ字形を呈する。埋土は概ね３層に大別される。第１層（上層）は暗褐色弱粘質土で最厚部で 50cm、第２層（中層）は黄褐色弱粘質土で最厚部で 30cm、第３層（下層）は砂礫層で最厚部で 20cm の堆積となっている。最下層の砂礫層は溝底部が 30 ～ 40cm 幅で一段深く落ち込み、底浚え状の痕跡を呈した部分への堆積である。遺物は第１層下位に集中し、壺(2 ～ 4)、甕(5 ～ 10)、高坏(11、12)が出土しているが、ほとんどが破片である。

壺２は球形の体部からやや厚手の頸部が外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。体部内面下半には ヘラケズリの痕跡が見られ、上半には粘土紐接合痕が残る。外面は磨滅により調整痕をとどめていない。



第２図　遺構配置図(1：200)



第３図　方形周溝墓 SL24 および出土遺物

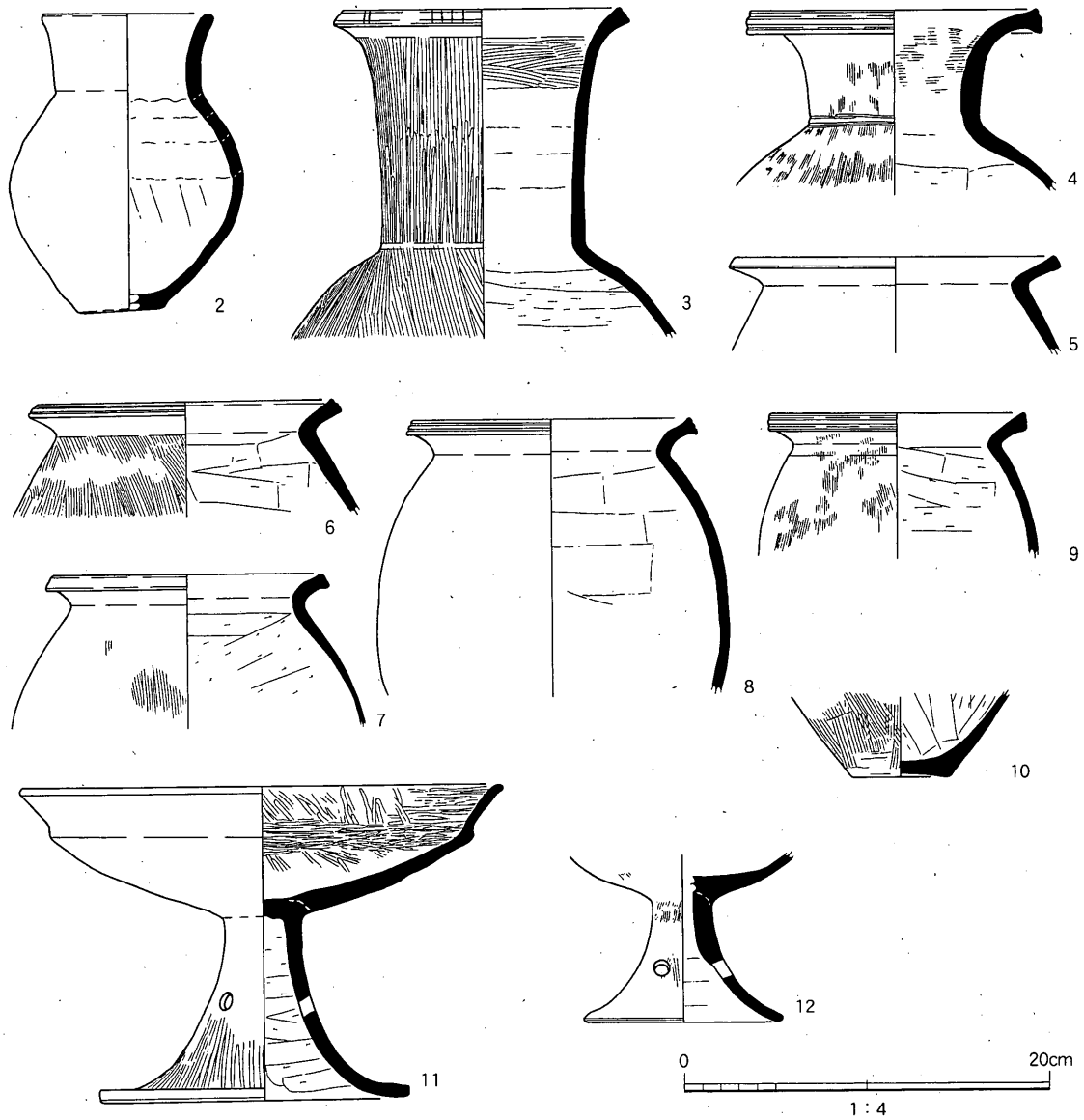
３は直立する頸部にやや外反する口縁部を持つ長頸壺である。わずかに肥厚する口縁端面はナデの後、縦位に櫛描文を加飾する。外面はハケの後、頸部下半に ヘラミガキが施される。体部内面は横位 ヘラケズリ、頸部内面には粘土紐接合痕が残り、その上位一単位分の箇所のみ横位のハケが施されている。４は口縁端部に２条の凹線を施し、体部と頸部の境界にはヘラ状工具による２条の直線文を施す。体部内面は横位の ヘラケズリ、頸部内面は横位のハケが施される。甕は「く」の字状に外反する口縁部を持ち、上下にやや肥厚させ端部をナデでおさめるもの（5、6)、凹線あるいは擬凹線を施すもの（6、8、9)がある。体部外面は縦位および斜位のハケ、内面下半部には縦位の ヘラケズリ(10)、上半部には横位あるいは斜位の ヘラケズリが施される。高坏 11 は完形品である。口縁部は皿状の坏部の深さと同等の高さで外反し、屈曲部には明瞭な稜線が生じる。坏部内面は斜位および横位の ヘラミガキが施される。脚部には３つの穿孔があり、裾部は水平方向へとなだらかに広がる。脚部外面は縦位の ヘラミガキ、内面は横位の ヘラケズリが施される。坏部と脚部の接合法は差込式である。12 は脚裾部の広がりが少ない。坏部、脚部とも外面はハケの痕跡を残す。脚部内面は横位のナデである。脚部には３つの穿孔がある。坏部と脚部の接合法は差込式である。

（ii）　古墳時代

古墳時代の遺構としては竪穴住居跡２棟を検出した。

①　竪穴住居跡 SA01（第２図、図版２）

平面形が方形を呈する竪穴住居跡であるが規模は不明である。壁際で焼土と炭化物の集中箇所が検出された。削平により壁高もほとんどとどめていないため構造は不明であるが、これを側壁中央部に位置するカマドの痕跡と考えれば、この住居跡は一辺推定７ｍになる。遺物は僅少で、詳細な時期は不明であるが、古墳時代の範疇に含まれるものと考える。



第４図　溝 SD04 出土遺物

② 竪穴住居跡 SA03（第２図）

調査区のほぼ中央部で、現代溝に切られるが、平面形が方形を呈する遺構を確認した。明確な出土遺物はなく詳細は不明であるが、SA01 と同様、古墳時代の竪穴住居跡の可能性を考える。

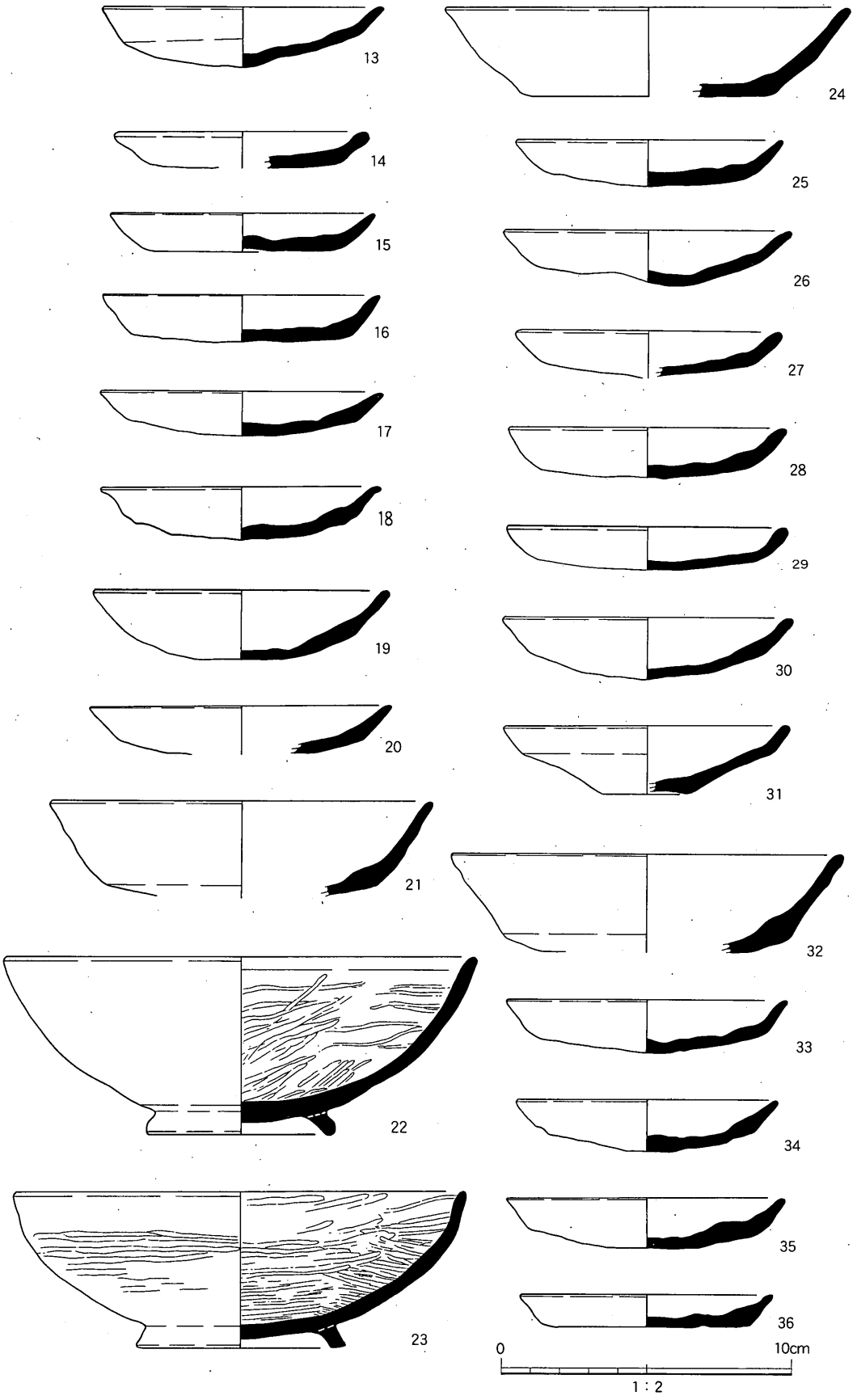
(iii) 平安時代

① Pit(SP) 群（第３図、図版６～８）

明確な建物跡の検出には至らなかったが、掘立柱建物跡等を構成すると考えられる Pit(SP) 群を検出した。

SP03 ～ 05 は柱間隔 2m で一直線上に並ぶ。いずれの Pit も一辺 30 ～ 40cm の平面形が方形を呈し、直径 20cm 前後の柱痕を残す。深さは 26 ～ 30cm を測る。遺物は出土していない。掘立柱建物跡あるいは柵列跡の可能性が考えられる。

柱穴内から比較的多量の遺物がまとまって出土しているのは SP09 と SP14 であり、いずれも一括廃棄あるいは祭祀行為としての一括埋納が行われた痕跡が窺える。SP09 では、土師器小皿（14



第５図　SP08(13)、SP09(14 ～ 22)、SP14(23 ～ 31)、SP16(32、33)、SP17(34、35)
SP20(36) 出土遺物

～ 20)、土師器坏(21)、黒色土器A類椀(22)が出土している。SP14では黒色土器B類椀(23)と土師器小皿（25 ～ 31)、土師器坏(24)が出土している。23の外面は回転ヘラミガキ、内面は6分割の ヘラミガキが施されている。高台端面はほぼ平坦面をなす。坏21の外面はナデの痕跡が段状に顕著である回転台土師器である。また、土師器小皿も全て回転台土師器である。SP17でも完形の回転台土師器皿（34、35)が出土している。遺物出土のPitについても建物跡を構成する配列は確認できず、相関関係は不明である。

② 溝SD03（第2図、図版2）

方形周溝墓SL24と竪穴住居跡SA01の間で検出された南西～北東方向の溝で、幅90cm、深さ45cmを測り、断面形が逆台形を呈する。底部から須恵器片が数点出土しているが、時期は不明である。前述のPit群とほぼ同時期頃に位置づけられるものであろうか。

(iv) 近世以降（第2図）

現代溝(SD00)に先行する溝状遺構(SD01)、石組配列で築いた取水あるいは排水路(SD02)、昭和の前半頃まで利用され、埋められたと考えられる溜池跡など（SX01、02)、水田農耕に伴う灌漑施設としての遺構が検出されている。前述した平安時代以前の各遺構は、これらによる攪乱および削平を受けていた。

3 小 結

今回の調査で検出された方形周溝墓SL24は、名東遺跡で確認された24基目の方形周溝墓（名東24号墓）であり、名東遺跡では最も北東端に位置する。これまで周辺部において方形周溝墓が検出された主な調査例としては、1988年(昭和63)の天理教国名大教会地区(名東2号～7号墓)[2]や今回の調査地から南西150 mの地点で実施された名月苑地区(名東8号～14号墓)[3]などがあり、こうした検出事例に基づき、名東集落の居住空間を大きく取り囲むように方形周溝墓域が存在することが想定されている[4]。今回の名東24号墓は、名東遺跡とその東北側に隣接する南庄遺跡との境界付近に位置し、当該期の両集落がこうした墓域によって画されていたと捉えることが可能であるかもしれない。

溝SD04は断面形態などから判断して、人為的に掘られた溝と考えられる。環濠として機能していた溝かどうかは不明であるが、これについても集落を画する溝の性格を有していた可能性もある。

土師器、黒色土器などの日常雑器を共伴するPit群は、10～11世紀頃の年代が与えられよう。建物跡の確認には至らなかったが、集落の一角をなすものであり、名東遺跡における古代～中世の集落の広がりや存続期間の様相を究明していく上においては、貴重なデータの蓄積になったといえよう。

(註)

(1) 「名東遺跡」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要9』、徳島市教育委員会、1999年。

(2) 『名東遺跡発掘調査概要－名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』、名東遺跡発掘調査委員会、1990年。

(3) 「Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要－老保健施設建設工事に伴う発掘調査－」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要2』、徳島市教育委員会、1992年。

(4) (2)に同じ。

Ⅱ　名東遺跡（住宅建築工事）

1　調査に至る経緯と経過（第１図）

名東遺跡は鮎喰川旧河川の沖積作用によって形成された、標高 T.P. ＋ 7m 前後の微高地上に広がる縄文時代晩期から江戸時代に至る県内屈指の集落遺跡である。

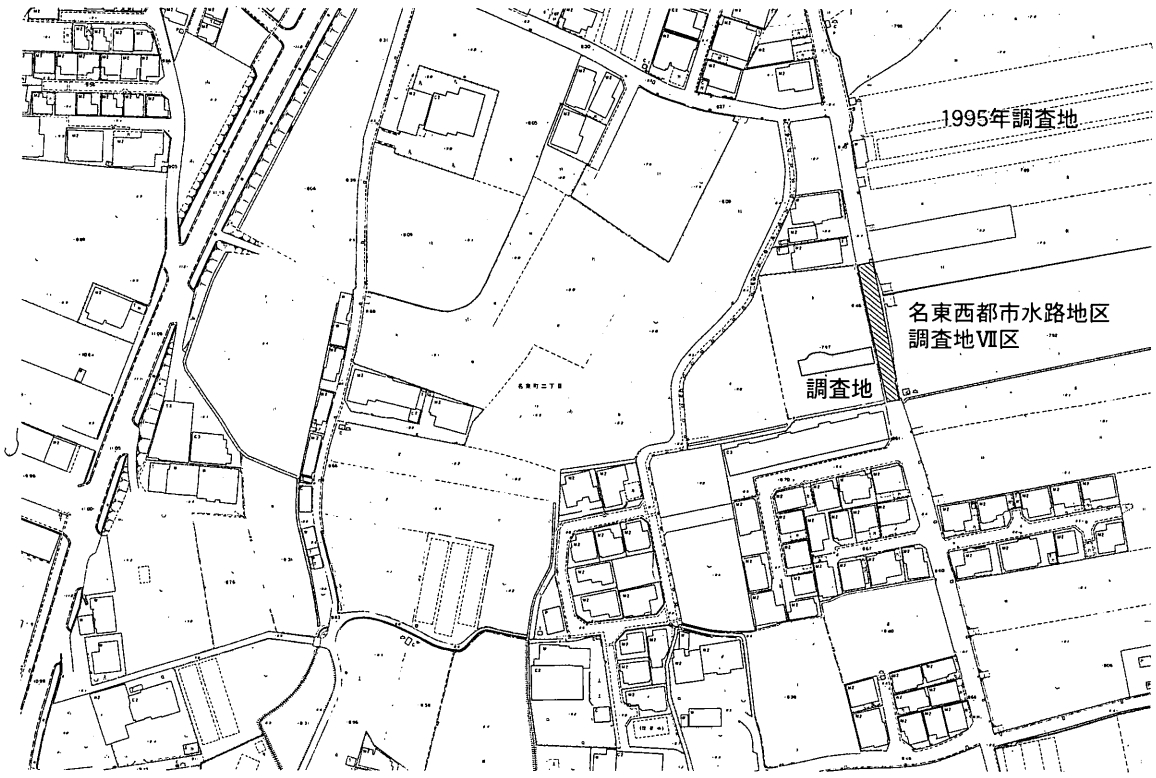
この名東遺跡のほぼ西端部にあたる名東町２丁目 158 番地先において、宅地造成および住宅建築工事（平成 11 年９月３日付け埋蔵文化財発掘届出書）に伴う事前の確認調査を実施した。その結果、遺構埋土と判断される暗褐色土の面的な広がりが確認されたため、事業主体者との間で埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を締結し、本調査を実施するに至った。調査は道路敷設部分の内 100 ㎡を対象に 1999 年（平成 11）９月 13 日から９月 23 日まで実施し、方形周溝墓の存在を確認した。

名東遺跡における方形周溝墓の初見（名東１号墓）は、今回の調査地の隣接する地域で行われた 1987 年（昭和 62）の名東西都市下水路建設工事に伴う調査においてである[1]。以後、13 年間に名東遺跡での方形周溝墓の検出例は増加し，今日では、名東遺跡における弥生時代中期後半の代表的な墓制として位置付けることが可能である[2]。

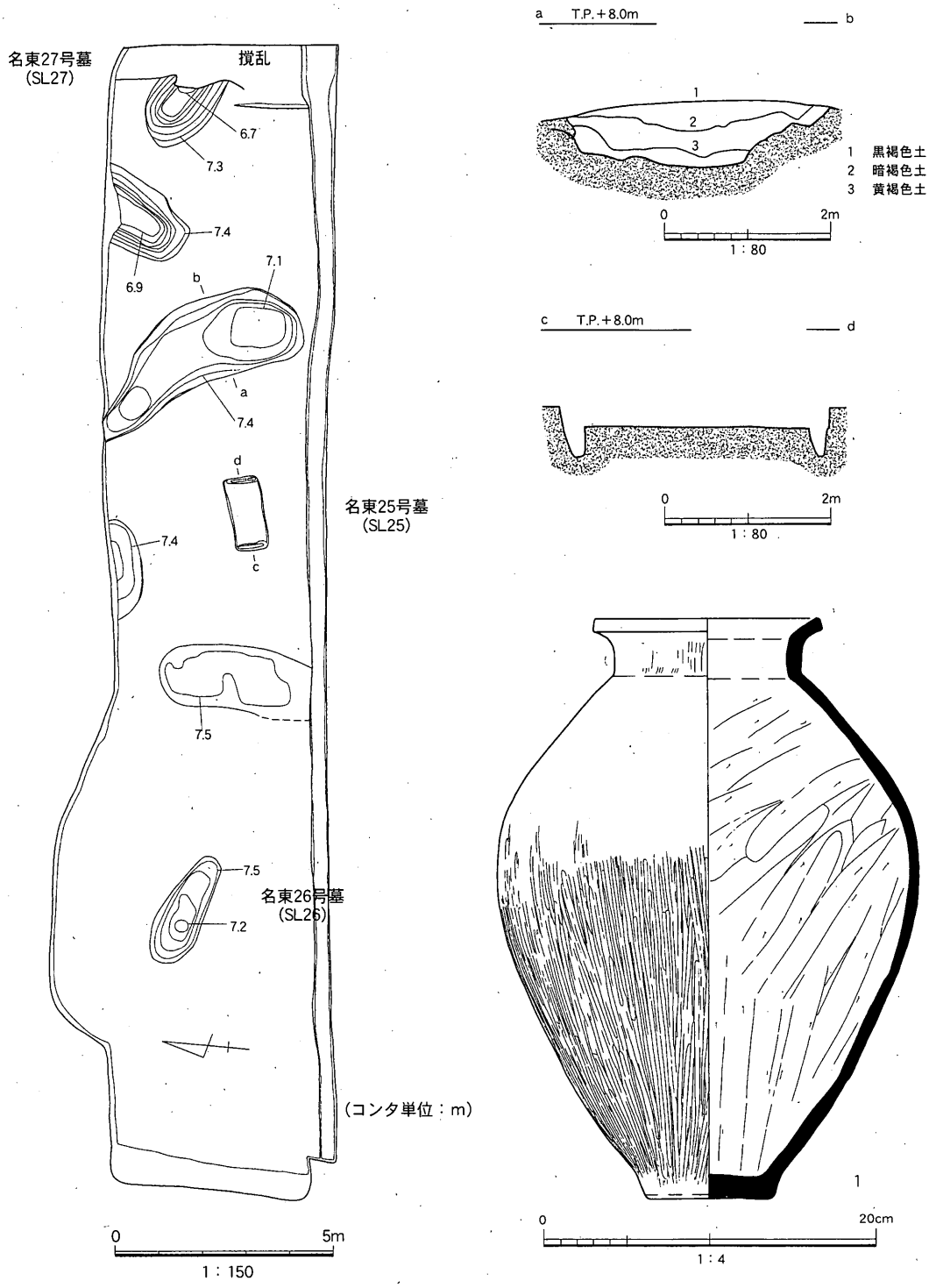
2　調査概要

調査地の現地表面は、標高 T.P. ＋ 8m を測る。基本層序はⅠ．現代水田耕作土（層厚 15cm）、Ⅱ．旧水田耕作土（層厚 10 ～ 15cm）、Ⅲ．黒褐色土（層厚 15cm：遺物包含層または方形周溝墓埋土）Ⅳ．明黄褐色土（遺構検出面であり T.P. ＋ 7.55 m）となっている。

調査では、方形周溝墓３基の存在を想定させる周溝を検出した。以下、調査の概要を述べる。



第１図　調査地位置図（1：2500）

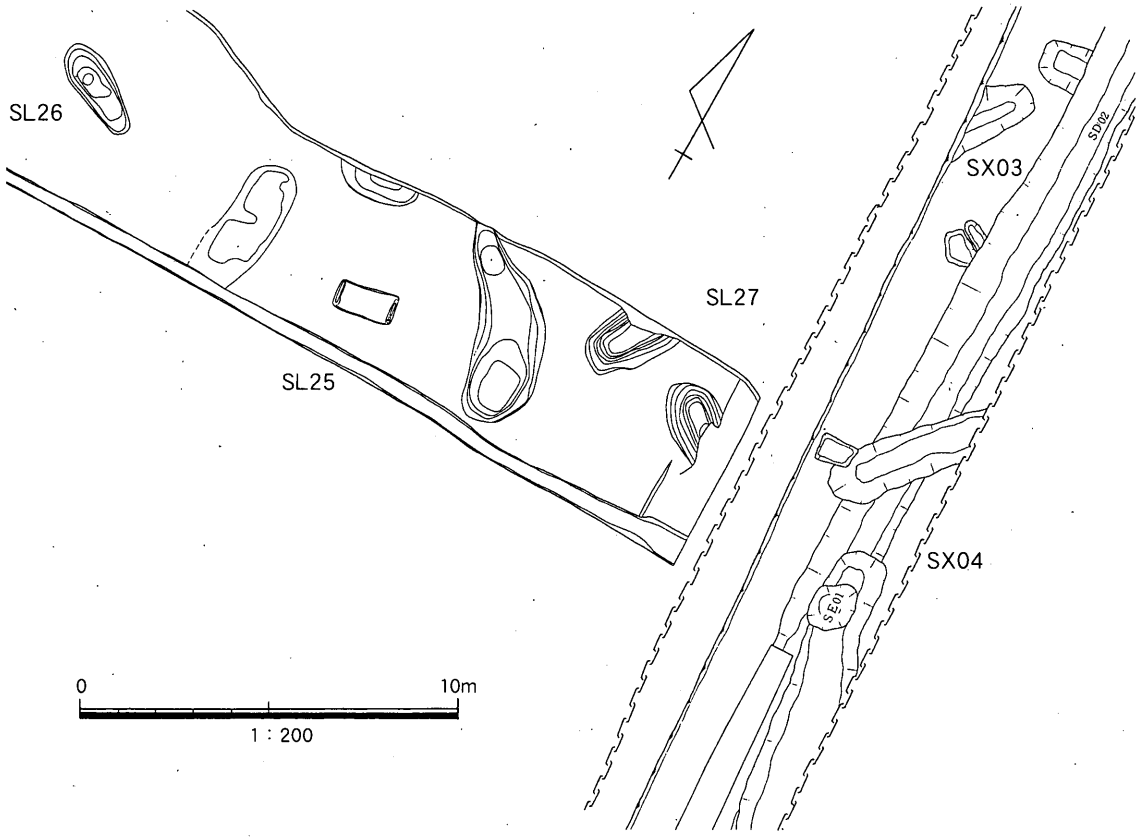


第２図　遺構配置図および出土遺物

① 方形周溝墓 SL25（名東 25 号墓）（第 2、３図、図版 1、２）

東・西・北周溝を検出した。区画部が東西６ｍ、南北推定５ｍを測り、四隅で周溝が途切れる形態を示す。東周溝は長さ 5m、幅 1.8m、深さ 45cm、西周溝は長さ推定 4m、幅 1.5m、深さ８ cm、北周溝は長さ 2.2m、幅推定 1m、深さ 22cm を測る。いずれの周溝内からも遺物は出土していない。

この方形周溝墓では区画中央部において、主体部を１基検出した。墓壙は長さ 1.7m、幅 80cm を測り、深さ 10cm を測る。墓壙床面の両短辺部には幅 15cm、深さ 20cm の小口穴が残っており、埋葬施設は床面短辺部に溝状掘込み（小口穴）を設けて小口板を埋め込み、それを支えに側板を立て



第３図　方形周溝墓配置相関関係図

るいわゆる「Ⅰ型木棺」の棺形態の木棺墓である[3]。なお、西側小口穴内から甕の体部片が４点出土している。

② **方形周溝墓 SL26**（名東 26 号墓）（第 2、3 図、図版 3）

25 号墓の西側 4m の所で、長さ 2.6m、幅 1.1m、深さ 40cm の収束する小規模な溝が単独で検出された。相対する溝は検出されていないが、溝の形態等から一連の方形周溝墓群を構成する溝であると考えられる。溝の底部からは短頸壺(1)が出土している。短頸壺 1 は体部外面下半部には縦位 ヘラミガキ、内面には縦位および斜位の ヘラケズリが施されている。

③ **方形周溝墓 SL27**（名東 27 号墓）[4]（第 2、3 図）

調査区東端で、直角に向き合い収束する２本の溝を検出した。方形周溝墓の西・南周溝をなす溝である。西周溝は名東西都市下水路へ延びており、前述の 1987 年の調査地Ⅶ区で不明遺構 SX03 として検出されている溝につながる可能性がある。この場合、同調査地Ⅶ区で方形周溝墓 SX04 として検出されている名東１号墓の北周溝を東周溝として共有する。長辺推定 11 ～ 12m 、短辺 6m の平面形が長方形を呈し、四隅が途切れる形態の方形周溝墓の存在が想定される。

3　小　結

今回の調査では３基の方形周溝墓が検出され、名東遺跡における方形周溝墓の検出件数は合計 27 基となった。また、今回検出された遺構は方形周溝墓のみであり、旧鮎喰川に向かって低下していく微高地の西側縁辺部付近に方形周溝墓域が広がっていることを改めて認識する機会となった[5]。

名東25号墓の主体部検出例は、名東6号墓、12号墓に次ぎ3例目である[6]。今後の調査において主体部の残った方形周溝墓あるいは異なる形態の墓の検出例が増加すれば、その棺形態や埋葬習俗に代表される墓制の差異などから、集落の時間的変遷や地域的格差、あるいはその背後に存在する集団要員についても言及することが可能になると思われる。

（註）

(1) 「第Ⅲ章　名東西都市下水路築造工事に伴う名東遺跡発掘調査概要－昭和61・62年度－」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要1』、徳島市教育委員会、1989年。

(2) 近年では、鮎喰川西岸の矢野遺跡の発掘調査においても方形あるいは円形周溝墓の検出例が報告されるようになってきた。『阿波国府跡発掘調査報告書』、徳島市教育委員会、1999年。

(3) 福永伸哉「5. 木棺墓」『弥生文化の研究8』所収、東京、1987年。

(4) 『平成11年度徳島市文化財だより』、徳島市教育委員会、2000年。において名東1号墓としたが、名東27号墓に訂正する。

(5) 名東西都市下水路調査地Ⅶ区をはさんですぐ東側で、1995年（平成7）に実施された調査においても方形周溝墓5基（名東19号～23号墓）が検出されている。「Ⅰ　名東遺跡」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要8』、徳島市教育委員会、1998年。

(6) 『名東遺跡発掘調査概要－名東町2丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』、名東遺跡発掘調査委員会、1990年。

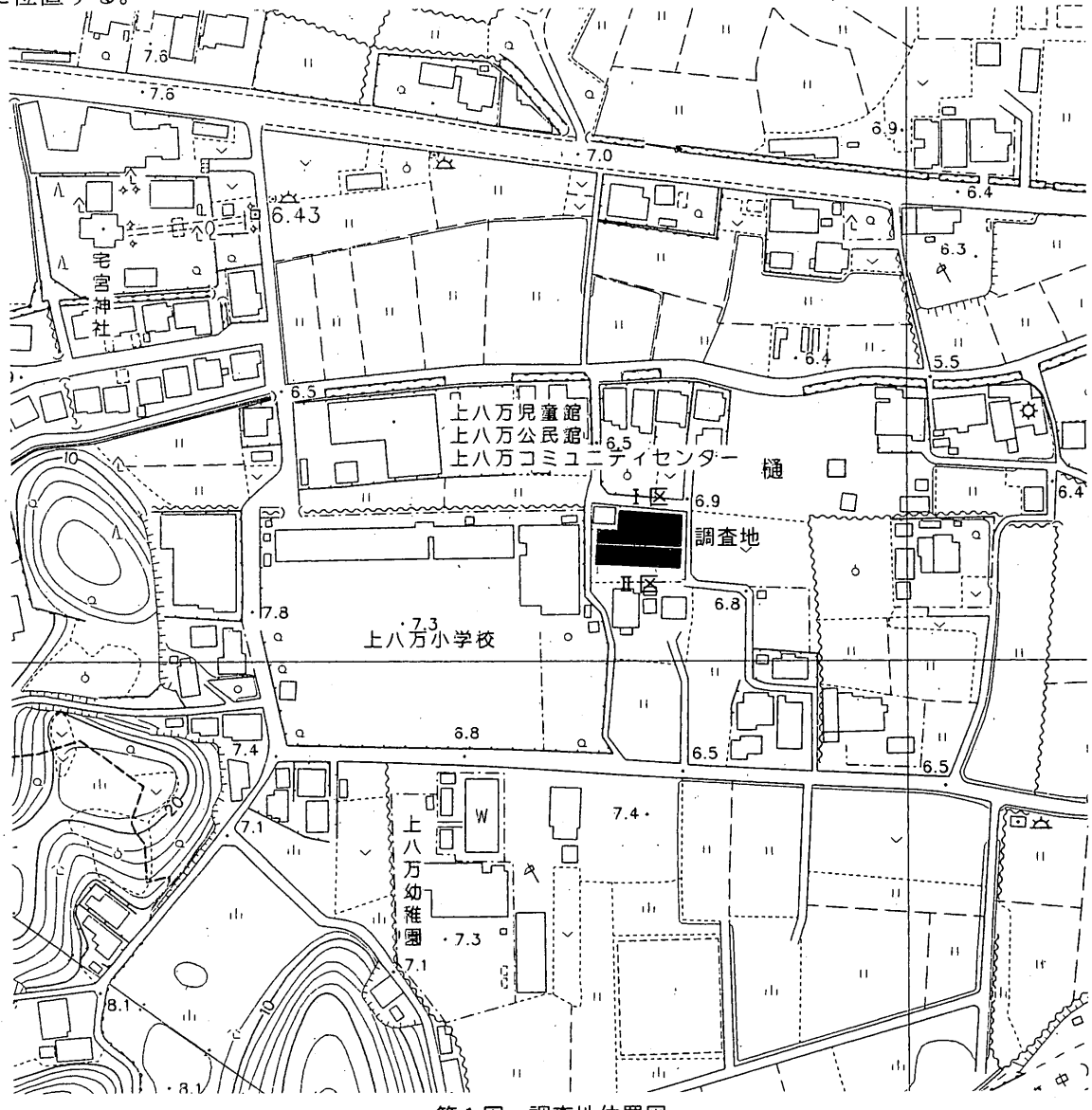
「Ⅰ. 名東遺遺跡発掘調査概要－老保健施設建設工事に伴う発掘調査－」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要2』、徳島市教育委員会、1992年。

Ⅲ　樋口遺跡（学校建設工事）

1　位置と環境（第１図）

樋口遺跡は園瀬川中流域南岸の上八万町樋口に所在する、上八万小学校を中心に広がるとされる集落遺跡である。樋口遺跡ではこれまでに、1982 年の上八万幼稚園の新築工事、1983 年の上八万小学校体育館建設工事[(1)(2)]、1986 年の区画整理事業[(3)]、1990 年の上八万 コミュニティーセンター建設工事に伴う発掘調査が実施[(4)(5)]されており、弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良・平安～鎌倉・室町、江戸時代の遺構、遺物が確認されている。また、近隣地には銅鐸出土の美田遺跡、前期古墳の巽山古墳、後期古墳の樋口古墳群、式内社である宅宮神社が所在することから、園瀬川流域において展開した重要な遺跡が密集する地域である。眉山の南側に位置する遺跡群において、断続的ではあるが、各時代において拠点的な集落経営が行われた遺跡であり、市内遺跡群においても屈指の複合遺跡として位置付けられる。しかし、これまでの調査では、概ね、遺跡の年代観を知る程度に留まっている感があり、遺跡の広がりや様相の把握までには及んでいない。

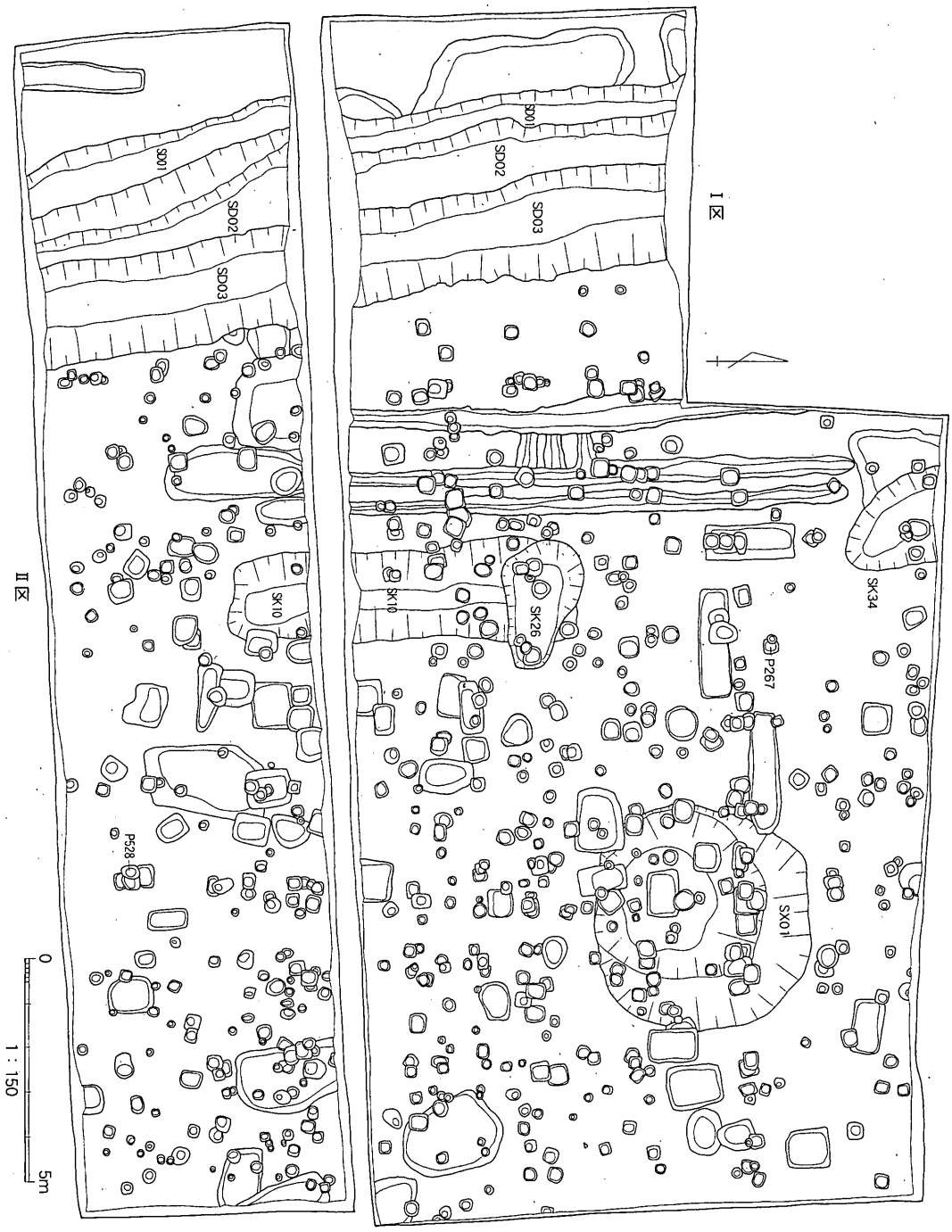
今回の調査は、上八万小学校の増築工事に伴うものであり、調査地（Ⅰ、Ⅱ区）は既設校舎の東側に位置する。



第１図　調査地位置図

2　基本層序（第2、3図、図版1）

調査地周辺における現地表面の標高はT.P.＋6.2mを測る。現代耕作土層（0層）下に1・2層が堆積し、2層上面が鎌倉・室町時代以降の遺構検出面、下面が弥生～古墳および奈良・平安時代の遺構検出面である。以下、主な遺構、遺物について概略する。



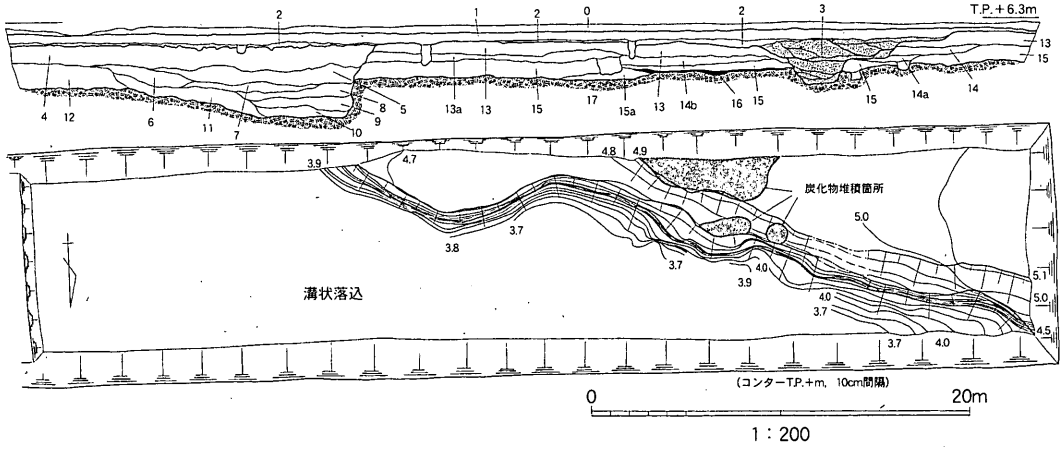
第2図　遺構配置図

3　遺構と遺物

(i)　弥生～古墳時代

①　盛土遺構（第３～５図、図版２～４、11～13）

Ⅱ区において確認した層厚80cmを測る盛土である。盛土層下底面には土壙状の浅い凹みが３カ所みられ、焼成痕および炭化物が集散する。盛土行為以前に行われた焼成に伴う行為の痕跡と考えられる。盛土に並行して溝状落込が見られることから、堤防状の土盛遺構とも考えられるが明確ではない。なお、溝状落込は水流堆積により一気に埋没する。



0　現代耕作土（0層）
1　灰色～浅黄色～黄灰色砂質シルト（旧耕作土）（1層）
2　にぶい黄褐色砂質シルト（2層）
3　SD01～03

流水堆積層
4　にぶい黄色シルト
5　黄色シルト
6　黄色組砂
7　浅黄色シルト
8　黄色粗砂
9　灰黄色～にぶい黄色細砂
10 明緑灰色シルト～細砂
11 淡黄色粘土質シルト
12 明黄褐色シルト～細砂

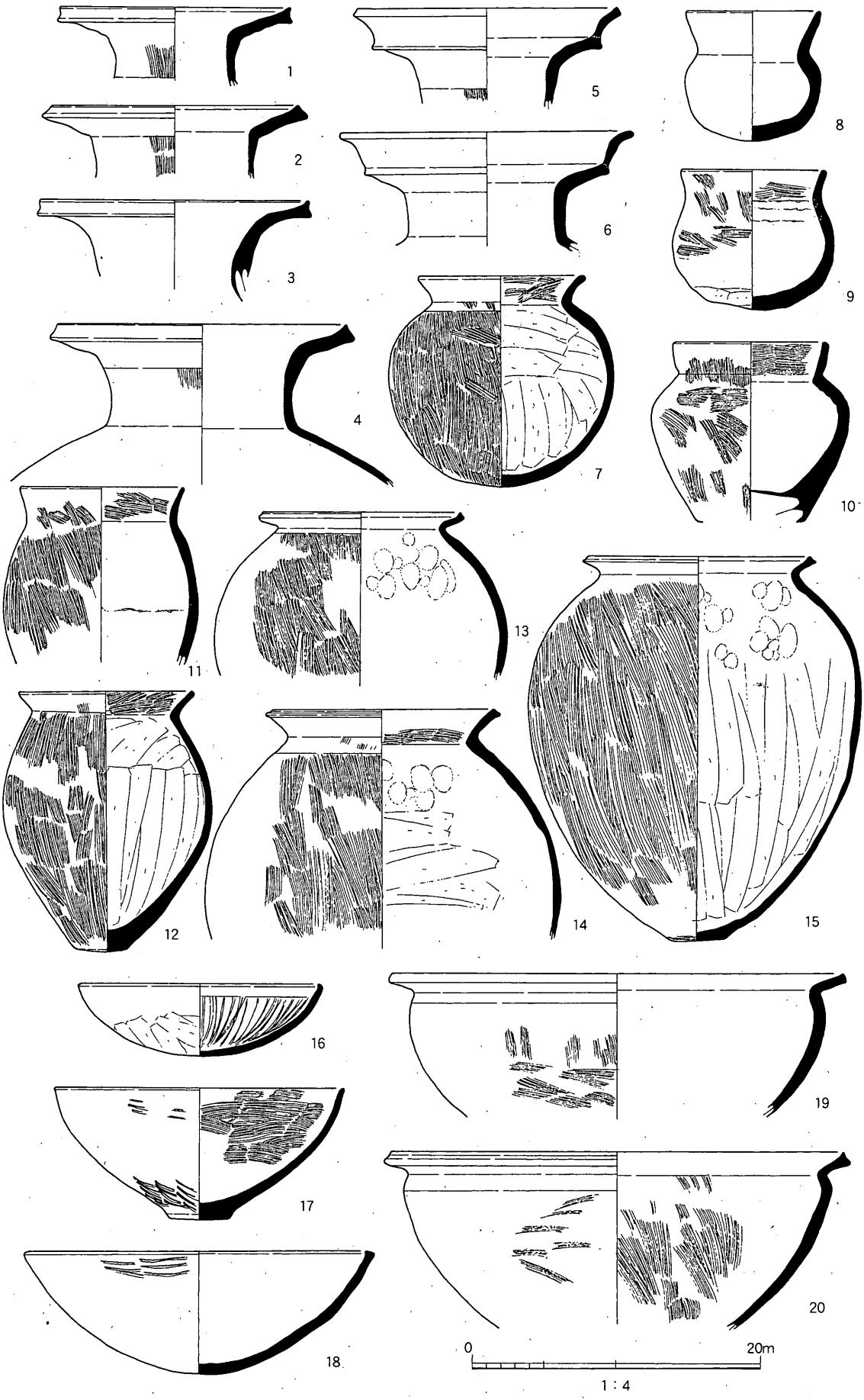
盛土層
13　黄灰色粘土質シルト
13a　13より色調が暗い
14　にぶい黄色粘土質シルト
14a　明オリーブ灰色シルト
14b　黄褐色粘土質シルト
15　明黄褐色シルト
15a　にぶい黄色シルト

16　炭化層（焼成痕有）
17　灰黄色～浅黄色～青灰色シルト～細砂

第３図　盛土遺構および堆積土層図

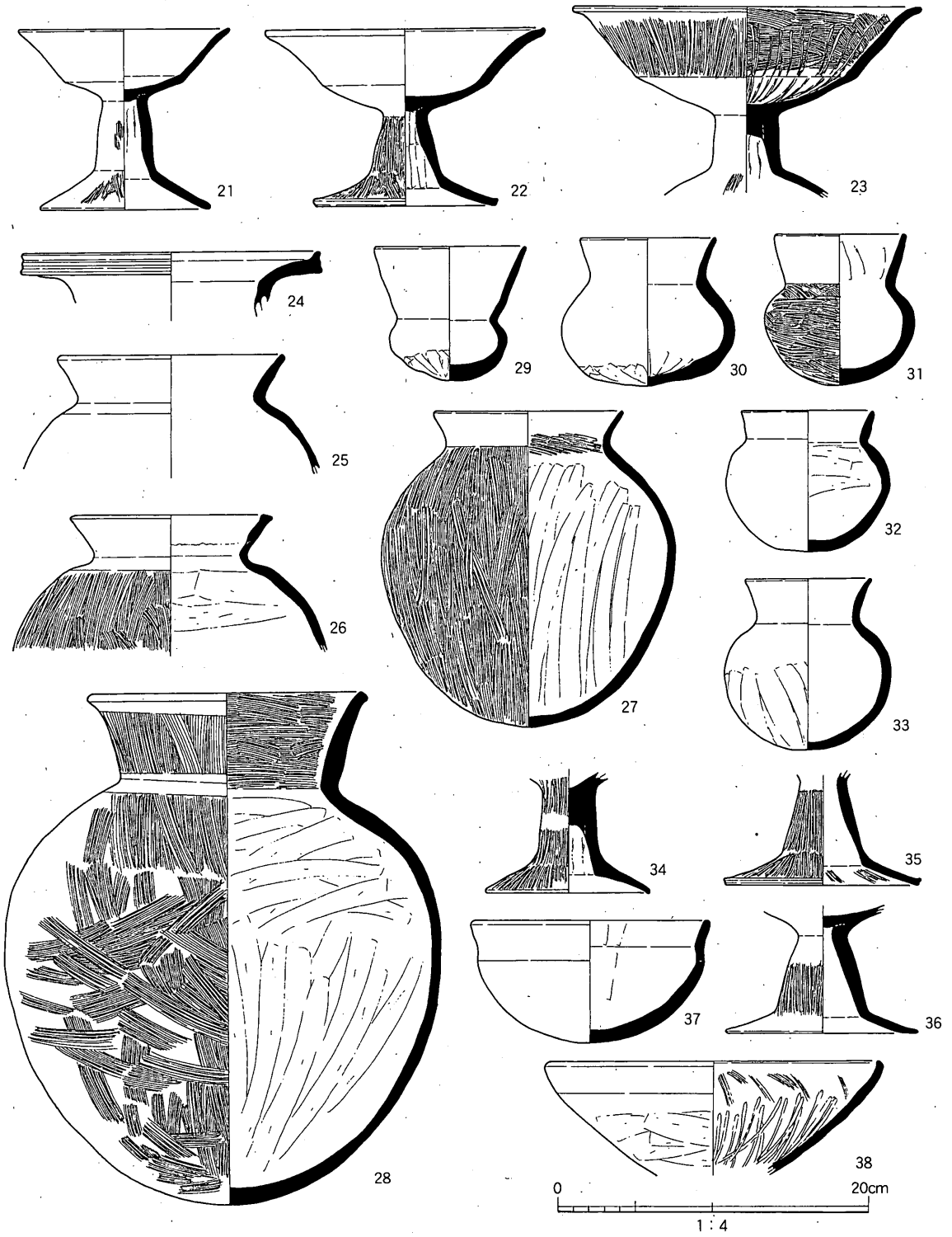
盛土層および斜面崩壊土より、広口壺（１～４）、二重口縁壺（5、6）、小型丸底壺（8～10、30～33）、小型丸底鉢（29）、鉢（16～20、37）、甕（7、11～15、25～28）、高坏（21～23、34～36）がある。また、流水堆積層から広口壺（24）、鉢（38）が出土しているが、これらは盛土崩壊に伴うものと考えられる。

広口壺１～４は口縁端部が凹面もしくは平坦面を呈し、端部上方へのつまみあげが明瞭である。24は口縁端部に２条の擬凹線がめぐり、端部上方へのつまみあげが顕著である。二重口縁壺5、6は口縁部の屈曲が大きく、屈曲部の擬口縁が明瞭である。小型丸底壺30は体部が扁平球状、31、33は球状を呈する。小型丸底鉢29の体部には屈曲がみられない。甕7は球形状の体部を呈し、短く外反する口縁部をもつ。11は小型の甕であり、頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ。12は「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部は平坦面を呈する。底部は小さな平底である。13は「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部の上方へのつまみあげが明瞭である。体部外面にはハケ、体部内面上半には指頭圧痕がみられる。胎土、手法から讃岐地域からの搬入品と考えられる。14の口縁端部は凹面を呈し、端部が外方にわずかにつまみだされている。15は倒卵形の体部に「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部はつまみあげている。体部外面はハケ、体部内面下位2/3に縦位 ヘラケズリが施される。底部は小さな平底を呈する。26は口縁端部を内側に肥厚させる。27・28は球形状の体部を呈し、頸部から外反し立ち上がる口縁部をもつ。28の体部外面および口縁部内面にハケ、体部内面に ヘラケズリが施される。鉢16、18は皿状の体部を呈し、16は



第４図　盛土遺構出土遺物

内面に縦位 ヘラミガキ、18は体部外面に タタキが施される。17は椀状の体部に明瞭な平底を呈する。19、20は屈曲する口縁部をもつ鉢であり、端部は平坦もしくは凹面を呈する。高坏21～23は大きく外反する口縁部をもち、脚柱部は短い。21の裾部は直線的、22は外反、23は内弯気味に広がる。鉢37は器高が深く、体部上位でわずかに屈曲する口縁部をもつ。38は皿状の体部を呈し、口縁端部をわずかに内側につまみあげる。

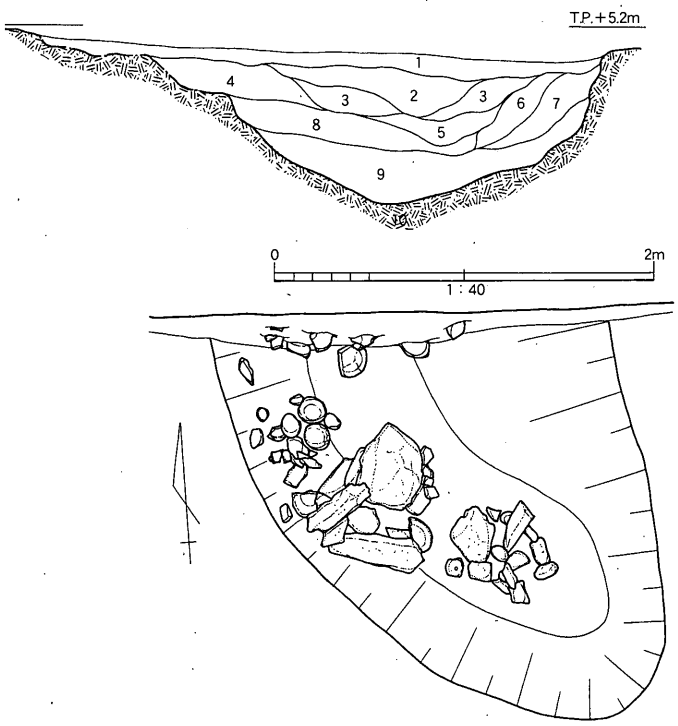


第5図　盛土遺構出土遺物

（ii） 奈良・平安時代

① 土壙SK34（第2、6～8図、図版5～6、13～15）

Ⅰ区において全体の一部を確認している。長辺2.4m＋α、短辺2mの平面形が不整長円形を呈し、深さ80cmを測る断面形が深いレンズ状を呈する土壙と考えられる。底部には結晶片岩礫や土師器坏が置かれている。

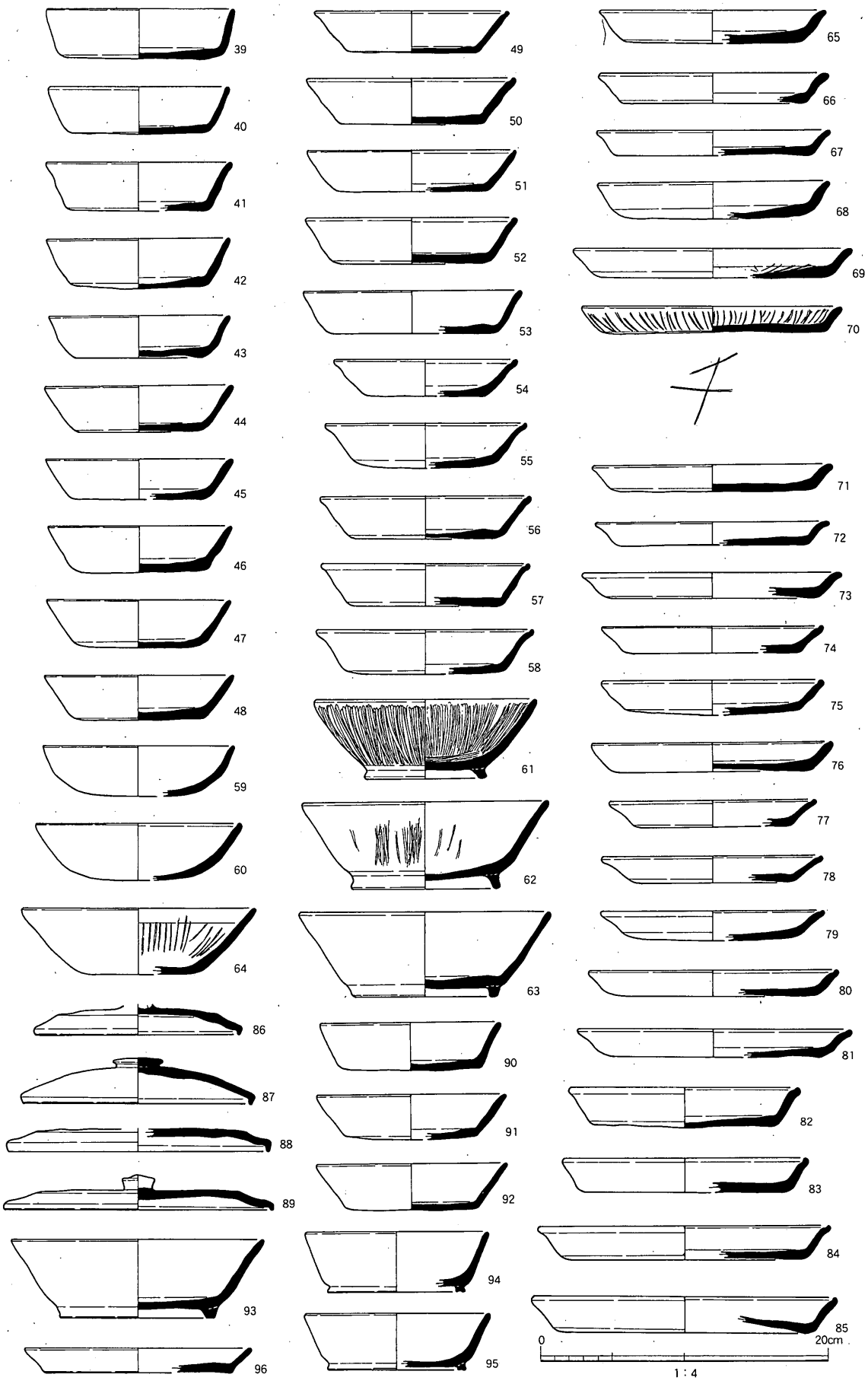


1 にぶい黄橙色シルト
2 にぶい黄褐色粘土質シルト
3 灰黄色粘土質シルト
4 灰黄褐色粘土質シルト
5 明黄褐色粘土質シルト
6 にぶい黄色シルト
7 浅黄色シルト
8 灰オリーブ色シルト質粘土
9 緑灰色粘土質シルト（含灰）
10 オリーブ黄色粘土質シルト

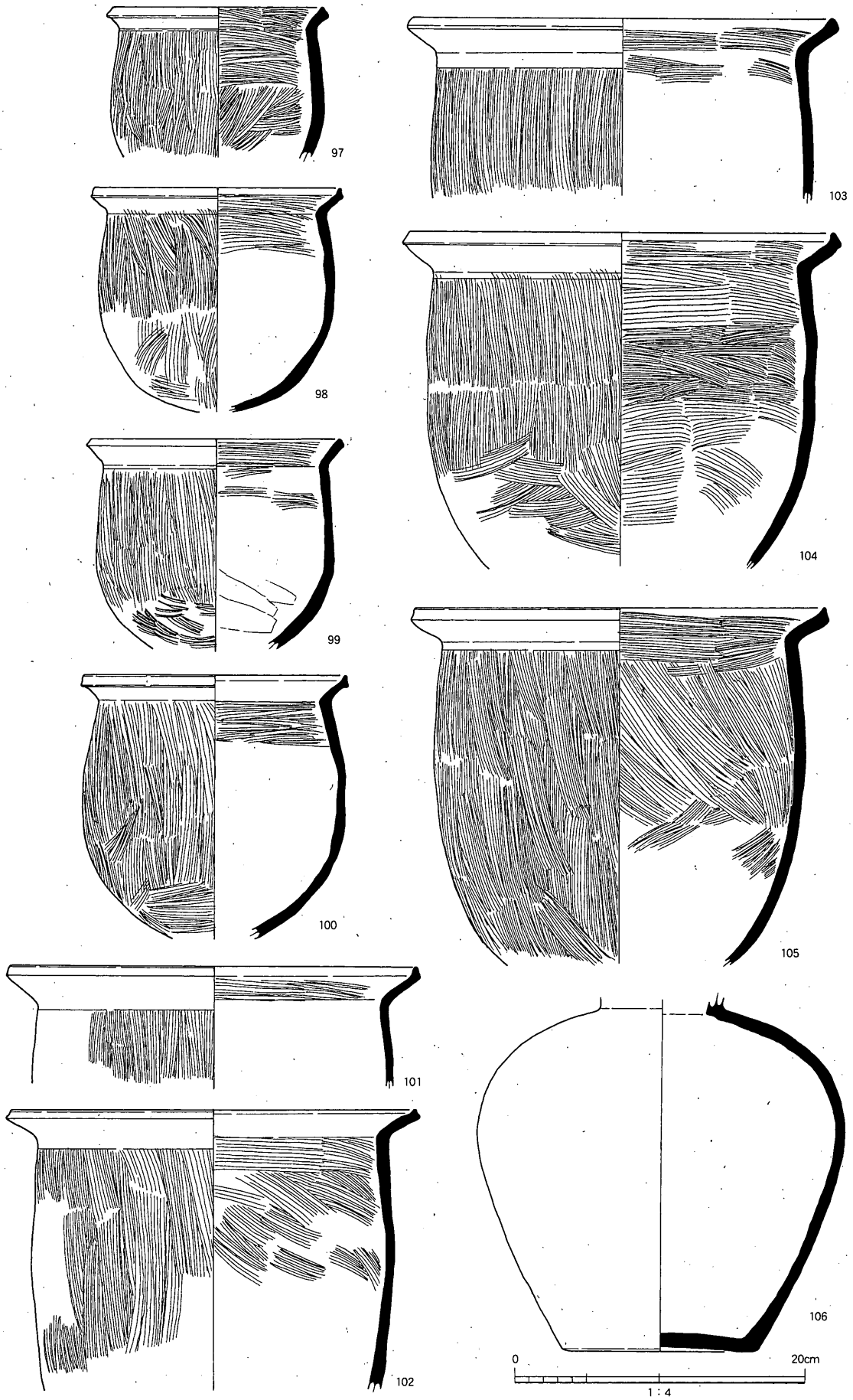
第6図　土壙SK34

出土遺物には、土師器坏（39～60）、高台付坏（61～63）、皿（65～85）、黒色土器坏（64）、須恵器蓋（86～89）、坏（90～92）、高台付坏（93～95）、皿（96）、土師器甕（97～105）、須恵器壺（106）がある。

土師器坏39～58は回転台成形によるもので、39は底部から直立気味に立ち上がる口縁部を呈し、40～48は底部から斜上方に直線的に立ち上がる口縁部をもつ。いずれも端部は丸くおさめる。49～51は底部から斜上方に直線的に立ち上がる口縁部をもつが、口縁端部の内側を肥厚させる。52～54は直線的な体部から口縁部をわずかに外反させ、端部を内側に肥厚させる。55～58の口縁部の外反度はさらに大きくなる。56以外には赤色塗彩が施される。59、60は底部から体部へ丸みをもつ。高台付坏61～63は回転台成形であり、61は体部内外面にヘラミガキが施される。62、63の体部は斜上方に直線的に立ち上がる。64は黒色土器A類であり、体部内面にはヘラミガキが施される。皿65は底部から短く斜上方に立ち上がる口縁部をもち端部を丸くおさめる。66～71は緩やかに外反する口縁部をもつ。69、70の内面にはヘラミガキが施され、70の底部外面にはヘラ記号がみられる。72、73の口縁端部の外反度はさらに強くなる。74～81は口縁端部の内側を肥厚させるが鈍く明瞭ではない。82～85は器高の深い皿であり、口縁端部を肥厚させる。65～85はいずれも赤色塗彩が施される。須恵器蓋86～88は天井部が平坦で屈曲する口縁部をもち、端部は下方へ突出する。87は天井部が丸みをもち笠形を呈し、端部は下方へ突出する。87のつまみは扁平、89のつまみは中央部が上方に膨らむ。高台付坏93～95は底部と体部の屈曲部に高台を貼り付ける。93の高台は断面形が逆台形、94、95の高台設置面は凹面を呈する。



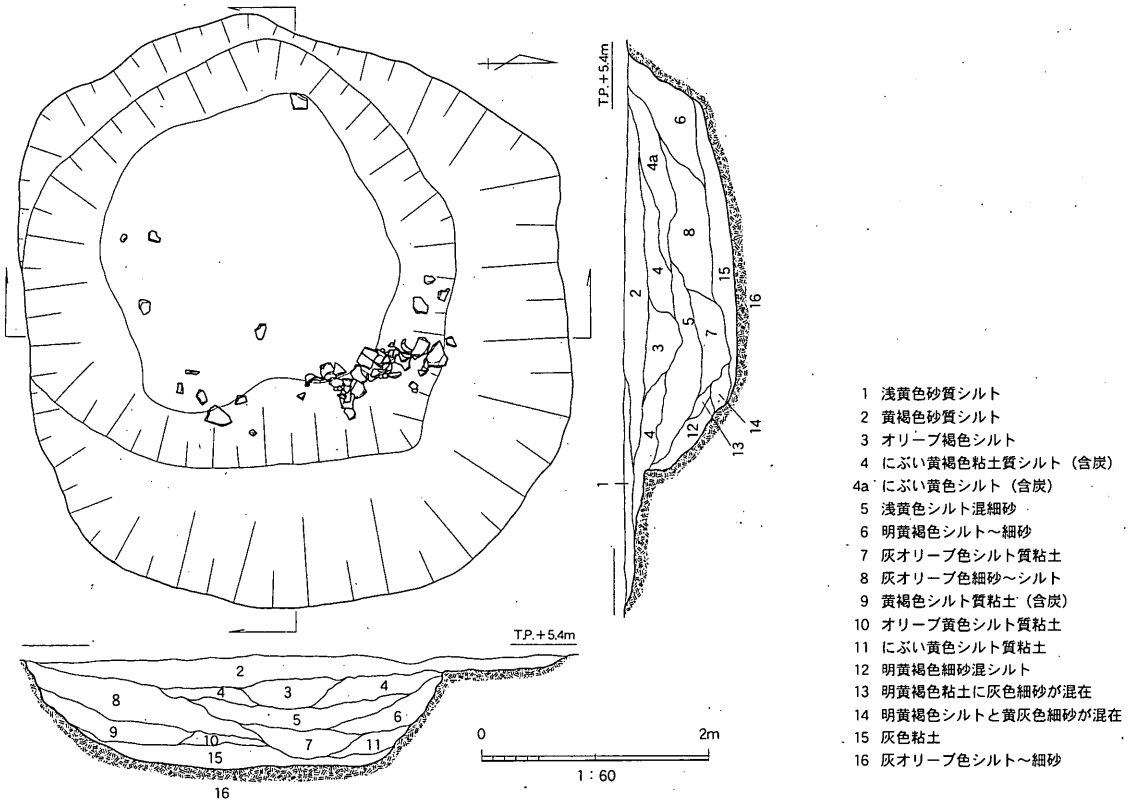
第７図　土壙 SK34 出土遺物



第８図　土壙 SK34 出土遺物

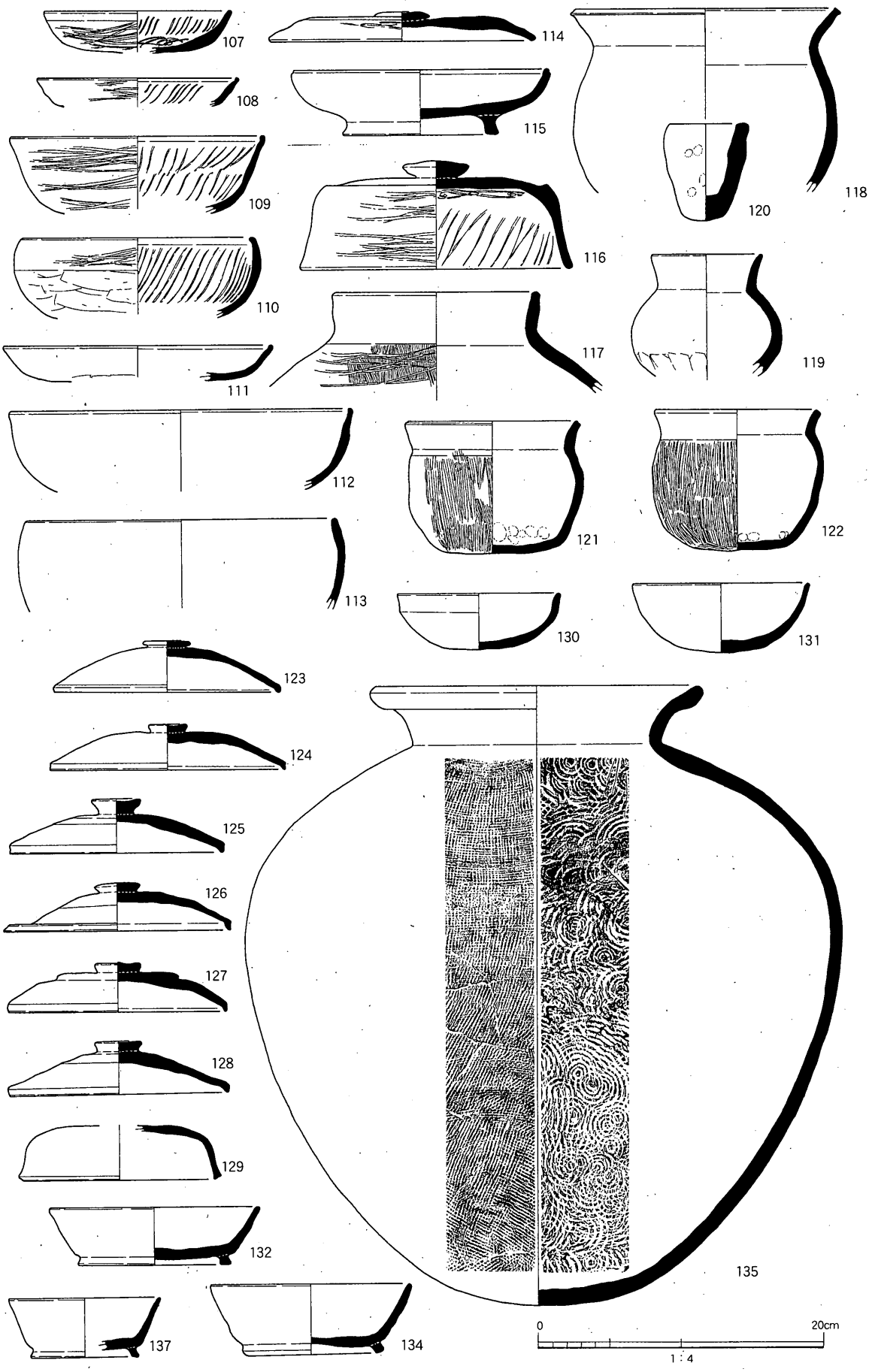
② **不明遺構 SX01**（第 2、9、10 図、図版 7、8、16、17）

Ⅰ区において検出した、径 5m の不整方円形を呈し、深さ 1m を測る大土壙であるが、性格については不明である。出土遺物には土師器坏（107 ～ 109、112 ）、皿（111、115 ）、鉢（110、113）、蓋（114、116）、壺（117、119）、甕（118、121、122）、ミニチュア土器（120）、須恵器蓋（123 ～ 129）、坏（ 130、131）、高台付坏（132 ～ 134）、壺（135）がある。



第 9 図　不明遺構 SX01

坏 107 の底部外面には ヘラケズリ後 ヘラミガキ、体部外面には ヘラミガキ、体部内面には放射状暗文、底部には連弧状暗文が施される。 108 は口縁端部を肥厚させ、体部外面には ヘラケズリ、体部内面に放射状暗文をもつ。 109 は器高の深い坏であり、口縁端部を肥厚させ、底部から体部へは丸みをもつ。底部外面には ヘラケズリ後 ヘラミガキ、体部外面には ヘラミガキ、体部内面には２段放射状暗文、底部には連弧状暗文が施される。鉢 110 は口縁端部をわずかに内側につまみだしている。体部外面には ヘラミガキ、体部下半～底部には ヘラケズリが施される。皿 111 は底部外面に ヘラケズリが施される。 107 ～ 111 は胎土、手法から畿内産土師器と考えられる。坏 112、鉢 113 はそれぞれ 109、110 の模倣形態であろうか。蓋 114 は平坦な天井部から屈曲する口縁部をもち、つまみは扁平化している。外面に ヘラミガキが施される。 115 は高台付皿であり、口縁端部外面に沈線状の段がみられる。116 は壺蓋であり、外面に横位 ヘラミガキ、内面に放射状暗文が施される。鉢 121、122 は胎土が白色系であり、口縁部は緩やかに外反屈曲し、底部は平底を呈する。坏 130、131 は底部から体部へ丸みをもち、口縁部でわずかに屈曲する。坏蓋 123 ～ 128 は丸みのある笠形の天井部に口縁端部は下方に突出する。 129 は土師器壺蓋を互換させたものであろうか。高台付坏 132 ～ 134 は底部と体部の屈曲部に高台を貼り付ける。 134 はハの字状に開く高台であり、端部内側に設置点がある。甕 135 は肩の張る形態を呈し、外面には タタキ後カキ目、内面には青海波のあて具痕が残る。



第 10 図　不明遺構 SX01 出土遺物

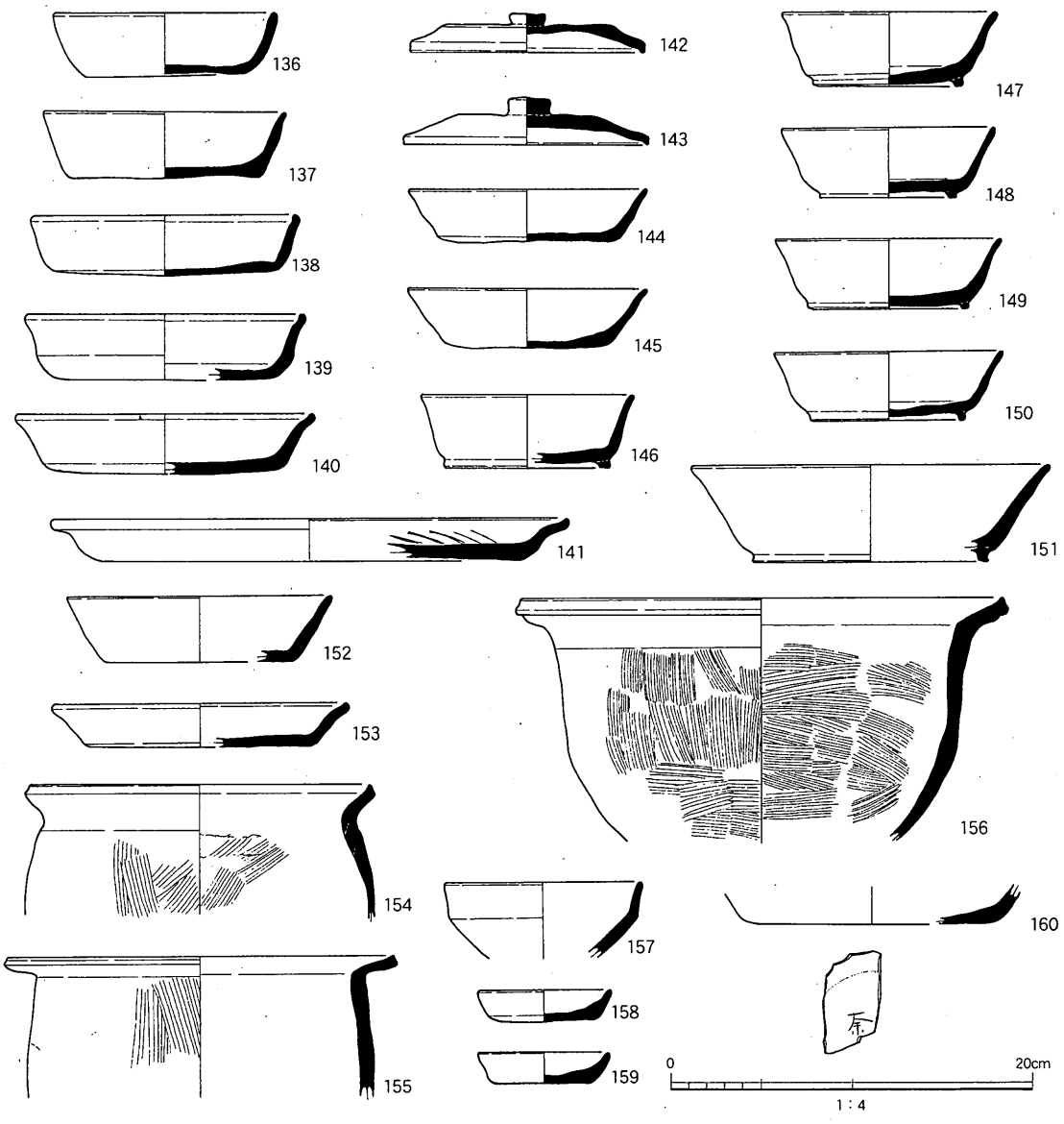
③　土壙 SK10（第 2、11 図、図版 18）

Ⅰ、Ⅱ区において検出した、幅 5m、深さ 60cm の収束する溝状遺構である。出土遺物には、土師器坏（136 ～ 140）、皿（141）、須恵器蓋（142、143）、坏（144、145）、高台付坏（146 ～ 151）がある。

坏 136、137 は底部から体部への屈曲が明瞭であり、136 は内弯気味に立ち上がり、137 は斜上方に直線的に立ち上がる。いずれも端部は丸くおさめる。138 は斜上方に直線的に立ち上がる口縁部であるが、端部内側を肥厚させる。139 は外反する口縁部の端部を肥厚させる。140 は斜上方に立ち上がる口縁端部を肥厚させる。皿 141 は口縁端部を肥厚させ、内面には放射状暗文が施される。136 ～ 141 は回転台成形であり、赤色塗彩が施される。蓋 142、143 は平坦な天井部から屈曲する口縁部をもち、端部を下方へ突出させる。高台付坏 146 の高台設置面は凹面を呈する。147 ～ 150 の高台は断面形が逆台形を呈し、151 の高台設置点は高台外側にある。

④　土壙 SK26（第 2、11 図、図版 10）

Ⅰ区において検出した、長径 3m、短径 1.7m の不整長円形を呈し、深さ 10cm を測る土壙である。出土遺物には土師器坏（152）、皿（153）、甕（154 ～ 156）がある。



第 11 図　土壙 SK10(136 ～ 151)、SK26(152 ～ 156)、Pit528(157)、Pit267(158、159)、包含層（160）出土遺物

坏 152 は斜上方に直線的に立ち上がる体部に口縁端部は丸くおさめる。皿 153 は外反する口縁部を呈し、端部を肥厚させる。いずれも回転台成形であり、赤色塗彩が施される。

⑤ Pit（第 2、11 図、図版 18）

Ⅰ・Ⅱ区において多数のピットを検出している。Ⅱ区 Pit528 より天目碗(157)、Ⅰ区 Pit267 より土師器皿（158、159）が出土している。天目碗 157 は乳白色の胎土に鉄釉をかけた瀬戸美濃系である。口縁部で屈曲し直立気味に立ち上がる。皿 158、159 は回転台成形であり、底部の切り離しは糸切りである。

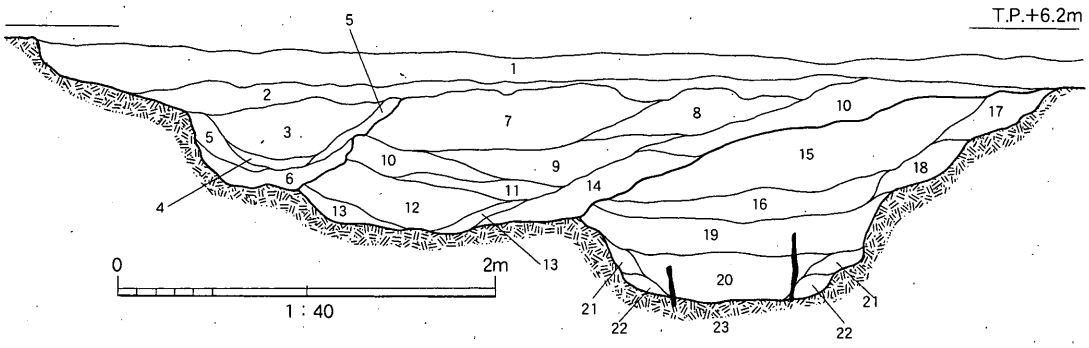
⑥ **包含層出土遺物**（第 11 図、図版 18）

包含層出土遺物として土師器坏底部片 (160) がある。底部外面に「奈」が線刻される。

(iii) **鎌倉・室町時代以降**

① **溝 SD01 ～ 03**（第 2、12 ～ 14 図、図版 9、10、19 ～ 21）

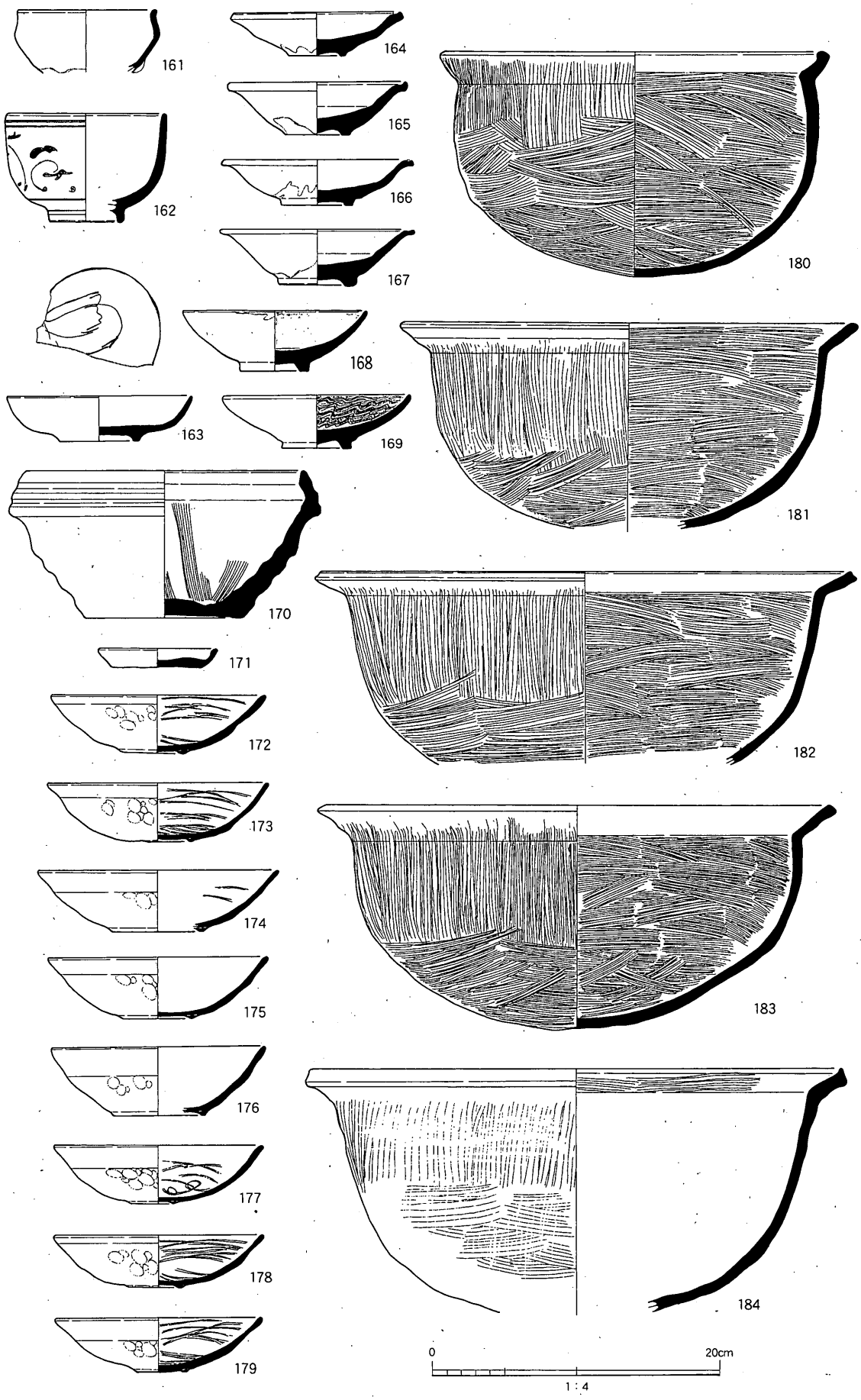
Ⅰ、Ⅱ区の西端で重複して検出した南北方向の溝である。SD01 は幅 1.1m、深さ 40cm、断面形が浅く開くU字状を呈する。出土遺物には肥前染付碗(162) がある。SD02 は幅 4m、深さ 70cm の断面形が深いレンズ状を呈する。出土遺物には天目碗 (161)、染付皿 (163)、肥前陶器皿 (164 ～ 169)、備前擂鉢 (170) がある。SD03 は幅 3m、深さ 1.2m、断面形が逆台形を呈する。出土遺物には土師器小皿（171)、瓦器椀 (172 ～ 179)、土師器鍋 (180 ～ 184)、羽釜 (185)、瓦質甕 (186) がある。



1 灰白色砂礫混シルト
2 浅黄色砂礫混シルト
SD01～03埋土
3 淡黄色粘土質シルト
4 浅黄色粘土質シルト
5 黄灰色粘土質シルト
6 灰色シルト質粘土
SD01埋土
7 暗灰黄色砂礫混シルト
8 黄灰色砂礫混シルト
9 褐灰色砂礫混粘土質シルト
10 にぶい黄色砂礫混シルト
11 灰色シルト質粘土
12 灰色砂礫混シルト質粘土
13 灰色粘土
14 灰黄褐色粘土質シルト
SD02埋土
15 オリーブ褐色砂礫混シルト
16 暗灰黄色シルト
17 暗灰色砂礫混シルト
18 にぶい黄色シルト
19 にぶい黄橙色シルト
20 明青灰色シルト質粘土
21 明オリーブ灰色シルト
22 明青灰色粘土混細砂
SD03埋土
23 明オリーブ灰色細～粗砂

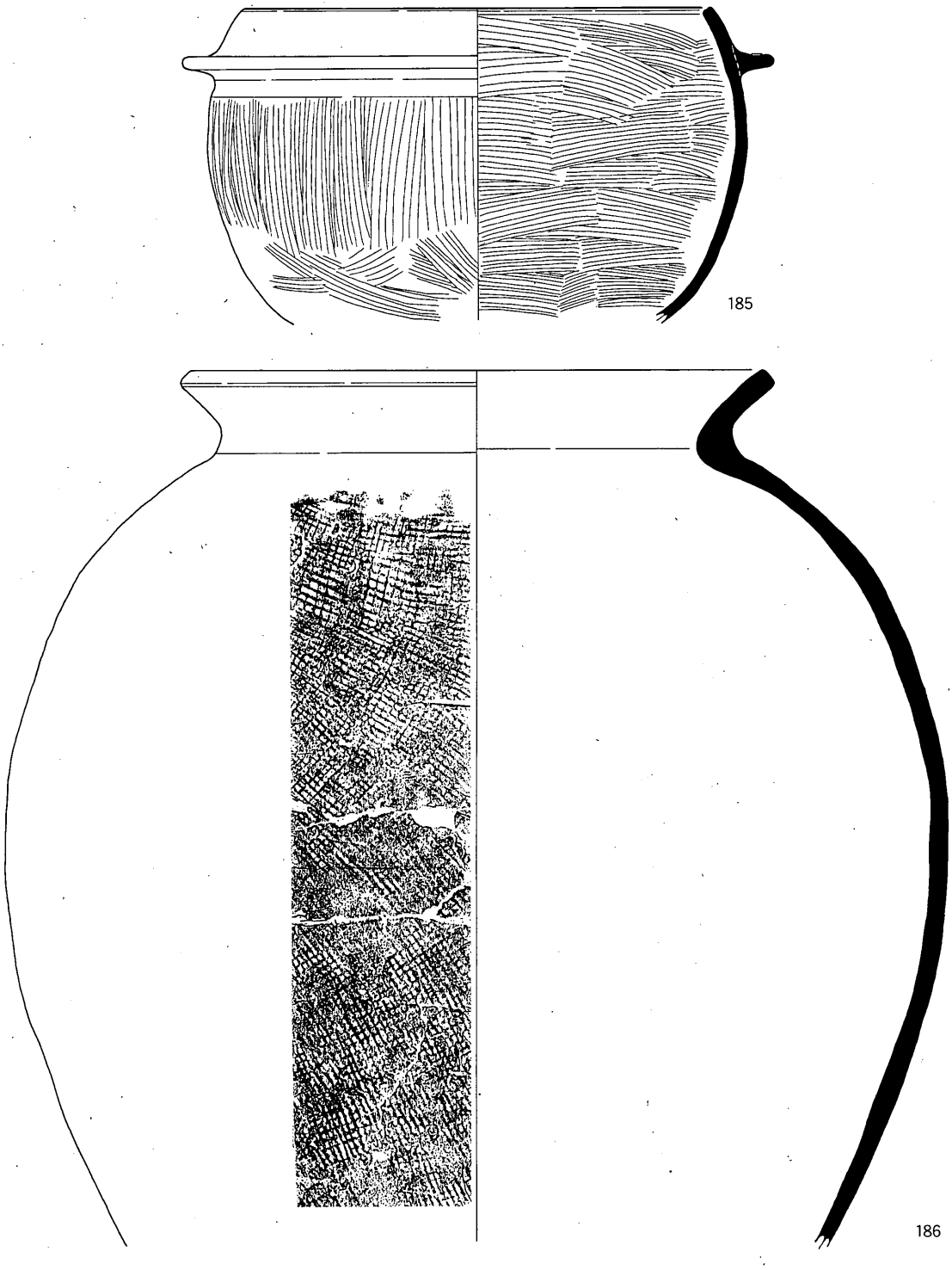
第 12 図　溝 SD01 ～ 03 堆積土層図

碗 162 は体部が丸みをもつ。天目碗 161 は白色の胎土に鉄釉が施される瀬戸・美濃系である。口縁部が内傾しながら立ち上がる。皿 163 は口銹が施される。皿 164 ～ 167 は溝縁皿であり、内面見込みに砂目が残る。 168 の内面は青緑釉の蛇の目釉剥ぎである。 169 は白色釉による刷毛目が施される。擂鉢 170 は口縁端部が内傾し、内面が突出する。14 条 1 単位のおろし目が施される。土師器小皿は回転台成形であり、底部切り離しはヘラ切りである。瓦器椀 172、173、178、179 は体部内面に圏線状ヘラミガキ、内面見込みに平行線暗文、 177 は体部内面に圏線状ヘラミガキ、



第 13 図　溝 SD01 ～ 03 出土遺物

内面見込みに連結輪状文が施される。181 の体部は球形状、口縁部は受口状を呈し、内外面に粗いハケが施される。181 ～ 184 は外反する口縁部をもち、181 の端部は丸くおさめる。182 は凹面、183 は平坦、184 は上方につまみあげ風である。183 は細かなハケ、181、182、184 は粗いハケが施され、いずれも煤、炭化物の付着が著しい。羽釜 185 は球形状の体部に内傾する口縁端部をもち、内外面には粗いハケが施される。甕 186 は剥落が著しいが、外面には格子タタキ が見られる。



第 14 図　溝 SD03 出土遺物

4　小　結

Ⅱ区においてみられた盛土遺構は、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての土器を多量に含む。性格については明瞭ではないが、盛土部に土器が意識的に置かれたような出土状況を示すものや盛土下底面において焼成の痕跡がみられることから、集落縁辺部の自然河川際での祭祀的な行為に伴う盛土であると考えられる。

奈良・平安時代の主要遺構については、SX01、SK34、SK10があるが、いずれの遺構もその性格については明らかではない。ここでは、各遺構出土の土器について概観してみる。

SX01出土資料には畿内産土師器がみられる。外面にヘラケズリ＋ヘラミガキ、内面には暗文施文の手法がみられ、平城Ⅰ・Ⅱ式並行と考えられる。土師器は畿内産もしくは畿内産の手法・形態の模倣品であり、回転台成形による在地の様相はみられない。

一方、SK34出土資料は土師器が回転台成形によるものが主体となる。土師器坏39～48は、法量・形態において須恵器坏90～92と互換させ、坏49～58は口縁端部を肥厚させており畿内産土師器の模倣を意識している。高台付坏と皿の口径分化は①15.5cm②17.5cm③19.5cmの3分化で共通する。坏の口径分化には3分化がみられるが、数値的には口径①12.5～13.0cm②14.5～15.0cm③15.5cm以上と異なりを示す。須恵器供膳具については、蓋、坏、皿の総合的な見地から、口径分化には①12.5～13.5cm②14.5～15.0cm③17.5cm以上の3分化がみられ土師器坏の分化に類似する。阿波国府跡SD29[6]出土の供膳具にみられるような定型的な法量分化の初現的な状況を示すものと考えられる。

土師器・須恵器の供膳具の特徴として、①土師器と須恵器の比率は8：2であり、供膳具からの須恵器の完全撤退は未だみられない。②土師器と須恵器の坏は法量・形態において互換させているが、須恵器坏と形態互換させている土師器坏39～48には法量分化がみられず、口縁端部を肥厚させる形態に法量の3分化がみられる。③黒色土器A類坏が存在する。④土師器供膳具は原則として赤色塗彩である。という点がある。古代の在地土器の年代観については、これまで平城並行や緑・灰釉などの搬入品との並行関係において把握されるものであり、在地産単独資料における年代比定は紀年銘資料でない限り容易ではない。しかし、SK34資料については、以上のような諸要素から、国府町矢野高畑遺跡[7]に前後する8世紀末～9世紀初頭の年代観を考えておきたい。

SK10出土資料は土師器は回転台成形であり、畿内産の搬入および畿内産の手法を模倣したものはみられない。土師器坏136、137は須恵器坏と互換させたものであり、坏138～140は口縁端部を肥厚させ畿内産土師器の形態を意識している。これら各形態における法量分化は、SK34の状況とは若干異なり定型的な法量分化が進行していない。須恵器高台付坏の高台設置面が凹面を呈する点はSK34にも共通するが、断面形が逆台形を呈するものが主体であり、これらのことからSK34に先行する様相として捉えられる。

溝SD01～03はほぼ同一場所において断続的に掘削が行われ使用された溝である。埋没時期については、出土遺物よりSD03が13世紀末、SD02が17世紀前半、SD01が18世紀前半である。

溝SD03出土の瓦器椀はすべて畿内産である。眉山北側の吉野川下流域の中世集落においては普遍的な出土状況を示す資料であるが、眉山南側での出土例としては稀少である。また、SD02出土遺物には肥前陶器皿がみられる。近年、徳島城下町跡での調査が進んでいるが、城下町跡以外からの出土例としては数多くない。

古代における畿内産土師器、中世における畿内産瓦器椀、近世における肥前陶器の流通事例はこの遺跡が古代から近世に至るまで、眉山南側において拠点的な地域として機能してきたことに他ならないことを示している。

（註）

(1) 「樋口遺跡－上八万小学校地区－調査概要」『徳島市史だより』10、徳島市教育委員会、1984年。

(2) 「樋口遺跡－上八万小学校地区－調査概要」『徳島市文化財だより』No.11・12、徳島市教育委員会、1984年。

(3) 「樋口遺跡」『第8回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る－最近の発掘調査－』、徳島市教育委員会、1987年。

(4) 「樋口遺跡－上八万コミュニティーセンター 地区－」『第11回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る－最近の発掘調査と矢野遺跡出土土器』、徳島市教育委員会、1990年。

(5) 「樋口遺跡－上八万コミュニティーセンター 地区－」『徳島市文化財だより』No.25・26、徳島市教育委員会、1991年。

(6) 「阿波国」『国府－畿内・七道の様相－』、日本考古学協会三重県実行委員会、1996年。

(7) 『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畑遺跡発掘調査概要報告書』、徳島県教育委員会、1990年。

Ⅳ　徳島城跡（確認調査）

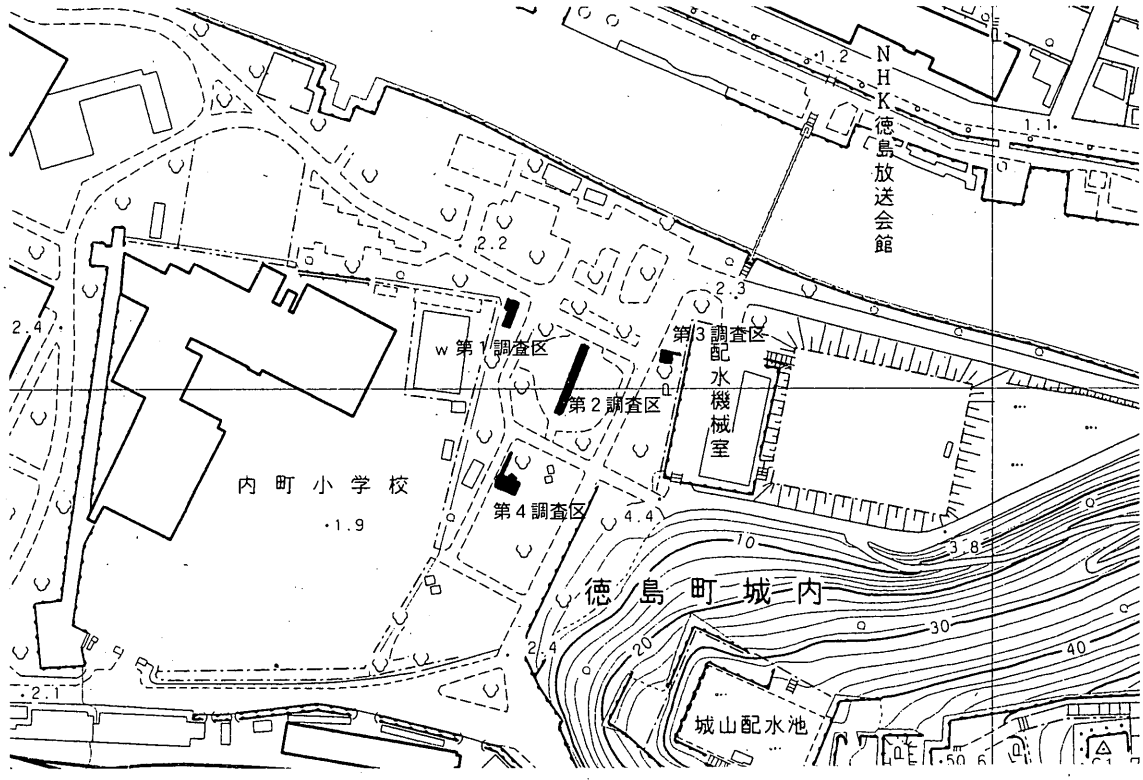
1　調査に至る経緯と経過（第１図）

徳島城西の丸がいつ創建されたのか確実な資料は残されていないが、少なくとも慶長５年（1600）以前の創建であることは、『阿淡年表秘録』により確認される。幼少の２代藩主蜂須賀忠英の後見役として、元和６年（1620）、蜂須賀家政（蓬庵）が中田の隠居屋敷から西の丸屋敷に移住してからは「蓬庵屋敷」とも呼ばれるようになり、以後、藩主の一族や隠居した藩主が居住するようになった。江戸時代の後期、天保14年（1843）には、西の丸屋敷は12代藩主蜂須賀斉昌が隠居するに際して、大規模な改築工事が行われていることが絵図資料から知ることができる。

明治２年(1869)以降、長久館が移され、また、師範期成学校が設立されている。明治８年(1875)徳島城の建物解体時に西の丸御殿も大部分が取り壊されたが、徳島師範学校と改称され学校は存続した。明治18年(1885)、この学校の体操場(旧撃剣場)より出火し全焼している。その後、昭和４年(1929)西の丸運動場が造られ、昭和51年(1975)まで使用されている。昭和53年(1978)内町小学校・公園が造られ現在に至っている。なお、昭和38年(1963)に市指定史跡に認定されている。

徳島城西の丸における発掘調査は、1976～1977年（昭和51～52）の徳島市内町小学校建設に伴う調査を始めとし、1988年（昭和63）のタイムカプセル設置事業に伴う調査が実施されており、徳島城西の丸における各施設の解明に貴重な資料を提供している。

今回の発掘調査は、西の丸御殿遺構のより正確な実態を解明すること、また、現状における遺構遺物の残存状況を確認すること、および史跡の保存、整備、活用を検討するための基礎資料を得ることの目的で実施した。



第１図　調査区位置図

2　基本層序

調査地の基本層序は概ね、第１層：表土・西の丸運動場造営時・徳島中央公園造園時の埋め立て層（攪乱層）、第２層：天保 14 年（1843）12 代藩主斉昌が隠居するに際して、大規模に改築を行った頃～明治 18 年(1885)頃（第１遺構面）、第３層:徳島城西の丸造営頃～天保 14 年（1843）、12 代藩主斉昌が隠居するに際して大規模に改築を行う前の頃（第２遺構面）である。

3　遺構と遺物

以下、各調査区ごとに主な検出遺構と出土遺物[1]について概要を述べる。

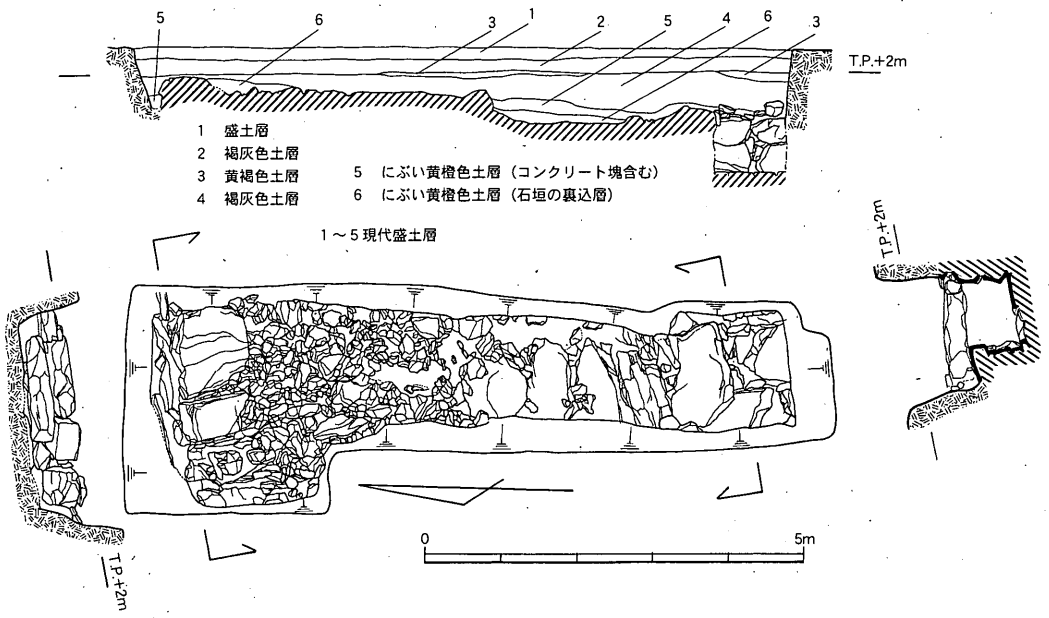
(1) 第１調査区（第 2、8 図、図版 2、3、11）

石垣の遺構残存状況を確認するために設定し，石垣と石組暗渠を検出した。現地表面より－40cm（T.P. ＋ 2m）において、助任川に面する石垣を検出した。これは、内町小学校北側に残存する石垣と同様に、川に面する側に石積みを行い、曲輪内は一部石積みの上に土盛りを行う構造であったと考えられる。これらの上部のほとんどは近年の開発により破壊されているが、現地表面より－ 40 ～ 60cm において裏込栗石が検出した。以下に述べる石組暗渠の南端の蓋石等から、当時の曲輪内の高さでの石垣の幅は 7m と推定できる。

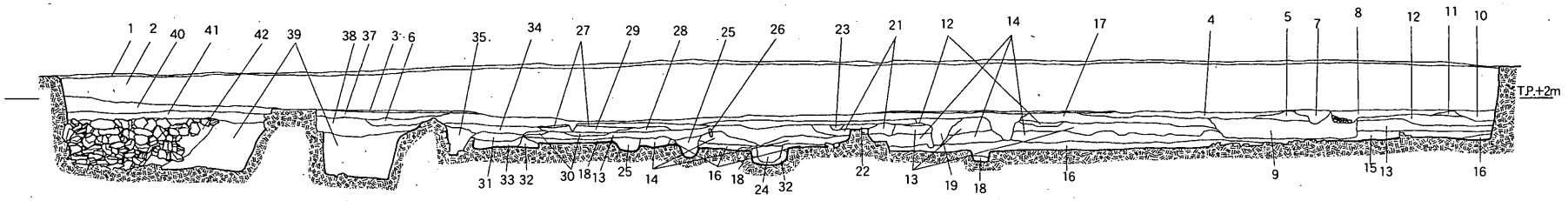
また、現地表面より－ 80cm（TP ＋ 1.5m）において、曲輪内から石垣を貫いて助任川へ排水する施設である石組暗渠を検出した。石組暗渠の内法は、幅 80cm、高さ 50cm で、今回の調査で初めて構造が明らかになった。この石組暗渠は「城下水道普請御伺絵図[2]」に図示されている。

暗渠埋土より、磁器碗（1、2）、磁器皿（3）、陶器徳利（4）、瓦が出土している。

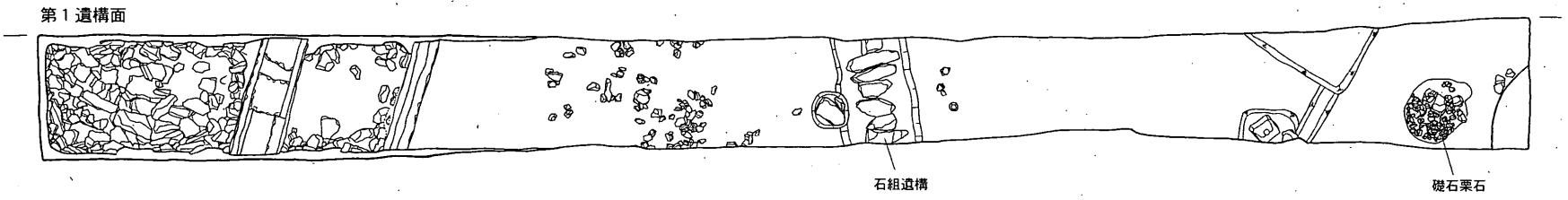
碗１は瀬戸・美濃系の染付碗で 19 世紀前半。２は産地不明の染付碗。皿３は肥前系で 19 世紀後半。桃・赤・黒・黄の色を使って上絵付けし、畳付のみ無釉である。徳利４は大谷焼で外面に鉄釉を掛けている。



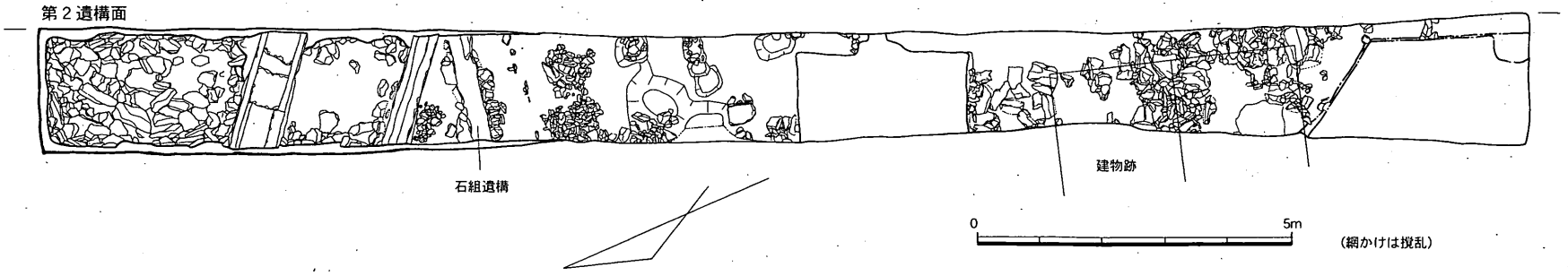
第２図　第１調査区遺構配置図および東壁土層図



第１遺構面



第２遺構面



1	現代整地層	撹乱層	11	浅黄シルト	21	灰細砂質土（炭化物を含む）	31	にぶい黄橙色土
2	にぶい黄褐色土		12	灰白色混じりの明緑灰色シルト	22	灰砂質土（炭化物を含む）	32	褐灰色細砂質土
3	青灰色土		13	暗灰黄色弱粘質土	23	暗灰黄褐色弱粘質土（焼土・炭化物を含む）	33	灰黄褐色弱粘質土（山石を多量に含む）
4	黄褐色土		14	黒褐色弱粘質土	24	暗灰黄色砂質土（炭化物を含む）	34	灰黄色弱粘質土（山石を多量に含む）
5	緑灰色土		15	黒褐色弱粘質土（山石を多量に含む）	25	灰黄褐色弱粘質土（炭化物を含む）	35	にぶい黄色弱粘質土
6	コークス		16	灰黄色混じりの灰白色微砂質土	26	灰オリーブ砂質土	36	黄褐色弱粘質土（山石を多量に含む）
7	黄褐色土		17	灰黄色混じりの灰白色砂質土	27	黄灰弱粘質土	37	灰褐色土（焼却灰を含む）
8	灰黄褐色土		18	灰黄色混じりの灰黄色弱粘質シルト	28	黄灰弱粘質土（焼土・炭化物を含む）	38	灰色弱粘質土
9	暗灰黄褐色土		19	褐灰色弱粘質土	29	灰弱粘質土	39	にぶい黄橙色土（山石を多量に含む）
10	にぶい黄褐色土		20	にぶい黄色弱粘質土（焼土・炭化物を含む）	30	灰黄褐色弱粘質土（山石を多量に含む）	40	灰褐色砂質土
							41	にぶい黄橙色土（山石を多量に含む）
							42	裏込めの人頭大の山石

第３図　第２調査区遺構配置図および東壁土層図

(2) 第２調査区

石垣、建物等の遺構残存状況を確認するために設定し、第１、２遺構面でそれぞれ遺構を検出している。調査区の北端では、現地表面より－70cm（T.P.＋1.7m）において、助任川に面する石垣の裏込栗石を検出した。

（ｉ） **第１遺構面**（第3、8図、図版1、4、11）

現地表面より－70cm（TP＋1.7m）において第１遺構面を検出した。

調査区のほぼ中央部で板状の石を溝に敷並べた遺構が検出した。これら石の上に、陶磁器、瓦が集中して出土した。また、調査区の南端でも直径80cmの礎石跡栗石が１基検出した。これらの遺構は「徳島城西御丸峻陵院様御造営之図」に描かれる撃剣場であると推定される。

礎石柱建物跡より陶器灯明具（5、10）、磁器碗（7～9）、土師質土器皿（6）が出土している。

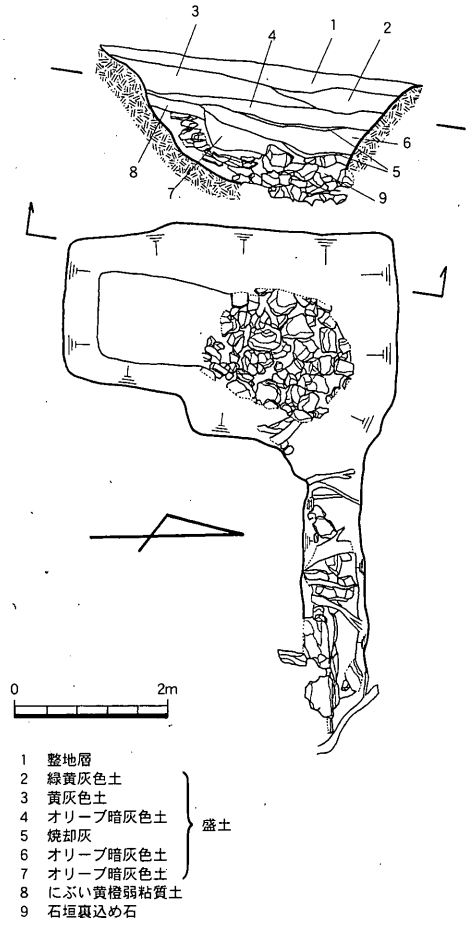
灯明具５は京・信楽系で、外面は無釉、口縁部に油煙痕が残る。内面に重ね焼きの円錐ピン痕が２点みられる。18世紀後半～19世紀。10は京・信楽系で、18世紀後半～19世紀。碗７は瀬戸・美濃系の染付碗。19世紀後半。８、９は肥前系の染付坏（小碗）で畳付のみ無釉である。18世紀末～19世紀。皿６は産地不明。口縁部に油煙痕が残る。底部板状圧痕が見られる。年代は不明である。11は軒桟瓦である。

（ii） **第２遺構面**（第3、8図、図版5、6、11、12）

現地表面より－140 cmにおいて第２遺構面を検出した。この遺構面は、全面的に灰白色の粘質土が敷きつめられていた。石垣の曲輪側に石組溝から、幅５mの空間があった。空間が作られ使用され、一部Pitが掘られている。これは内町小学校発掘調査地点で検出された馬場遺構に続くものであると考えられる。また、この馬場遺構の南側に板石を礎石とする建物跡が検出された。柱間寸法は1.96 m等間である。これらの遺構は、江戸時代中期のものと推定されている「徳島城西御丸之図[3]」に描かれている馬場および馬見所と推定される。

石組溝より炮烙（12）が出土している。

炮烙12は産地不明で口縁部は僅かに内弯し、内外面には回転ナデの痕跡が残る。また、端部は平坦面を呈する底部と口縁部の境に斜位のカキ目がある。年代は不明である。



第４図　第３調査区遺構配置図および西壁土層図

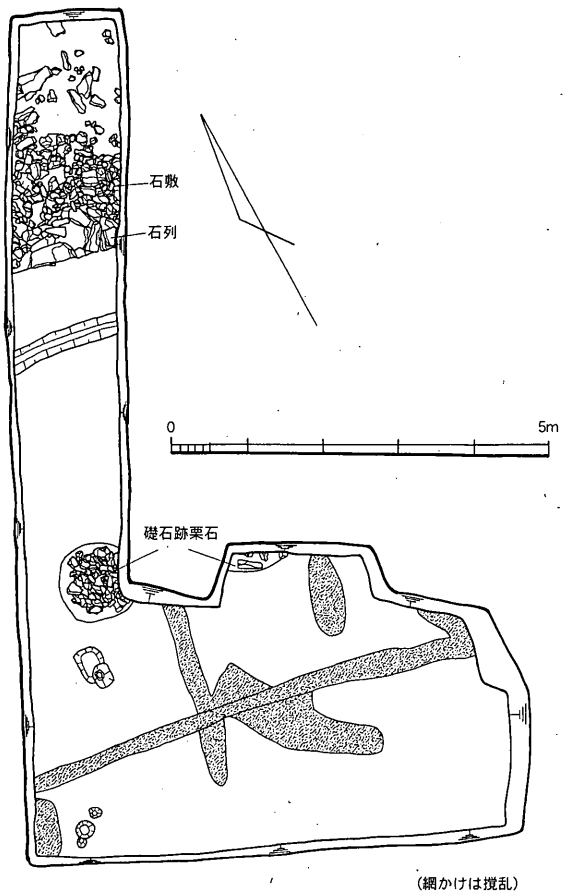
(3) 第３調査区（第４図、図版7）

設定したこの調査区の東端に、助任川に面する石垣の一部と推定される石組が露出していた。この石垣の遺構残存状況を確認するために設定した。

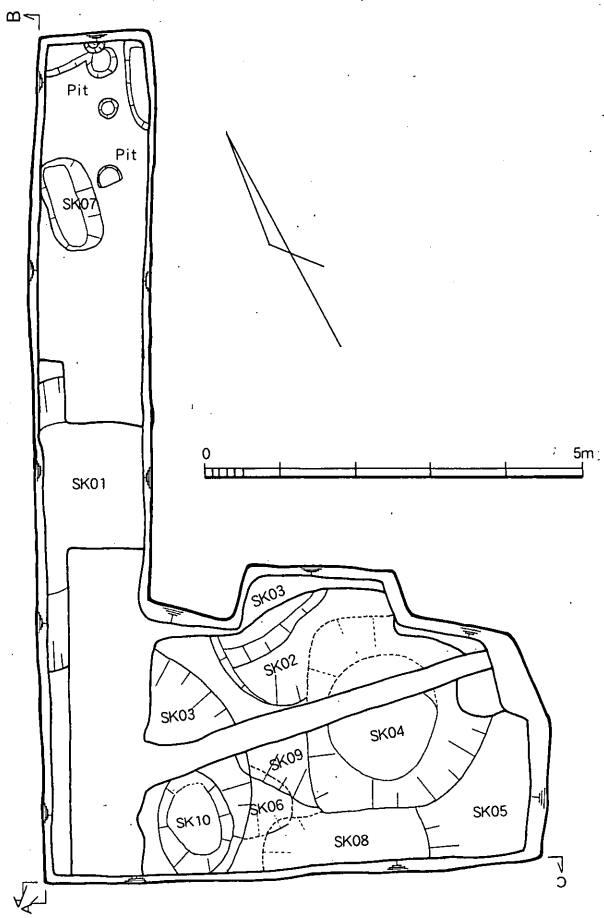
調査区の一部が、現地表面より深さ50cm～1.2mにわたって攪乱を受けていたが、攪乱より下位には石垣の裏込栗石が見られ、石垣の下部は残存している。なお、遺構に伴う遺物は出土していない。

(4) 第４調査区

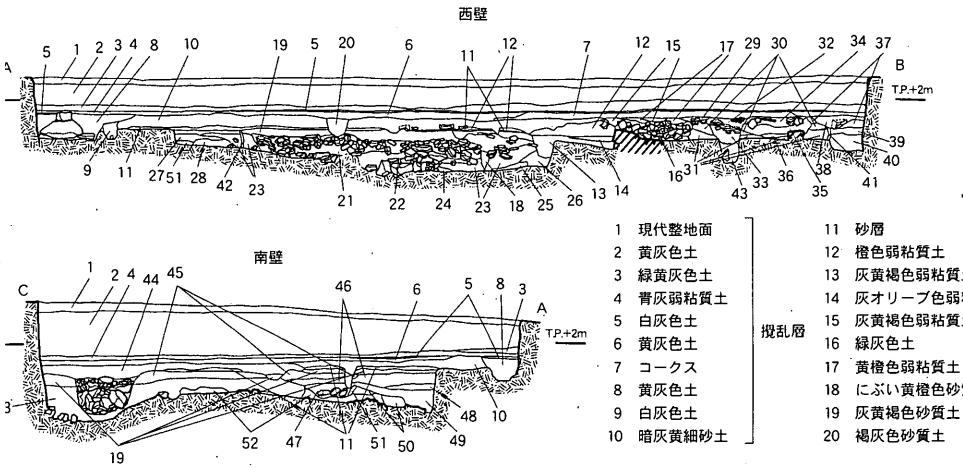
建物等の遺構残存状況を確認するために設定し、第１遺構面と第２遺構面でそれぞれ遺構を検出した。



第５図　第４調査区遺構配置図（第１遺構面）



第６図　第４調査区遺構配置図（第２遺構面）



1 現代整地面
2 黄灰色土
3 緑黄灰色土
4 青灰弱粘質土
5 白灰色土
6 黄灰色土
7 コークス
8 黄灰色土
9 白灰色土
10 暗灰黄細砂土
（撹乱層）

11 砂層
12 橙色弱粘質土
13 灰黄褐色弱粘質土
14 灰オリーブ色弱粘質土
15 灰黄褐色弱粘質土(明褐灰色土も混じる)
16 緑灰色土
（石組・石敷遺構）
17 黄橙色弱粘質土
18 にぶい黄橙色砂質土
19 灰黄褐色砂質土
20 褐灰色砂質土

21 灰黄褐色弱粘質土
22 灰オリーブ色と灰黄褐色弱粘質土
23 灰黄褐色弱粘質土
24 灰オリーブ色
（SK01）
25 明緑灰色が混じる浅黄色弱粘質土
26 浅黄色と灰黄褐色弱粘質土
27 褐灰色土
28 にぶい黄橙色弱粘質土（細礫が混じる）
29 黄灰色土
30 灰オリーブ色と灰黄褐色弱粘質土
31 灰色弱粘質土
32 褐灰色とにぶい黄色弱粘質土
33 明黄褐色が混じる灰黄褐色弱粘質土
34 明黄褐色が混じる灰黄褐色弱粘質土
35 明黄褐色が混じる褐灰色弱粘質土
36 明黄褐色が混じる灰オリーブ色弱粘質土
37 暗灰黄色と黄灰色弱粘質土
38 黄褐色と黄灰色弱粘質土
39 黄褐色と黄灰色弱粘質土
40 にぶい黄褐色弱粘質土
41 灰黄褐色弱粘質土
42 焼却灰
43 灰色砂質土
44 緑灰色弱粘質土
45 褐灰色弱粘質土
46 褐灰色と灰黄褐色弱粘質土
47 黒褐色と褐灰色弱粘質土
48 黄褐色と褐灰色弱粘質土
49 褐灰色とにぶい黄褐色弱粘質土
50 褐灰色と灰オリーブ色弱粘質土
51 灰白色シルト
52 灰白色とオリーブ黄色シルト

第７図　第４調査区土層図

（ｉ） **第１遺構面**（第５、８図、図版８、12）

現地表面より－ 50cm（T.P. ＋ 1.8m）において第１遺構面を検出した。

調査区の北側において、石列と石敷を検出した。規模は不明だが、この石列を南端とする建物跡が想定できる。また、中央部で礎石跡栗石が２基検出した。この部分を中心とする建物跡が想定できる。前者は、建物の長軸方向が他のものよりわずかにずれること、また19世紀代の遺物出土から長久館以降の学校施設関連の遺構と考えられる。後者は、表屋敷の御台処付近の建物に係わるものと考えられる。

石敷の出土遺物には焼塩壺（13）、陶器碗（14、15）がある。

焼塩壺13は産地不明、年代不明である。碗14は京・信楽系の碗である。外面にロクロ目がある。白泥、呉須で屋根を、鉄釉で風景等を描いている。18世紀。15は瀬戸・美濃系の碗である。内面ナデ調整で、外面に刷毛目装飾されている。19世紀。石列と石敷の築造年代を19世紀と考える。

（ii） **第２遺構面**（第６図、図版８、９、10）

現地表面より－ 70cm（T.P. ＋ 1.6m）において第２遺構面を検出した。「徳島城西御丸指図」[4]には、表屋敷の北東部にあたり、建物は描かれていない。９基の土壙を検出している。また、調査区の中央部には18世紀前半ごろの陶磁器を含んだ瓦溜まりの土壙SK01がある。調査区の南半分で検出された土壙には、16世紀末～17世紀前半の陶磁器、土師質土器皿を含んだもの、17世紀後半から18世紀前半の陶磁器、土師質土器皿を含んだものや、カキ、サザエ、ハマグリなど貝類を多く含んだ土壙SK02がある。

① **土壙SK01出土遺物**（第８図、図版12）

16は産地不明の土師質土器皿である。底部は回転糸切り離しである。年代は不明である。

17は肥前系磁器の筒形碗である。外面と内面の口縁部に鉄釉、内面には透明釉が掛けられる。1630年代～1850年代である。

18、19は陶器である。18は陶胎染付碗である。外面に染付け、見込みには鉄絵が描かれる。17世紀末～18世紀初頭。19は肥前系の銅緑釉皿で見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、高台部にはケズリが施される。1670年～18世紀末。

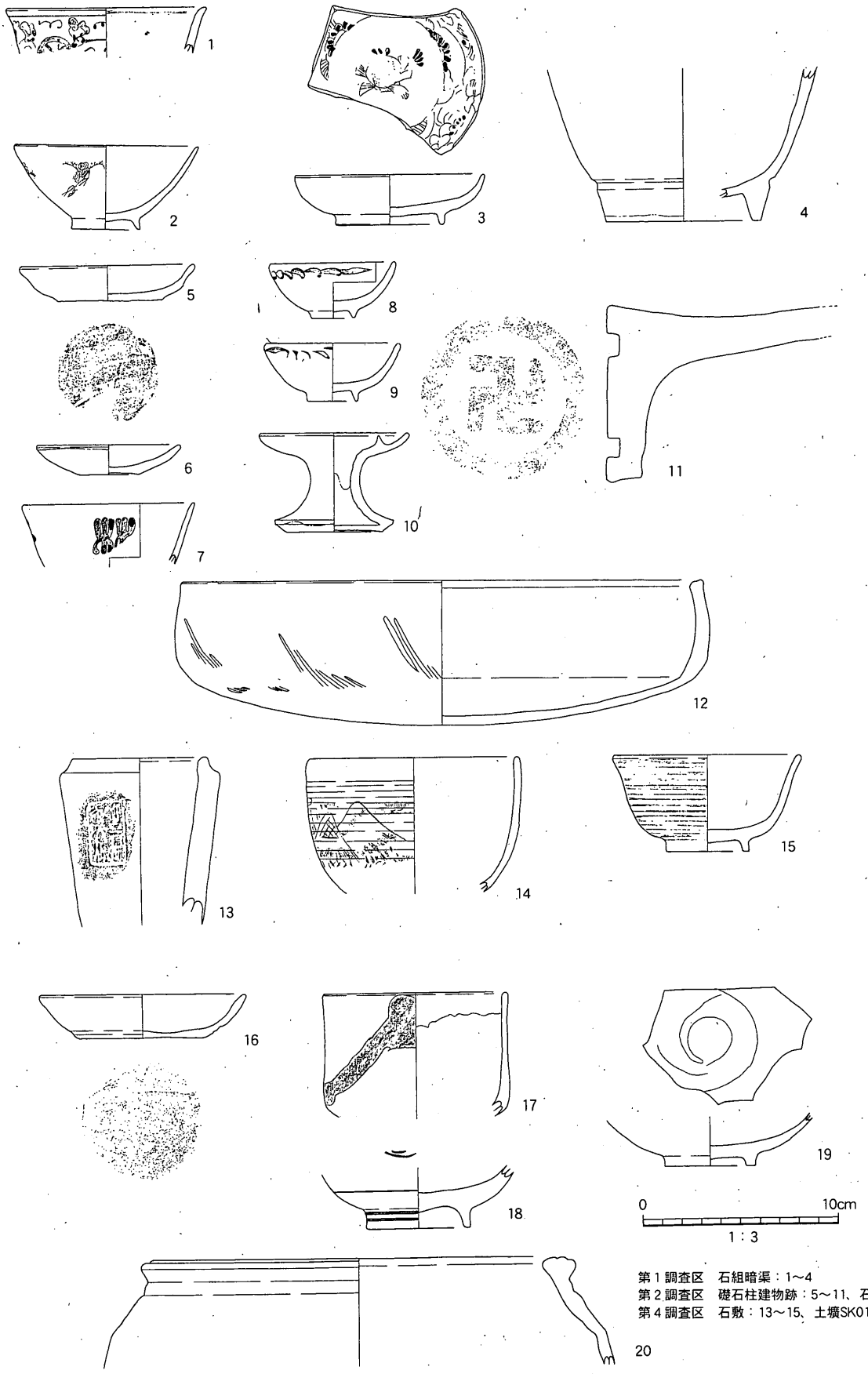
20は丹波系甕であり、全面に鉄釉が掛かる。年代は不明である。

② **土壙SK02出土遺物**（第９図、図版13）

21～23は年代不明の土師質土器である。21は産地不明の皿であり、底部は回転糸切り離し後、板状圧痕がみられる。22は産地不明の碗形土器である。外面口縁部から体部にかけロクロ目が残り、その下部にケズリが施される。23は産地不明の焼塩壺の蓋である。内面に布目痕がみられる。

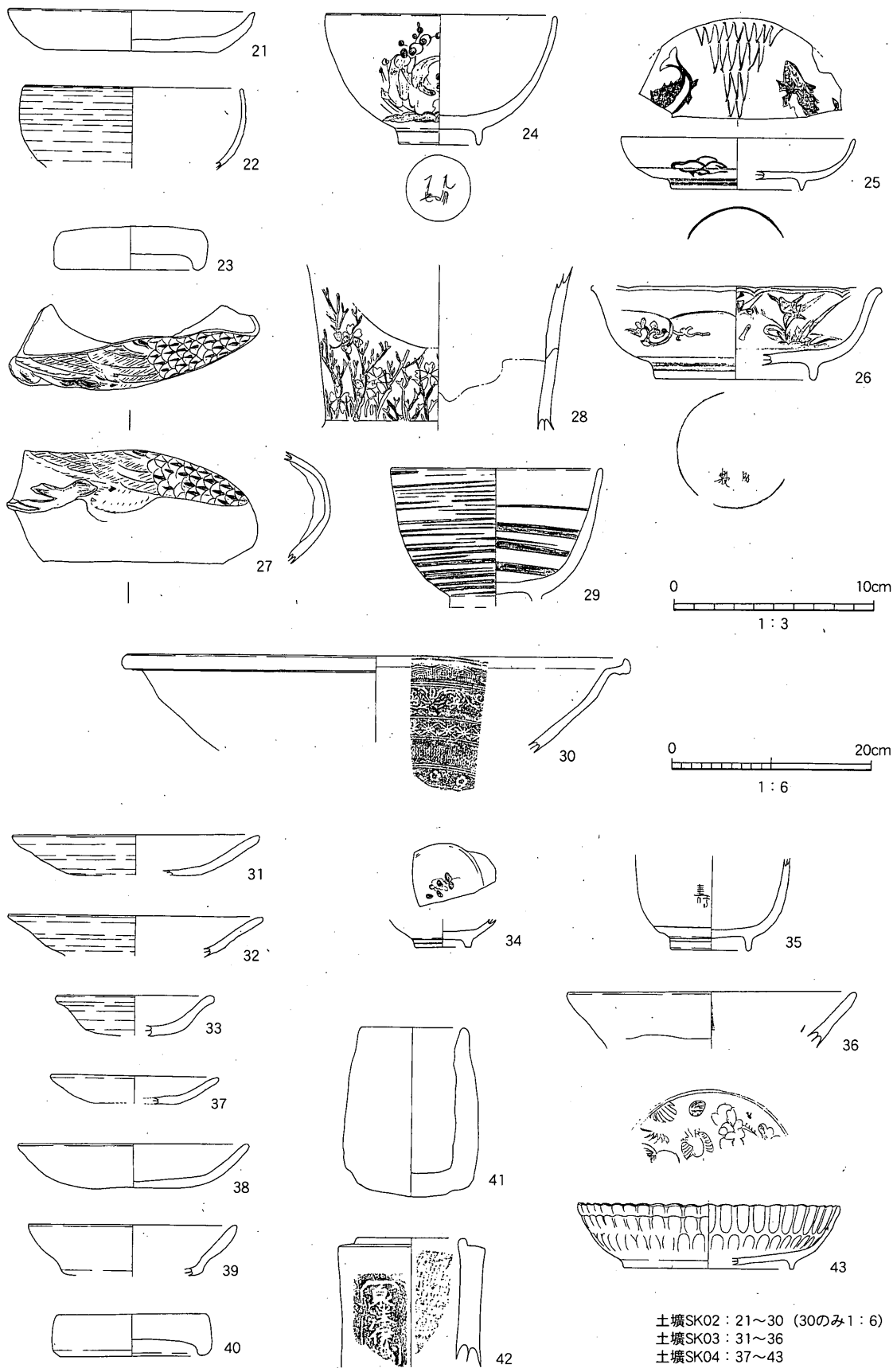
24～27は肥前系磁器である。24は碗である。圏線内に文字が書かれる。18世紀前半。25は皿である。内面に蒟蒻印判、高台内に圏線が施される。高台端部に離砂がみられる。18世紀前半。26は皿である。高台内外面に圏線が施され、圏線内に文字が書かれる。内外面には染付。17世紀末～18世紀初頭。27は水鳥形置物？である。外面底部には透明釉が施され、黄、赤、黒、うす茶（紫）を使い上絵付けを行う。年代は不明である。

28～30は陶器である。28は京・信楽系瓶？で窓がある。外面の枝を鉄絵、花を金彩で描く。年代は不明である。29は肥前系刷毛目碗である。内外面に刷毛目。高台内には渦巻状に刷毛目文が施される。高台端部には離砂がみられる。17世紀後半。30は肥前系三島手鉢である。内面には印花文が描かれる。内面は白泥象嵌後、透明釉を掛ける。17世紀後半。その他、カキ、サザエ、ハマグリなど貝類が多量に出土している。



第１調査区　石組暗渠：1～4
第２調査区　礎石柱建物跡：5～11、石組溝：12
第４調査区　石敷：13～15、土壙SK01：16～20

第８図　第１、２、４調査区出土遺物

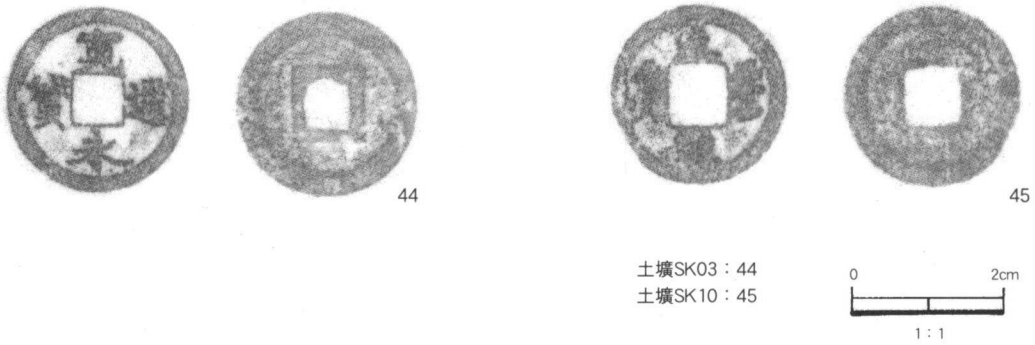


第９図　第４調査区出土遺物

③　**土壙 SK03 出土遺物**（第 9、10 図、図版 14）

31 ～ 33 は産地不明の土師質土器皿である。31 は内面ナデ、口縁部に油煙痕が残る。年代は不明である。32 の年代は不明である。33 は底部外面にヘラ切り痕？、年代は不明である。

34、35 は磁器である。34 は肥前系小碗である。底部内面に染付、高台に圏線が施される。高台内は無釉である。1630 年～ 1650 年。35 は肥前系碗で器形は筒丸状である。壽の文字が書かれる。1650 年～ 1690 年。16 は肥前系の陶器皿である。内面に鉄絵。1580 年～ 1610 年。寛永通宝(44) が出土している。



第 10 図　第 4 調査区出土遺物

④　**土壙 SK04 出土遺物**（第 11、13 図、図版 13、14、18）

37 ～ 42 は土師質土器である。37 は産地不明の灯明皿である。内面ナデ、口縁部に油煙痕がある。胎土は淡橙色系である。年代は不明。38 は産地不明の灯明皿である。内面ナデ、油煙痕がある。底部は回転糸切り離しで、胎土は淡橙色系である。年代は不明。39 は産地不明の皿である。内外面ナデ、年代は不明である。40 は産地不明の焼塩壺蓋である。内面には布目痕がある。18 世紀。41 は産地不明の焼塩壺である。頸部内面にナデ、体部内面に細かい布目圧痕がみられる。外面は被熱のため調整不明。17 世紀。42 は産地不明の焼塩壺である。体部内面に布目圧痕がある。刻印「泉湊伊織」あり。1730 年～ 1770 年。

43、46、47 は磁器である。43 は中国（景徳鎮窯）の皿である。成形は輪花型打ちによる。高台内に放射状のカンナ削り痕がみられる。畳付けには離れ砂が付着している。口縁端部は釉ぎれ。16 世紀末～ 17 世紀初頭。46 は肥前系の染付碗蓋である。内面は圏線内宝文、18 世紀前半。47 は肥前系の染付碗である。内面は擦痕。高台の圏線内には文字が書かれる。18 世紀中～後半。

48 は軟質施釉陶器である。産地、器種ともに不明である。胎土は軟質で灰白色を呈する。高台内に刻印、年代は不明である。

49 ～ 53 は陶器である。49 は肥前系陶胎染付碗である。外面に鉄絵で圏線と蔓を、呉須で葉が描かれる。17 世紀末～ 18 世紀初頭。50 は肥前系刷毛目碗である。17 世紀後半。51 は肥前系京焼風碗である。高台は露胎、17 世紀後半。52 は肥前系大皿である。器表面は全体的に荒れている。釉薬剥離。底部内面に釉剥ぎ。17 世紀前半。53 は京・信楽系の灰落しである。内面には透明釉、外面は白土のち透明釉が施される。底部外面はヘラ切り。18 世紀。

54 は焼締陶器である。堺系の擂鉢である。内面には櫛目、焼台痕がみられる。外面は横位ナデが施される。18 世紀。

82、83 は均整唐草文の軒平瓦である。84 ～ 87 は軒丸瓦である。

⑤ SK06 出土遺物（第 11 ～ 13 図、図版 16、18）

55 ～ 60 は年代不明の土師質土器である。55 は産地、器種ともに不明である。内面はナデ。底部外面はヘラ切り後ナデが施される。56 は産地不明の手づくねの皿である。内外面はナデ、底部外面はナデ後の板状圧痕？がみられる。57 は産地不明の皿である。底部外面はヘラ切り後、ナデが施される。58 は産地不明の皿である。底部外面は回転糸切り後の板状圧痕がみられる。59 は産地不明の皿である。底部外面には回転糸切り後の板状圧痕がみられる。60 は産地不明の焼塩壺蓋である。内外面はナデが施される。

61 ～ 63 は磁器である。61、62 は中国（景徳鎮窯）の磁器皿である。16 世紀末～ 17 世紀初頭。63 は肥前系白磁碗である。全面に釉ハゼ。高台は露胎であり、離砂がみられる。17 世紀前半？。

64 ～ 72 は陶器である。64 は肥前系皿である。胎土目がみられる。内外面は回転ナデ、底部外面はケズリ が施される。16 世紀末。65 は肥前系皿である。体部の下部外面のみ無釉であるほかは、オリーブ灰色の釉が施される。16 世紀末～ 17 世紀初頭。

66 は肥前系甕である。外面は線刻文と貼付文が施される。内面は同心円状の当て具痕がみられる。全体的に鉄釉が掛かる。口縁部端面のみガラス 質の釉がみられない。16 世紀末～ 17 世紀前半。

67 は煙管雁首である。88 は軒丸瓦である。

⑥ SK09 出土遺物（第 12 図、図版 17）

68 ～ 70 は土師質土器である。68 は産地不明の皿である。底部外面にはナデが施され、一部に板状圧痕がみられる。年代不明。69 は産地不明の皿である。底部外面はヘラ切り後、ナデが施され、一部に板状圧痕がみられる。年代不明。70 は産地不明の焼塩壺である。成形は輪積成形。内面に布目痕がある。外面はナデが施される。18 世紀。

71 は肥前系磁器碗である。見込みに手描き五弁花の染付。二重方形枠内に「渦福」銘。18 世紀前半？。

72 は備前系焼締陶器鉢である。外面カキ目、内面は回転ナデが施される。年代不明。

73 は京・信楽系陶器瓶？である。外面は灰黒色の鉄絵が描かれ、内面は施釉が施される。年代不明。

⑦ SK10 出土遺物（第 10、12 図、図版 17）

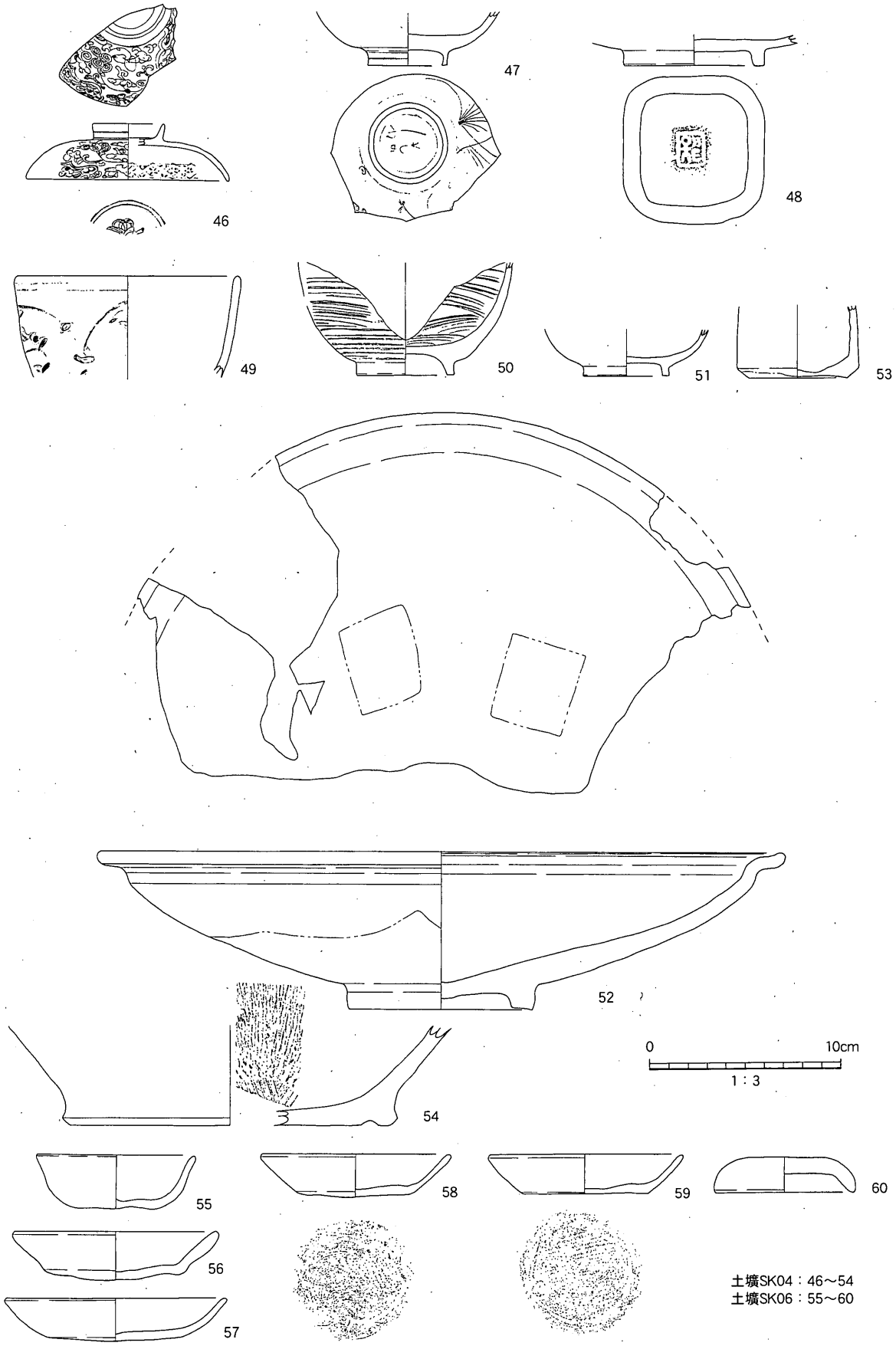
74 ～ 78 は土師質土器である。74 は産地不明の皿である。口縁部に油煙痕がみられる。底部外面は回転糸切り。年代不明。75 は産地不明の皿である。底部外面はヘラ切り後ナデが施される。一部に板状圧痕がみられる。年代不明。76 は産地、器種ともに不明である。底部外面は回転糸切り痕？がみられる。年代不明。77 は産地不明の焼塩壺蓋である。外面は指頭圧痕、内面はナデが施される。年代不明。78 は産地不明の焼塩壺である。17 世紀。

79 は中国（景徳鎮窯）の磁器（唐子文）碗である。見込みに圏線、口縁部に砂が付着している。口縁部内面の釉は虫食い状である。16 世紀末～ 17 世紀初頭。

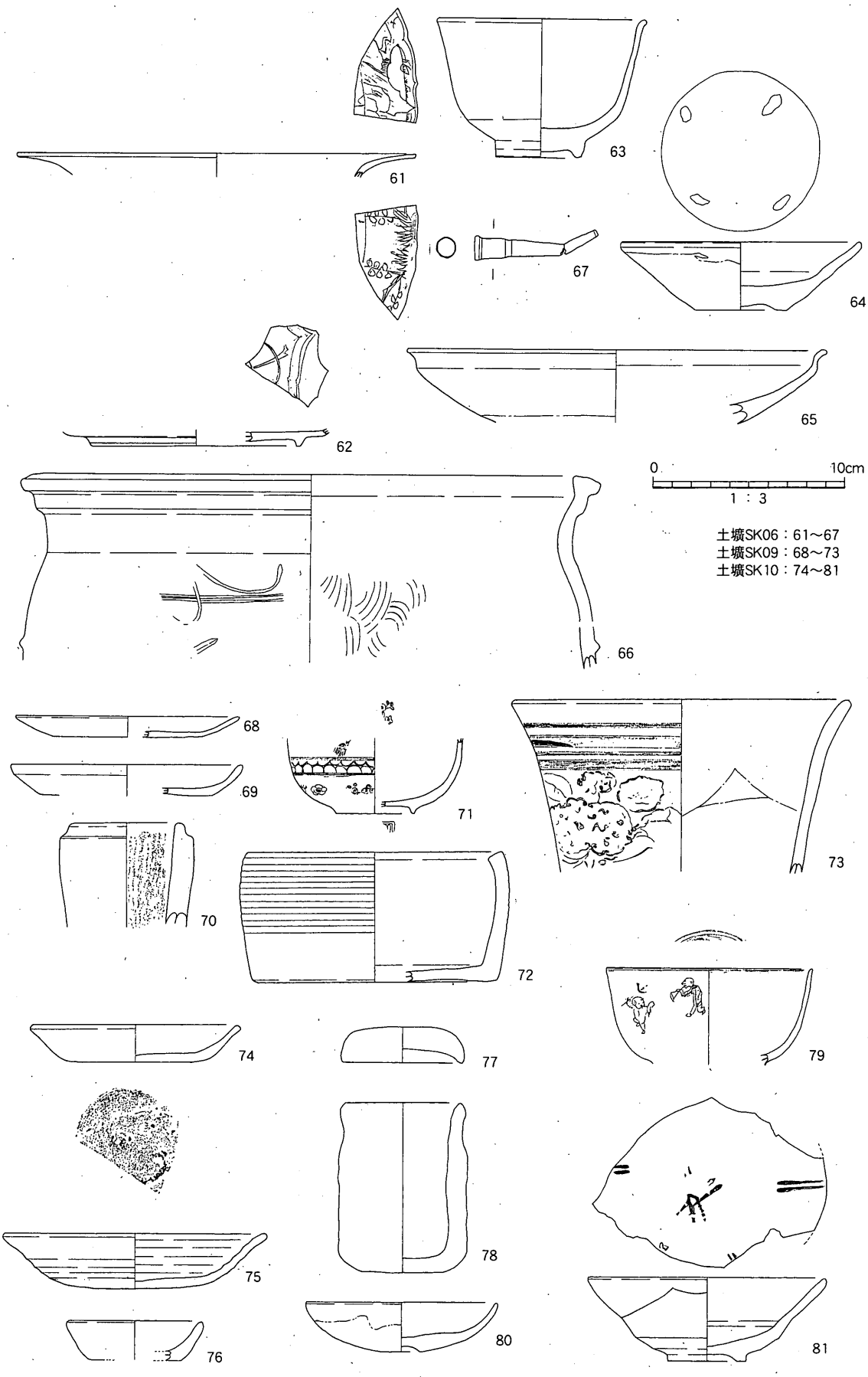
80、81 は陶器である。80 は肥前系皿である。灰オリーブ色の施釉である。外面は釉薬が点在する。底部外面はヘラ切り未調整である。16 世紀末～ 17 世紀初頭。81 は肥前系皿である。内面は鉄絵が描かれる。内面と体部はナデが施される。体部下方ケズリ 、高台内面には煤が付着している。1580 年～ 1610 年。

古銭 45 の文字については判読されない。

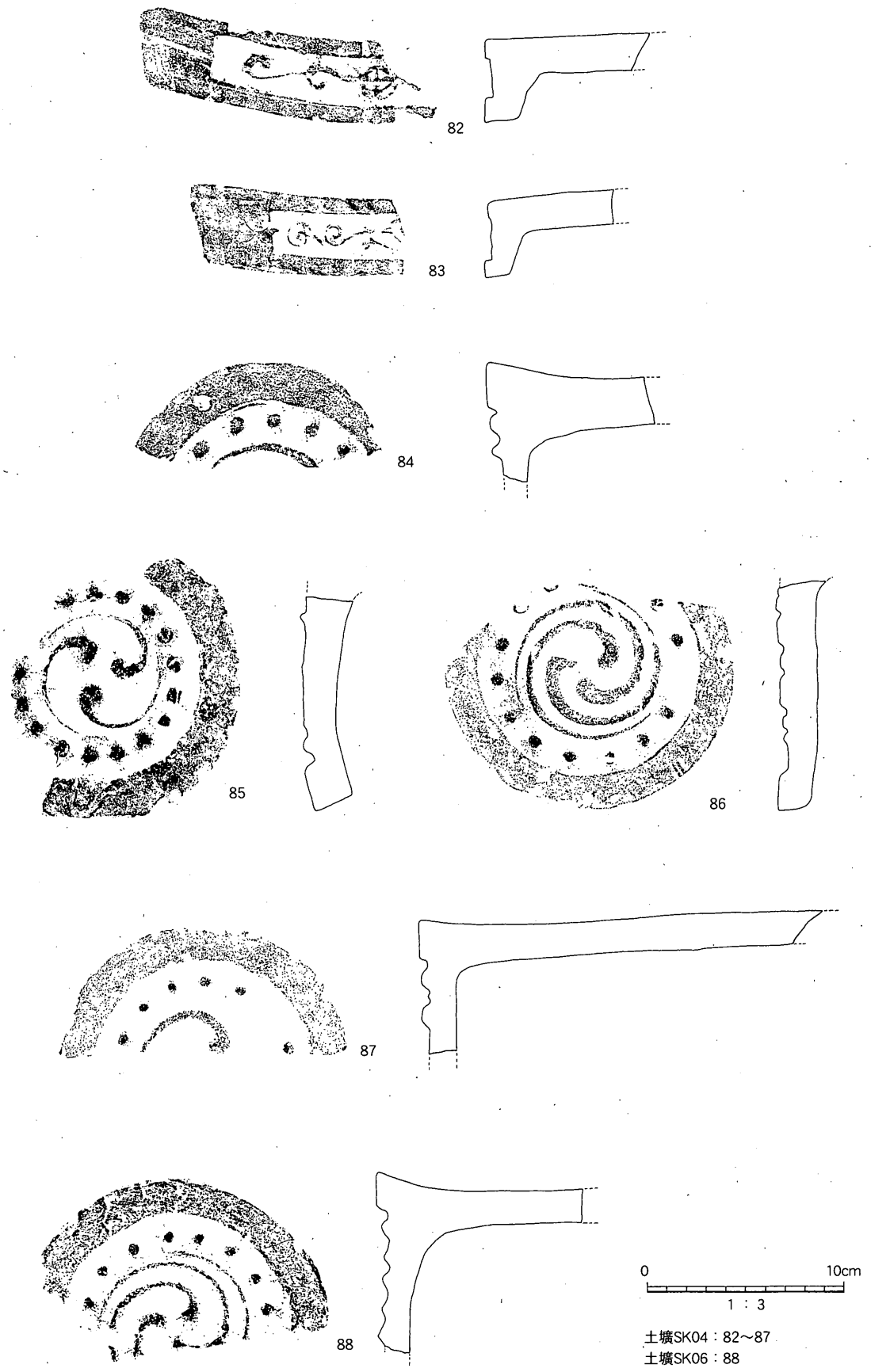
土壙群は複雑に重なり合っているが、出土遺物が示す年代観より、概ね、土壙 SK10 → 06 → 01・03 → 02 → 09 → 04 といった遺構の変遷過程が考えられる。



第 11 図　第 4 調査区出土遺物



第 12 図　第 4 調査区出土遺物



第 13 図　第 4 調査区出土遺物

4　まとめ

第１、３調査区では、助任川に面した石垣の上部は近年の開発のため破壊されていたが、石垣の下部および裏込栗石を検出した。当時の曲輪内の高さでの石垣の幅は 7m と推定でき、構造は現存している部分と同じであることが確認できた。また、石組暗渠の検出により、排水施設の地下構造が初めて明らかになった。

第２、４調査区の第１遺構面では、絵図との照合において撃剣場および表屋敷の御台処の一部とされる建物跡の検出、さらには、幕末以降の建物跡が検出され、この御殿跡の使われ方の新たな課題もでてきた。また、第２遺構面では、馬場および馬見所の一部と推定される建物跡の検出、江戸時代中期以前に遡ると考えられる多数の土壙群の検出、さらに、12 代蜂須賀斉昌による大改築時の埋め立ての造成跡が断面により確認された。

今回は、極めて小規模な調査ではあったが、最近の開発のため破壊されてしまったと想定されていた徳島城西の丸御殿跡の構造の一端が明らかにされた。また、各時期の絵図に一致する遺構や今回の発掘調査により初めて明らかになった遺構など、ほぼ良好な状態で保存されていることが判明した。今回の調査結果は、今後、徳島城西の丸御殿跡の構造を明らかにしていく上で、非常に貴重な資料とされる。

（註）

(1)　出土遺物については、『シンポジウム　江戸出土陶磁器・土器の諸問題　Ⅱ資料集』、江戸陶磁器土器研究グループ、1992 年。および『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』、九州近世陶磁学会、2000 年。を参照した。

(2)　「城下水道普請御伺絵図」国文学研究資料館史料館蔵（蜂須賀家文書　整理番号 1323）

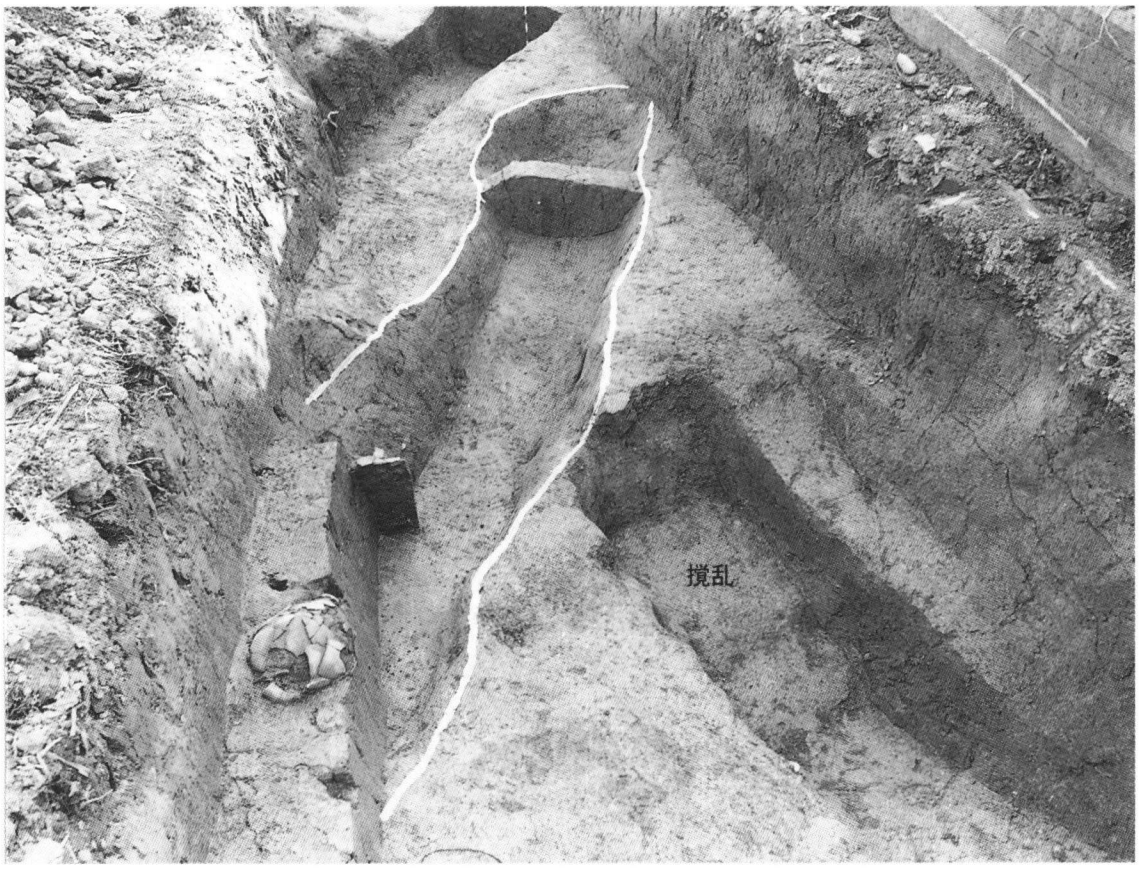
(3)　「徳島城西御丸之図」亀田俊正筆　個人蔵

(4)　「徳島城西御丸指図」国文学研究資料館史料館蔵（蜂須賀家文書　整理番号 1221）

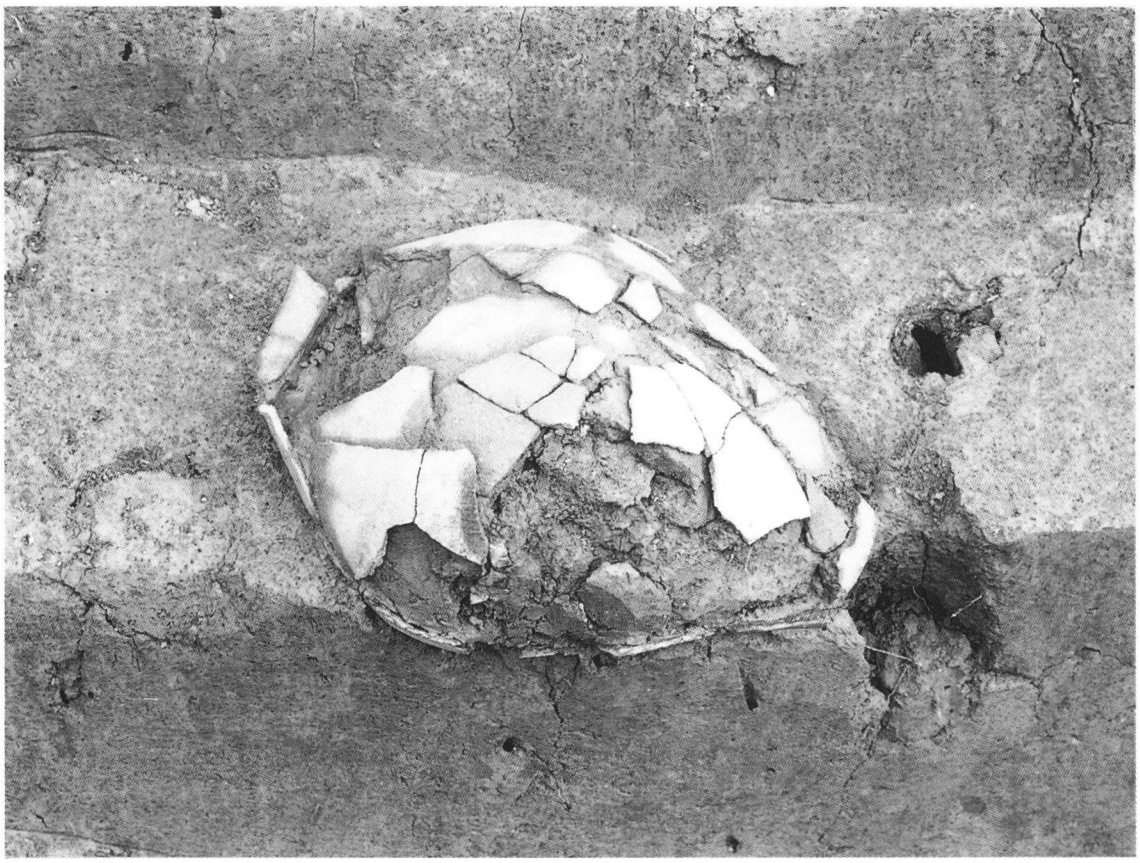
写　真　図　版

Ⅰ　名東遺跡（水路改良工事）

図版1



方形周溝墓 SL24 周溝　　（北から）



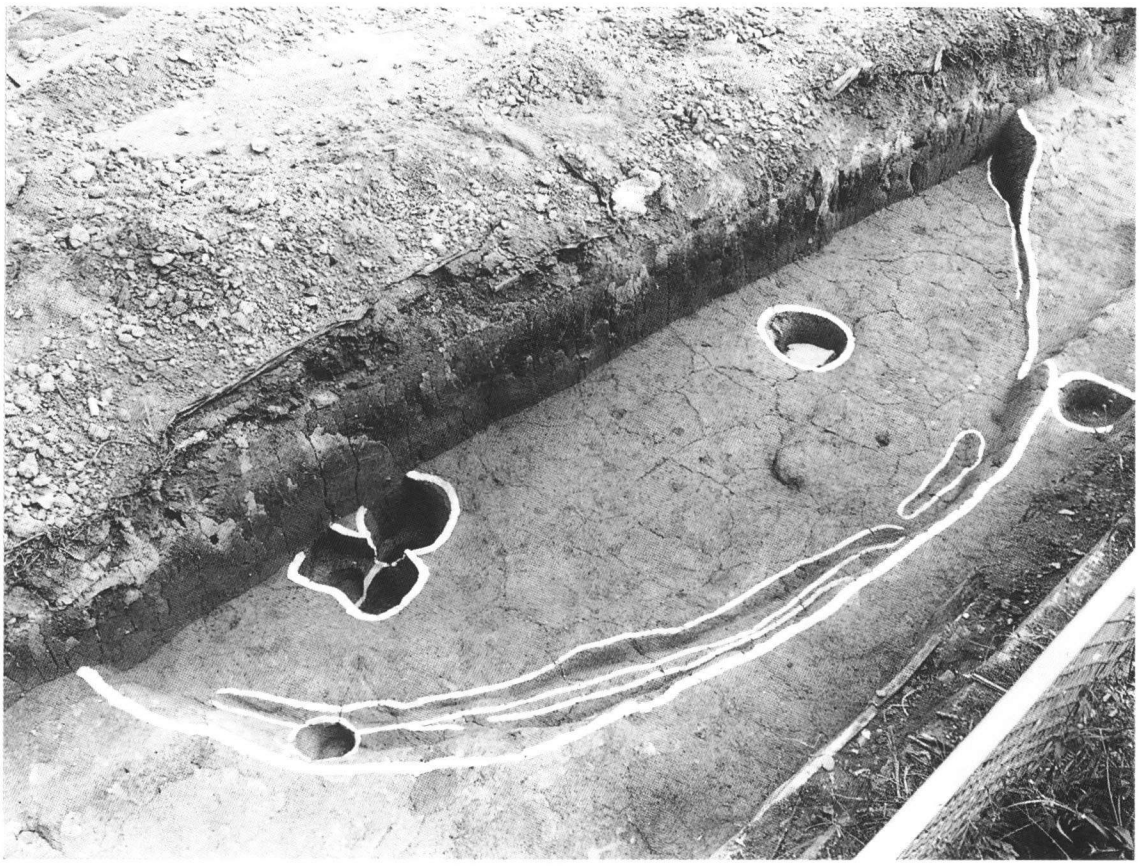
方形周溝墓 SL24 周溝内　甕 1 出土状況　　（西から）

図版2

方形周溝墓 SL24 周溝（左）および溝 SD03　　（南西から）

竪穴住居跡 SA01　　（南西から）

竪穴住居跡 SA02　　（南から）



竪穴住居跡 SA02　　（北西から）

図版4

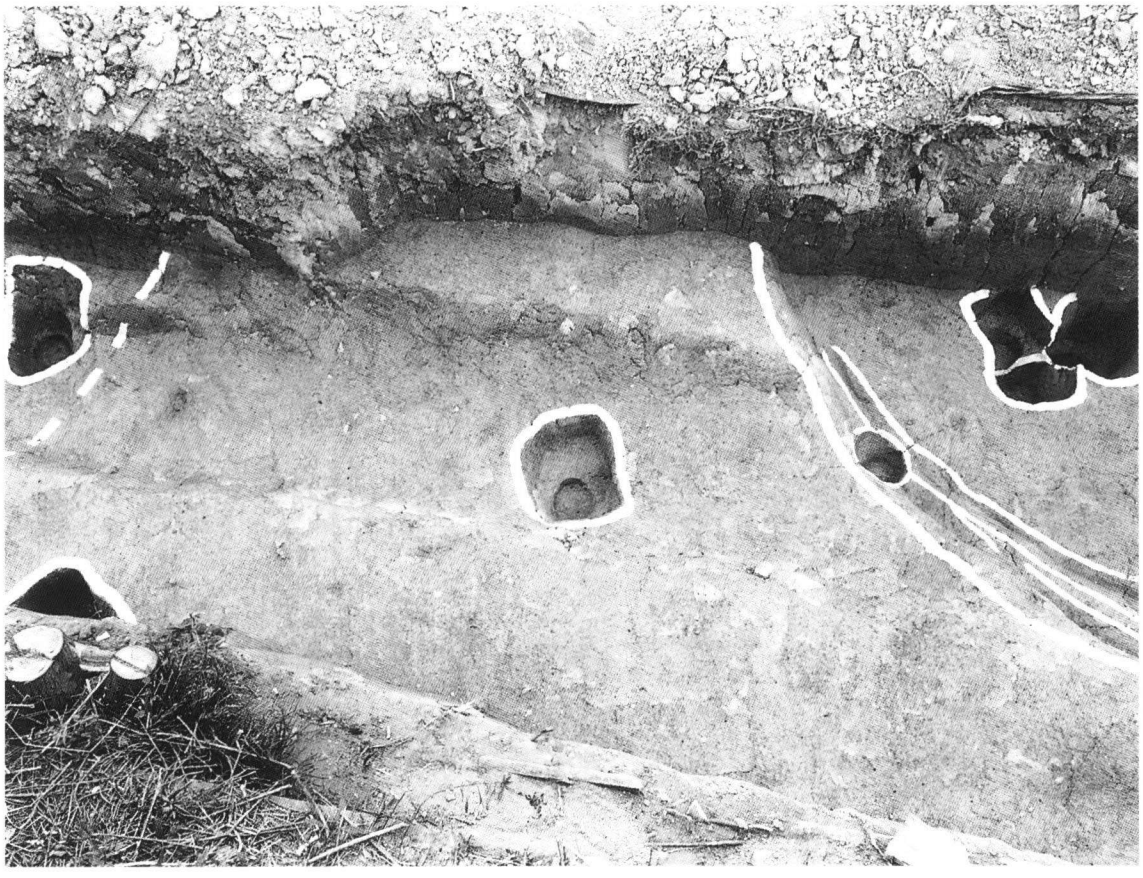
溝 SD04 遺物出土状況　（北から）

溝 SD04 遺物出土状況　（西から）

溝 SD04 底部状況　（北から）

溝 SD04 完掘状況　（南から）

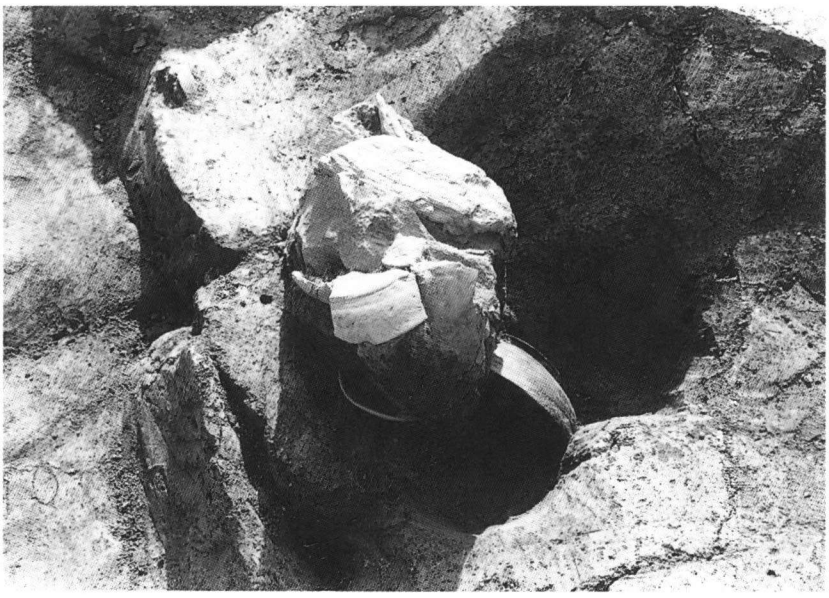
図版6



柱穴列検出状況　（西から）

Pit（柱穴）群検出状況　（北西から）

SP09 遺物出土状況
（南から）



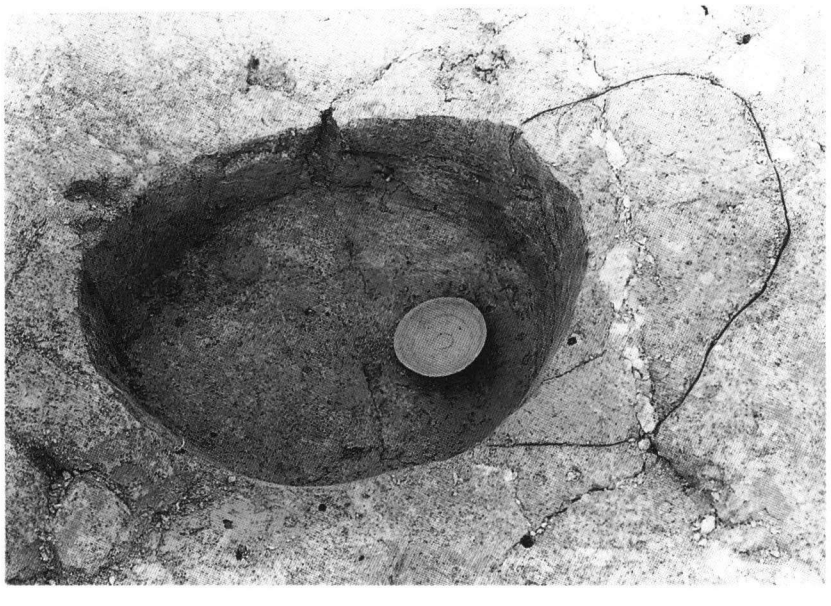
SP14 遺物出土状況
（北東から）

SP14 遺物出土状況
（西から）

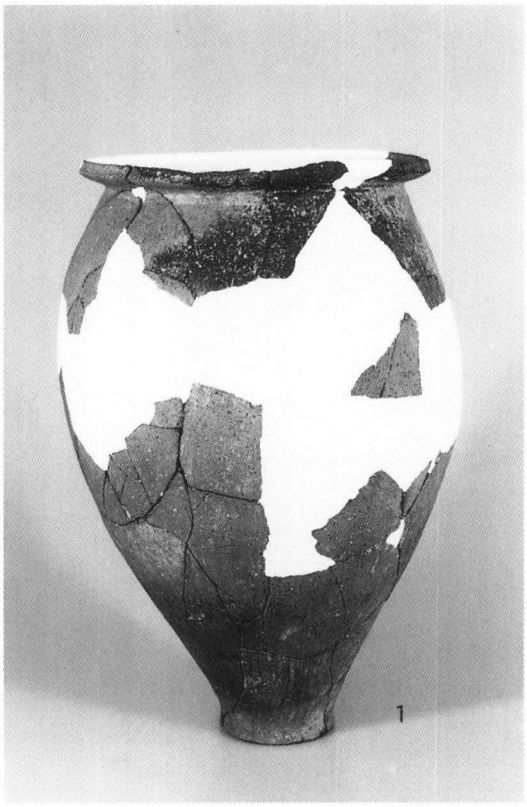
図版8

SP14 遺物出土状況
（北から）

SP14 遺物出土状況
（北から）



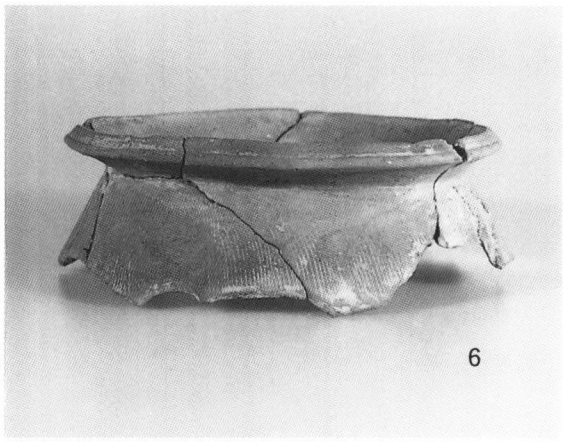
SP17 遺物出土状況
（南から）

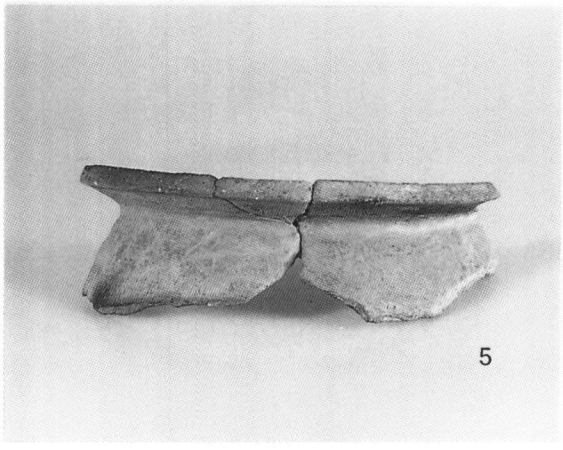


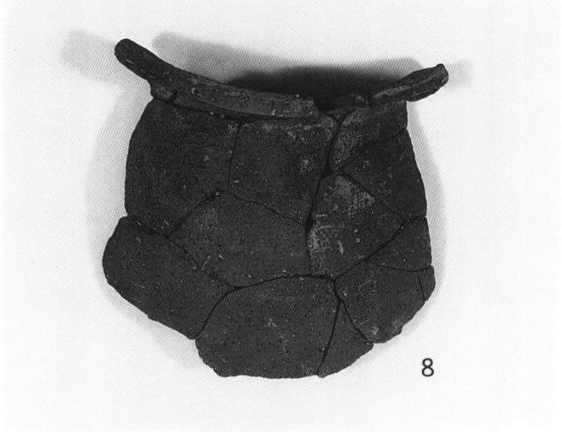
方形周溝墓 SL24 周溝出土遺物

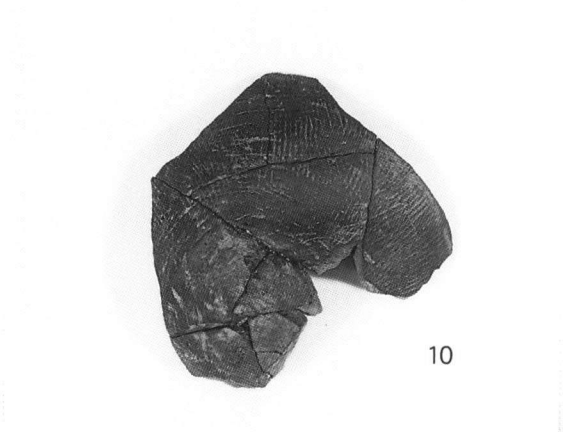
溝 SD04 出土遺物

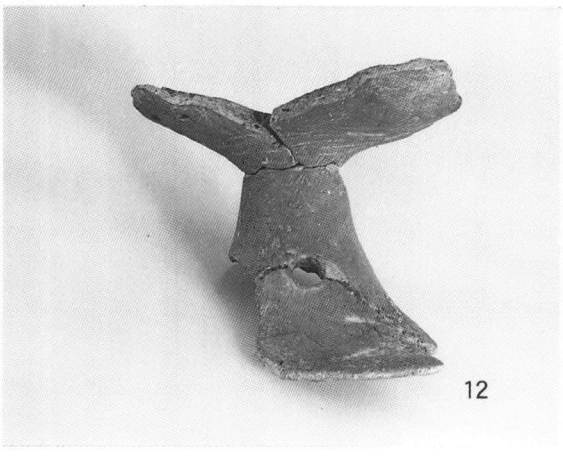
図版10



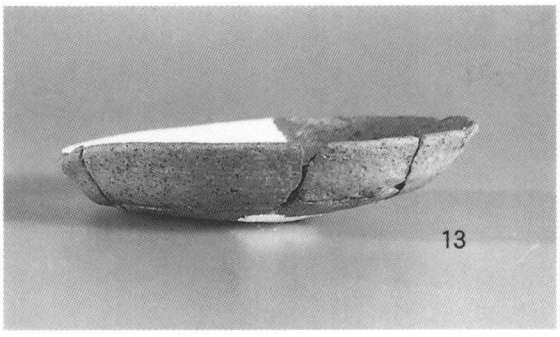


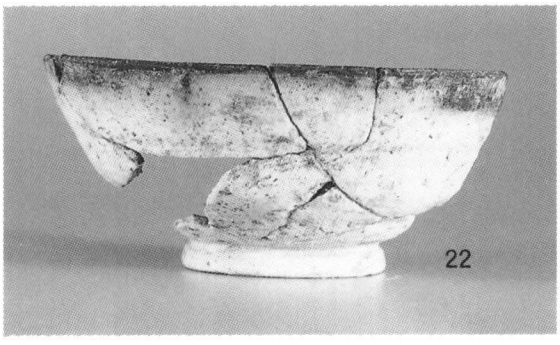


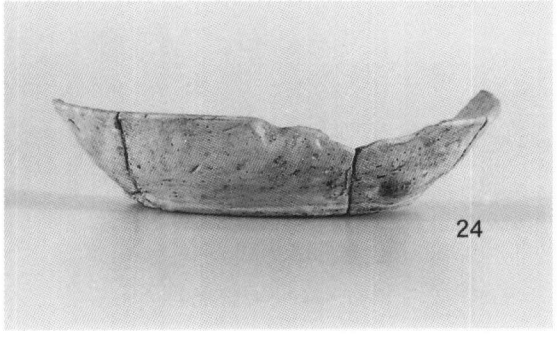


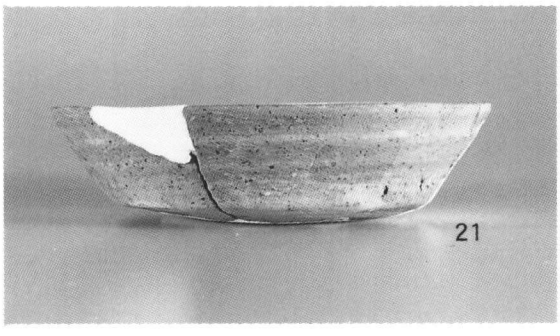


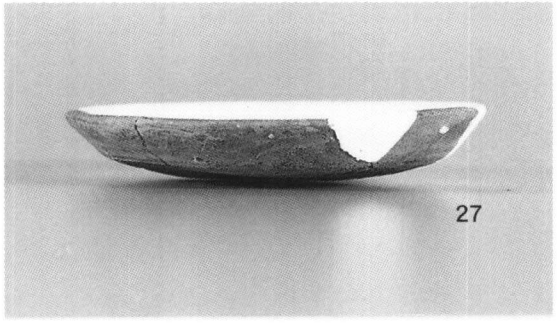
溝 SD04 出土遺物





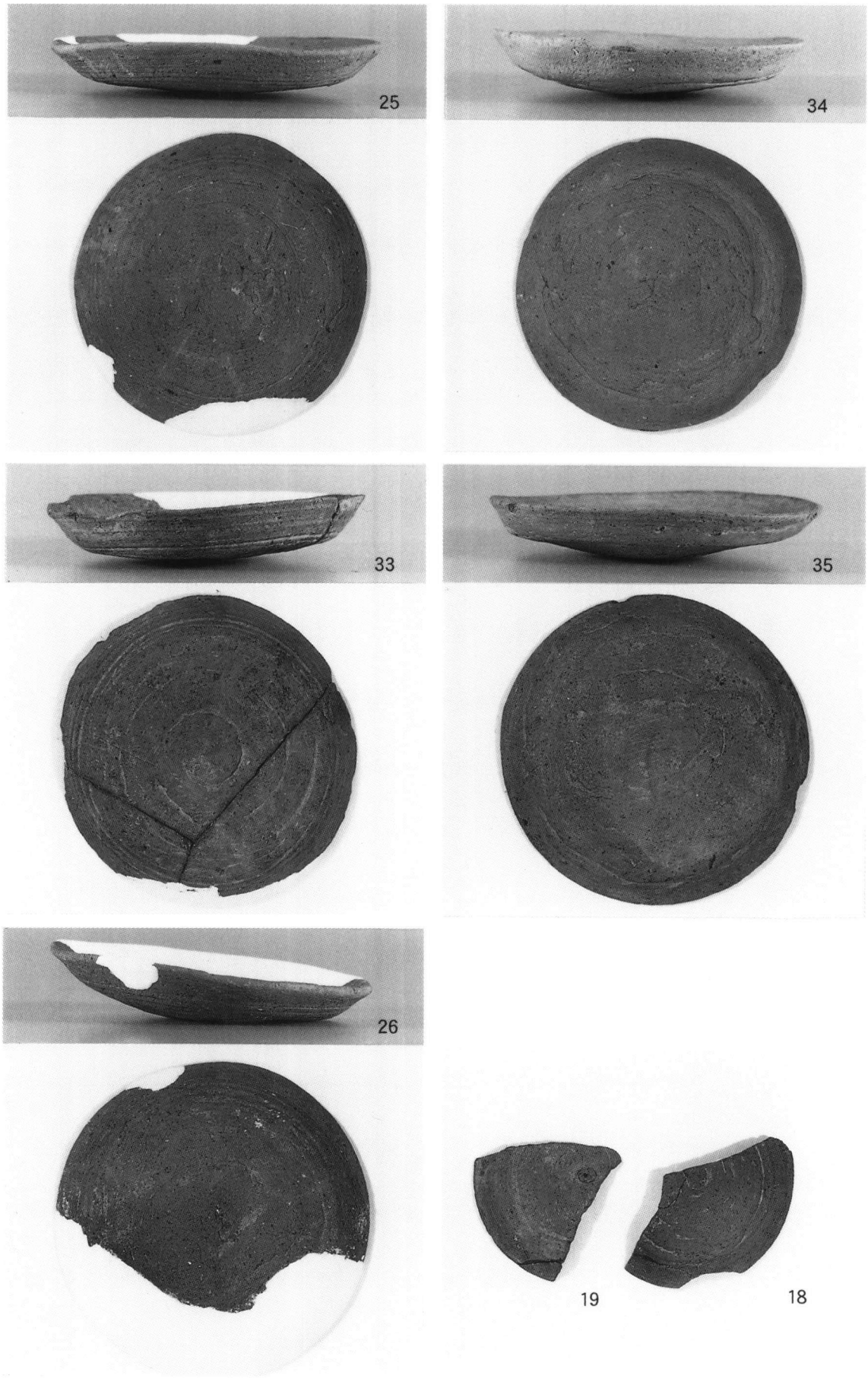






SP08(13)、SP09(16、21、22)、SP14(23、24、27、28)出土遺物

図版12



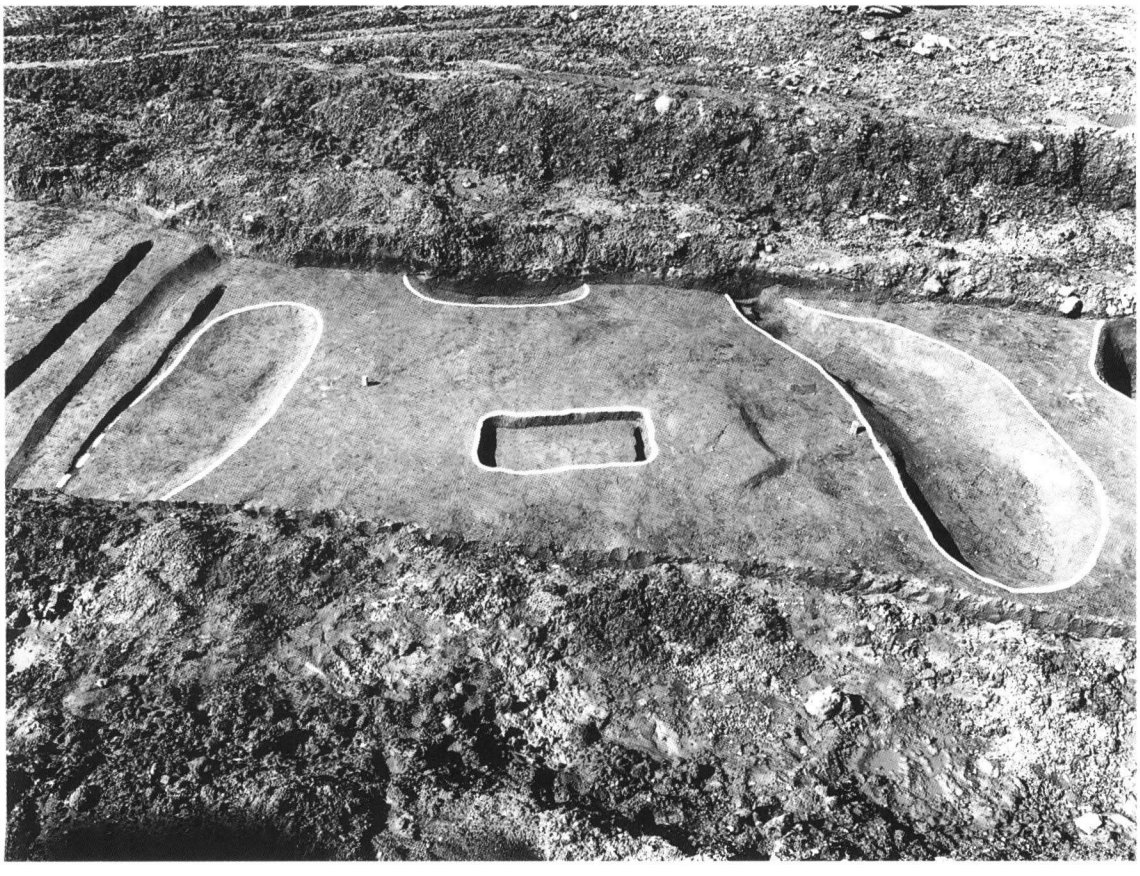
SP09(18、19)、SP14(25、26)、SP16(33)、SP17(34、35)出土遺物

写　真　図　版

Ⅱ　名東遺跡（住宅建設工事）

調査地全景　（東から）

図版2



方形周溝墓 SL25　　（南から）

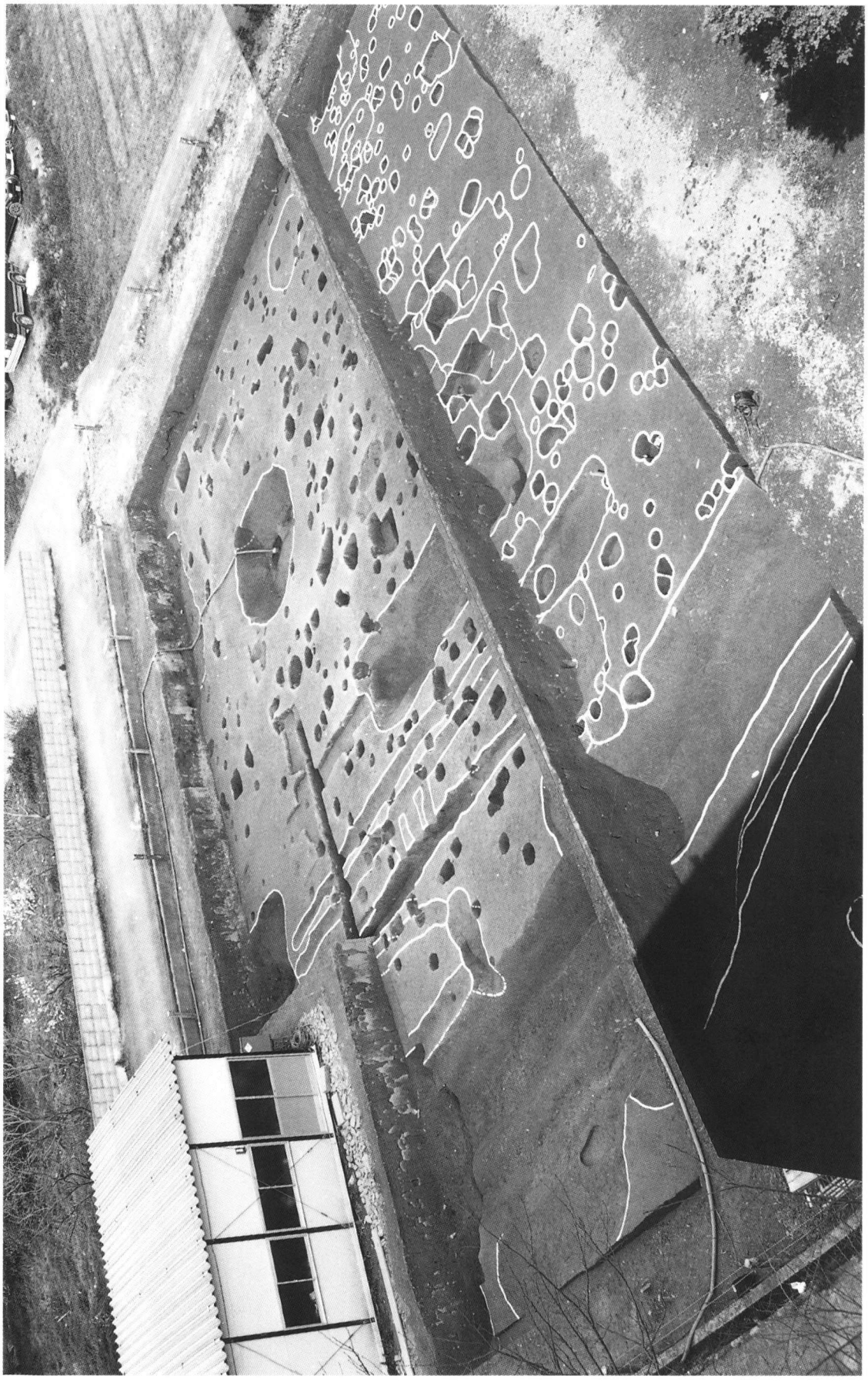
方形周溝墓 SL25 主体部　　（西から）

方形周溝墓 SL26 周溝内遺物出土状況　（南から）

方形周溝墓 SL26 周溝内出土遺物

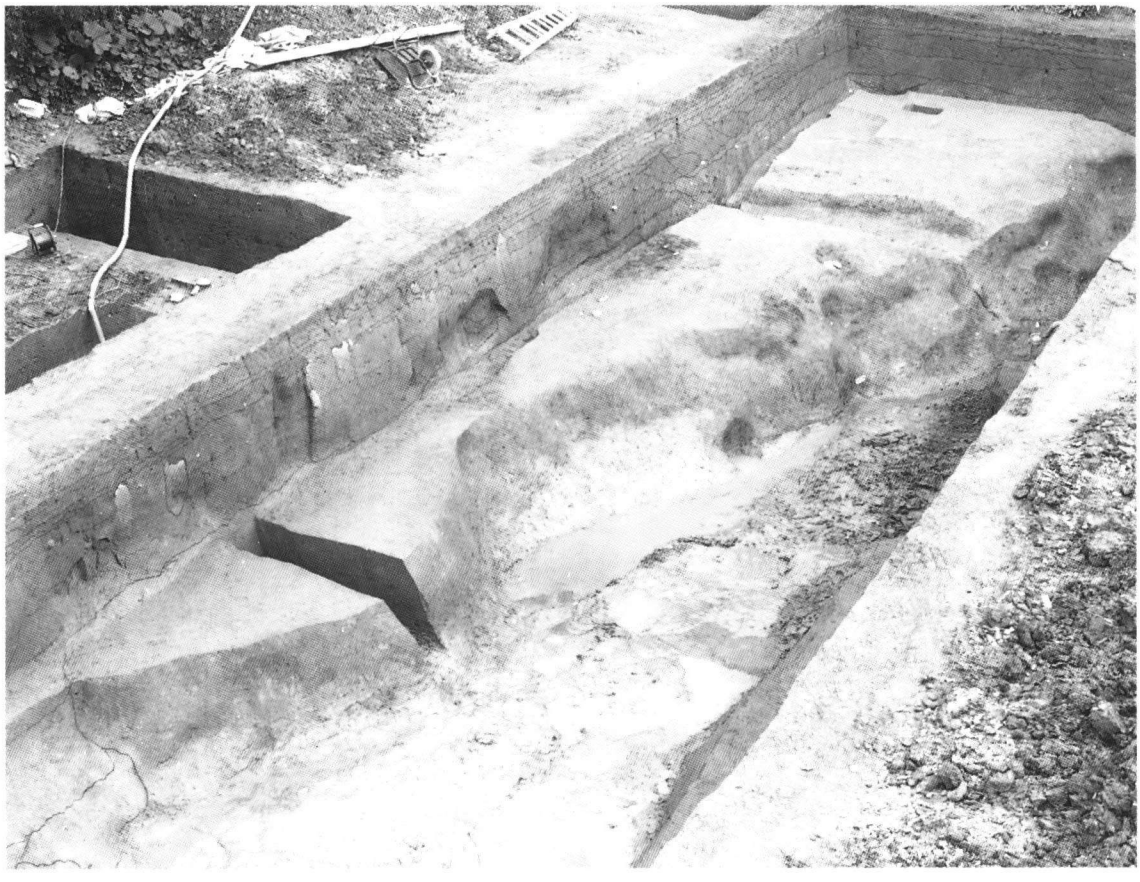
写　真　図　版

Ⅲ　樋口遺跡（学校建設工事）



検出遺構　（南西から）

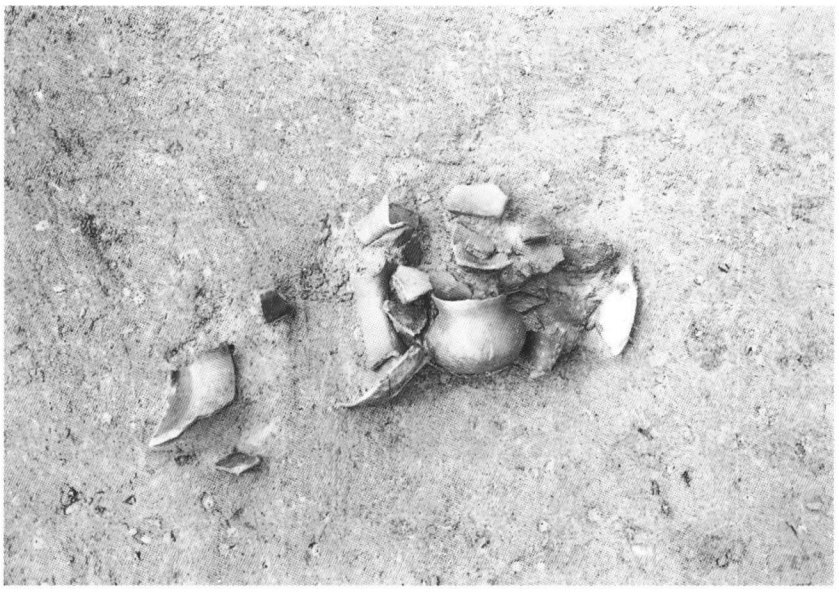
図版2



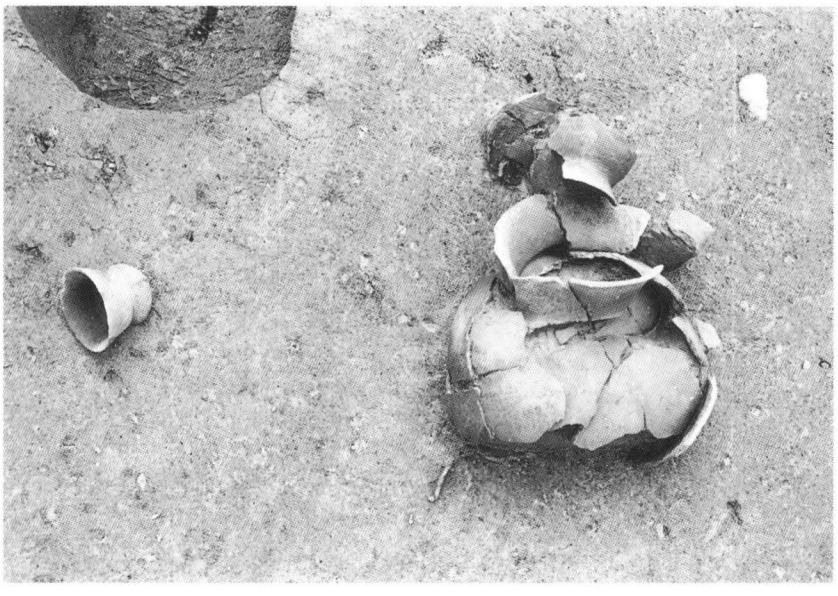
盛土遺構下底面　（北東から）

盛土遺構下底面　（北西から）

盛土遺構下底面炭化物
検出状況（南から）



盛土遺構遺物出土状況
（西から）



盛土遺構遺物出土状況
（東から）

図版4

盛土遺構斜面崩壊土遺物
出土状況　（北西から）

盛土遺構斜面崩壊土遺物
出土状況　（南東から）

盛土遺構斜面崩壊土遺物
出土状況　（東から）

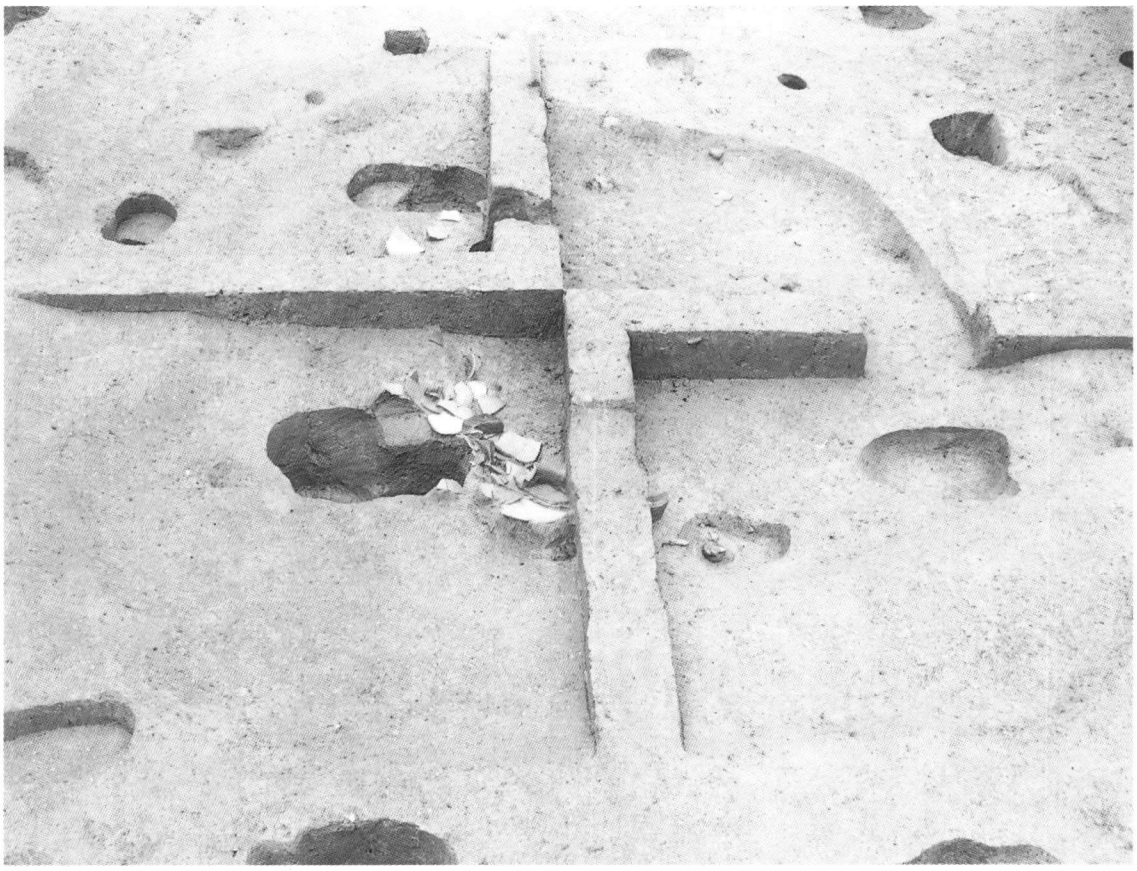
土壙 SK34 遺物出土状況　（南東から）

土壙 SK34 遺物出土状況　（北東から）

図版6

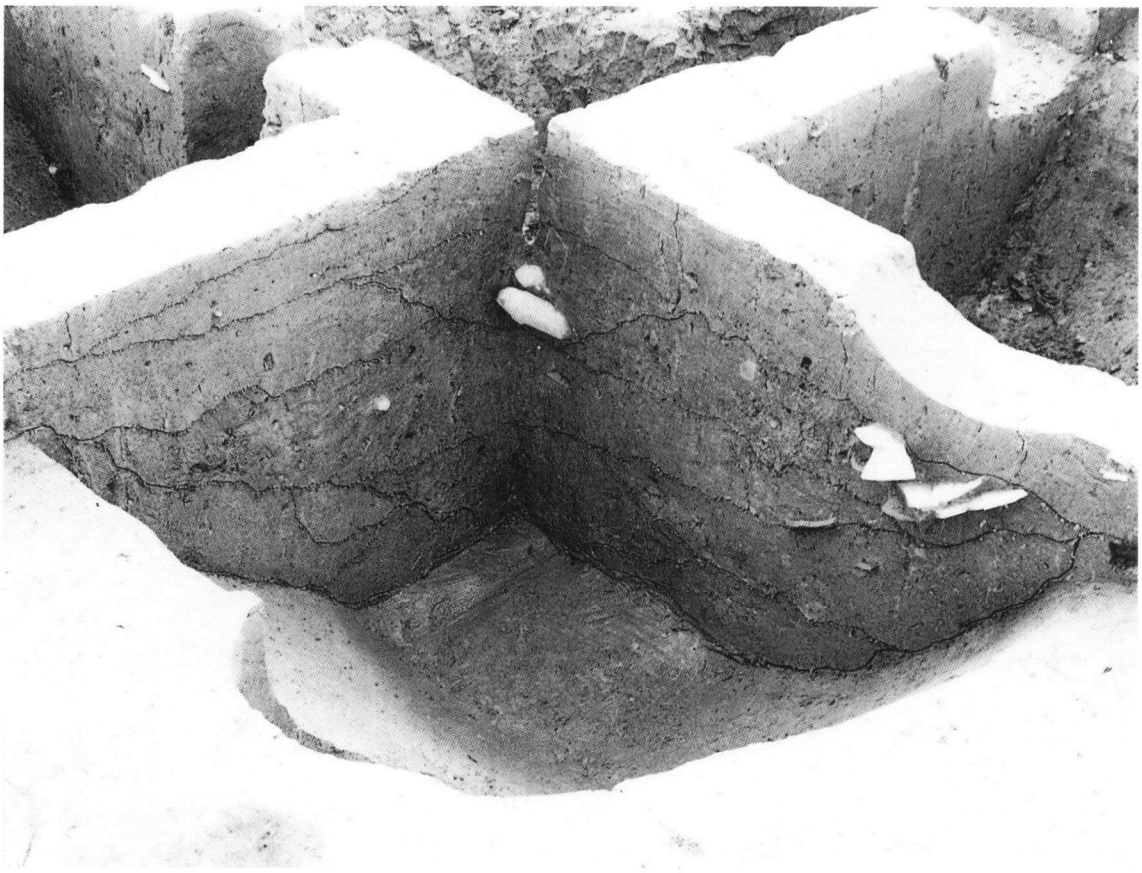
土壙 SK34 遺物出土状況　（北から）

土壙 SK34 遺物出土状況　（東から）

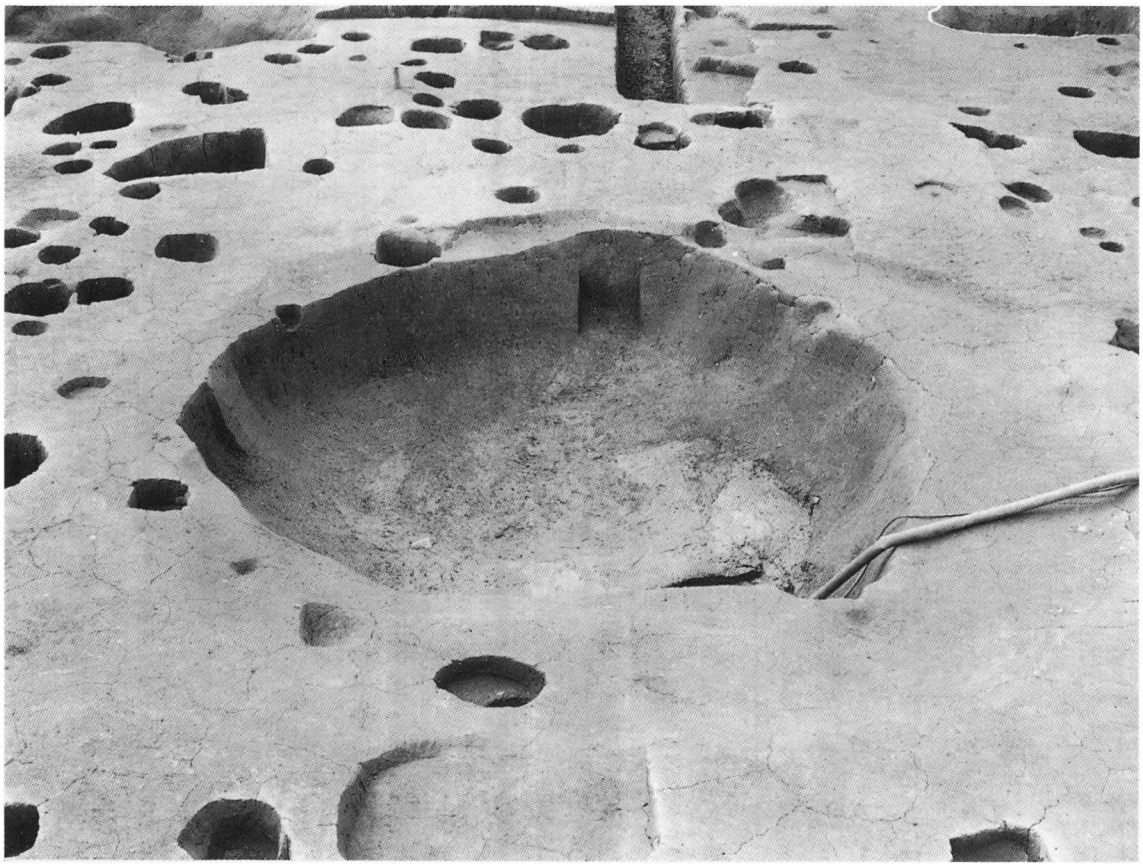


不明遺構 SX01 遺物出土状況　（北から）

不明遺構 SX01 遺物出土状況　（南西から）



不明遺構 SX01 堆積状況　（北西から）



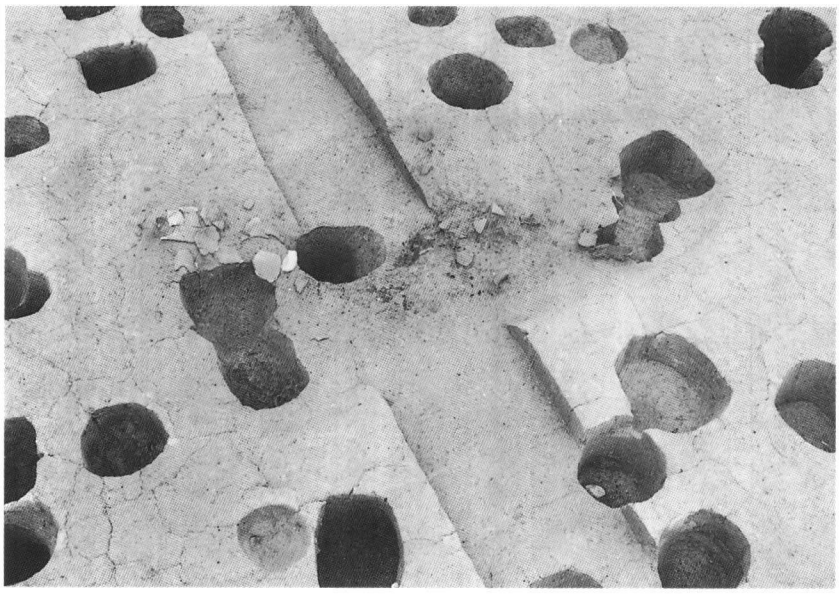
不明遺構 SX01　（東から）

溝 SD03 遺物出土状況　（南から）

溝 SD03 遺物出土状況　（北東から）

図版10

溝 SD01 ～ 03
（南から）



土壙 SK26 遺物出土状況
（南西から）

土壙 SK26 遺物出土状況
（北東から）